

市民ミュージアム
大野城心のふるさと館

紀 要

第 1 号

2 0 2 1



大野城心のふるさと館

Onojo Cocoro-no-furusato-kan City Museum

刊行にあたって

この度、『市民ミュージアム 大野城心のふるさと館紀要第1号』を刊行する運びとなりました。当館は、「歴史」・「こども」・「にぎわい」をキーワードに、多様な利用目的で世代を超えた交流を深める大野城市の施設として平成30（2018）年7月に開館し、今年で3年目を迎えました。

さて、当館の博物館活動を果樹に喩えますと、展覧会や各種講座、体験学習等の活動をおいしい果実として多くの市民に楽しんでもらうことが使命だと考えます。おいしい果実をたわわに実らせるためには、元気な樹木を育てる必要があります。樹木の根は大野城市域の歴史・民俗等に関する資料の収集・保存ですし、幹や枝は調査研究活動にあたります。これら活動の記録や研究の成果を紀要として発表いたします。

ところで、当館は、本市の名称の由来となった特別史跡大野城跡とゆかりの深い韓国公州市にあります国立公州大学校博物館と学術交流協定を締結しています。このことから、本号には百濟考古学を専門とする館長徐程錫（ソ・ジョンソク）教授による大野城跡を含めた古代山城に関する論考を掲載させていただきました。本市の歴史の解明や当館の充実のためには館外の研究者の御寄稿も欠かせないと考えています。今後は形にとらわれない紀要のスタイルも試行したいと考えています。ぜひ忌憚のない御意見や御感想を頂ければ幸いです。

本書が多くの方に活用され、更には市民の皆様のふるさとを考えるきっかけになれば幸いです。

最後になりましたが、調査研究にご協力下さいました関係各位をはじめ、日頃より当館の運営にご支援を頂いている皆様に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

令和3（2021）年10月

市民ミュージアム 大野城心のふるさと館
館長 赤司 善彦

目 次

西日本「朝鮮式山城」の築城記録と百濟山城

ソ・ジョンソク 1

서일본 ‘朝鮮式山城’의 축성 기록과 백제산성

서정석* 15

蓮華文を有する陶板について ～塚原遺跡群出土未報告資料の紹介～

上田 龍児 25

西海道における軒丸瓦一本づくり

主税 和賀子 31

下大利の御大師様～御笠郡の数珠繰り行事について～

山村 智子 41

百済學報第31号所収

西日本「朝鮮式山城」の築城記録と 百済山城

ソ・ジョンソク

〈目次〉

1. はじめに
2. 「朝鮮式山城」の文献記録
3. 「朝鮮式山城」と防御戦術
4. 結び

国文抄録

西日本には百済滅亡後、日本に渡った百済の遺民たちによって築造された山城がある。それを「朝鮮式山城」と呼ぶ。このような朝鮮式山城は百済の遺民によって築造されただけに、百済の山城と密接な関係があるものと考えられる。ただし、百済山城との関連性については、まだほとんど明らかになっていないのが現状である。したがって、ここでは「朝鮮式山城」の築造記録を中心に百済山城との関連性を探ってみよう。

「朝鮮式山城」の築造記録を見ると、最初に水城を築造し、続いて長門国城、大野城、基肄城が順に築造されている。このような事実から見て、当初は水城を築造し、博多湾から大宰府への道を遮断しようとしたことがわかる。これが第一の防御網である。続いて長門国城を築造して関門海峡を統制しようとした。これが第二の防御網である。その次には、対馬から四国を経て河内に至る所々に山城が配置された。これが第三の防御網である。

このように、当時の西日本には水も漏らさぬ防御網が構築されていたが、これは百済が構築した防御体系と非常に類似しており、百済遺民の指揮

の下で山城が築かれたという歴史的事実を裏付けている。

キーワード：朝鮮式山城、水城、長門国城、
清野作戦

1. はじめに

西日本に百済の遺民によって築造された古代山城があることはすでに広く知られている¹⁾。このような山城は、一時、朝鮮式山城と神籠石式山城に分けて捉えることもあった。そのため神籠石式山城の性格をめぐって100年にわたる熾烈な「神籠石論争」が繰り広げられたのである²⁾。

1963年から始まった「おつぼ山神籠石」の発掘をきっかけに、それまで「神籠石」と呼ばれてきた遺跡が、実は防御用の山城であることが明らかになり³⁾、神籠石は「神籠石式山城」と呼ばれるようになり⁴⁾、今では「朝鮮式山城」と「神籠石式山城」の区別なく「古代山城」と呼ばれている⁵⁾。

朝鮮式山城はもちろん、神籠石式山城もまた山城であることが明らかである以上、単純に文献記録にその名称や築城記事が見られるという理由だけで朝鮮式山城と呼び、そのような名称や築城記録が見えないという理由だけで神籠石式山城と呼び、両者を区別視することは問題と言わざるを得ない。ただし、神籠石式山城については、まだ築城時期や築城目的が明らかにされていない以上、その性格や築城時期が明らかになるまでは、両者を相互に区別視するのも全く無意味なことではないと考えられる。今回、朝鮮式山城だけを抜き出して言及するのもそのためである。

周知のように、朝鮮式山城は663年に行われた白村江の戦いの後、日本に亡命した百済貴族の指

1) 차용진, 2005, 「백제지역의 고대산성」(백제문화개관연구원 역사문고 18), 주류성, 365~378쪽.

차용진, 2007, 「제5권 일본에 있는 백제계산성들」『百濟의 建築과 土木』(백제문화사대개원구종서 15), 충남역사문화연구원, 182~191쪽.

2) 小田富士雄, 1983, 『北九州瀬戸内の古代山城』, 名著出版, 16~22쪽.

3) 鏡山猛 外, 1965, 「おつぼ山神籠石」, 佐賀縣 武雄市: 小田富士雄 編, 1983, 『北九州瀬戸内の古代山城』, 名著出版, 122~181쪽. 神籠石은 神籠石式山城으로 부르게 되었고, 4)

4) 齊藤忠, 1968, 「日本古代遺迹の研究」, 吉川弘文館, 168쪽. 이제를 朝鮮式山城과 神籠石式山城을 구별하지 않고 다 같이 고대산성으로 부르고 있다. 5)

5) 小野忠熙, 1983, 「石城山神籠石」『北九州瀬戸内の古代山城』, 名著出版, 212~213쪽.

向井一雄, 2017, 『よみがえる古代山城』, 吉川弘文館, 8쪽.

揮の下、西日本に築城された山城をいう。そのような山城を「朝鮮式山城」と呼ぶ理由もそこにある。言い換えれば、韓国スタイルの山城という意味である。

このように百済貴族の指揮の下で誕生しただけに、朝鮮式山城が百済山城と密接な関係があるということは容易に推測できる⁶⁾。しかし、いまだに両者の関連性はそれほど明らかになっていない。両者を直接比較できる十分な発掘調査が行われなかったからである。したがって、ここでは朝鮮式山城の築城に関する文献記録を検討し、それに基づいて百済の山城と西日本の朝鮮式山城との関連性を探ってみよう。

2. 「朝鮮式山城」の文献記録

先に説明したように、西日本の古代山城は一般的に朝鮮式山城と神籠石式山城に分けていることが一般的である。ここでいう朝鮮式山城とは、『日本書紀』や『続日本紀』のような文献記録に城郭名称や築城記事、または修築の記事が登場する城郭のことで、山城遺構は存在するがその名称や築城記事などが文献記録にない城郭を「神籠石式山城」という。文献記録に登場するか否かが基準となるわけである。

日本にはこのように数は少ないものの築城記事を有する山城があり、築城時期がはっきりとわかる山城が存在する。しかしながら、ゆかりの地となる百済には山城は多いものの、築城時期を知ることができる山城はほとんどない。したがって、

今後、百済山城や朝鮮式山城を研究するためには、互いに不足している部分を補完する必要があると考える。そのような点から、まず朝鮮式山城に関する文献記録を見る必要がありそうである。

- A-① この年、対馬、壱岐、筑紫国などに防人を置いて烽火を設ける。また、筑紫に大きな堤を築いて水を貯えた。名づけて「水城」という⁷⁾。
- ② 8月に達率答怱春初を長門国に送って築城させた。達率憶礼福留と達率四比福夫を筑紫国に送り、大野城と椽城の二つの城を築いた⁸⁾。
- ③ この月（11月；引用者）に、倭国の高安城、讃吉国山田郡の屋嶋城、対馬の金田城を築いた⁹⁾。
- ④ 8月に天皇が高安嶺に登って城の修理について議論した。しかし、民衆が疲弊すると思い中止した…冬に高安城を修理して畿内の田税を徴収した¹⁰⁾。
- ⑤ 2月に高安城を修理し、食糧と塩を貯えておいた¹¹⁾。
- ⑥ 2月丁酉に天皇が高安城に行幸した¹²⁾。
- ⑦ 11月に難波に羅城を築いた¹³⁾。
- ⑧ 9月に新城を祝祭した。10月に天皇が高安城へ行幸した¹⁴⁾。
- ⑨ 5月に大宰府に大野城、基肆城、鞠智城など3つの城を修理させた。8月に高安城を修理した¹⁵⁾。

6) 小田富士雄, 1980, 「朝鮮式山城と神籠石」『ゼミナール日本古代史』(F):1985, 『西日本古代山城の研究』, 名著出版, 373等。

서정석, 2013, 「백제산성이 일본 ‘朝鮮式山城’에 끼친 영향」『역사와 담론』67, 호서사학회。

7) 『日本書紀』권27, 「天智紀」, 3년 (664) 丙, “是歲 於對馬島壱岐島筑紫國等 置防與烽火 又於筑紫 築大堤貯水 名曰水城”

8) 『日本書紀』권27, 「天智紀」, 4년 (665) 乙, “秋八月 遣達率答怱春初 築城於長門國 遣達率憶禮福留達率四比福夫 於筑紫國 築大野及椽二城”

9) 『日本書紀』권27, 「天智紀」, 6년 (667) 乙, “是月 築倭國高安城 讃吉國山田郡屋嶋城 對馬國金田城”

10) 『일본서기』권27, 「天智紀」, 8년 (669) 乙, “秋八月丁未朔丁酉 天皇登高安嶺 議欲修城 仍恤民疲 止而不作… 是冬 修高安城 收畿内之田稅” 84 『百濟學報』제31호

11) 『일본서기』권27, 「天智紀」, 9년 (670) 乙, “二月… 又修高安城 積穀與鹽”

12) 『일본서기』권29, 「天武紀」, 4년 (676) 乙, “二月… 丁酉 天皇幸於高安城”

13) 『일본서기』권29, 「天武紀」, 8년 (680) 乙, “十一月… 仍難波築羅城”

14) 『일본서기』권30, 「持統紀」, 3년 (689) 乙, “九月… 且監新城 冬十月… 天皇幸高安城”

15) 『續日本紀』권1, 「文武紀」, 2년 (698) 乙, “五月 令大宰府繕治 大野基肆鞠智三城”

- ⑩ 9月に高安城を修理した。12月に大宰府に三野城と稻積城の二つの城を修理させた¹⁶⁾。
- ⑪ 8月に高安城を廢した¹⁷⁾。
- ⑫ 正月に河内国高安の烽火を廢し、初めて高見の烽火及び大倭国春日の烽火を置いた。8月に高安城へ行幸した¹⁸⁾。
- ⑬ 12月に備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停止した¹⁹⁾。

これが663年以降に築造された朝鮮式山城に関する記録である。非常に簡単な記録ではあるが、文献の記録から次のような幾つかの事実がわかる。

はじめに、朝鮮式山城の築城記録が白村江の戦い以後から現われていることである。周知のように、百済と倭の連合軍は663年8月に行われた白村江の戦いで新羅と唐の連合軍に敗れた²⁰⁾。自然に復興運動の中心地だった周留城も陥落し、多くの百済遺民は日本に亡命した²¹⁾。

このように多くの百済遺民たちが日本に渡った翌年から築城が始まった。そのような点から日本の朝鮮式山城は、唐・新羅連合軍が日本列島を攻撃してくるかも知れないという危機感の中で築城されたものであることがわかる。これを裏付けるのが〈史料B〉ではないかと思う。

B. 總章元(668)年に至って…また消息を聞くと「唐が船を修理することは、表向きは倭国を征伐するというが、実際は新羅を攻撃しようとす

るものだ」と述べ、民衆がその言葉を聞いて驚き、不安に思いました²²⁾。

〈史料B〉は唐が新羅を攻撃しようとすることに對する新羅の人々の不満を語るものであるが、実はどうであれ、実際に唐が日本列島を攻撃するという噂が当時あったことがわかる。また、新羅の人々が噂を聞いて驚き、恐れていたように、日本列島もそうであったことは容易に推測できる。結局、日本の朝鮮式山城は、このような対外的な緊張感の中で築城されたものと見るべきであろう²³⁾。

第二に、前述したように日本の朝鮮式山城は城郭の数は少ないが、正確な築城年代を知ることができるという事実である²⁴⁾。〈史料A〉に見られるように、664年に水城を築造したのを始めに、665年に長門国城、大野城、基肄城などが築城され、667年にも高安城、屋嶋城、金田城などが築城された。

周知のように、日本にある朝鮮式山城の源流といえる百済山城の場合、百済山城として知られている遺跡の数は多いが、実際に築城時期を明らかにできる遺跡はほとんどない。さらに、これまで百済山城と信じられてきた遺跡が百済山城なのかどうかという論争が起きる場合もある。例えば、扶余にある青馬山城は百済山城の代表的な存在として知られているが、青馬山城が百済山城として知られるようになったのは、1932年に百済陳列館長として扶余に來た大坂金太郎が『日本書紀』に登場する得爾辛城を青馬山城に比定してからである²⁵⁾。

16) 『新羅本紀』권1, 『文武紀』, 3년(699) 조, “九月丙寅 修理高安城…十二月甲申 令大宰府 修 三野餘積二城”

17) 『新羅本紀』권2, 『文武紀』, 大寶 원년(701) 조, “八月丙寅 廢高安城”

18) 『續日本紀』권5, 『元明紀』, 和同 5년(712) 조, “正月 壬辰 廢河内國高安烽 始置高見烽 及大倭國春日烽…八月庚申 行幸高安城”

19) 『新羅本紀』권8, 『元正紀』, 養老 3년(719) 조, “十二月戊戌 停備後國安那郡茨城 葦田郡常城”

20) 『日本書紀』권27, 『天智紀』, 2년 8월 조, “…戊申 日本船師初至者 與大唐船師合戰 日本不利而退 大唐堅陣而守 已西 日本諸將與百濟 三不觀氣象 而相謂之曰 我等爭先…官軍敗績”

21) 『日本書紀』권27, 『天智紀』, 2년 9월 조, “九月辛亥朔丁巳 百濟州 柔城始降於唐…明日發船始向日本”

22) 『日本書紀』권7, 『新羅本紀』, 文武王 11年條, 答薛仁貴書, “至總章元年…又通消息云 國家修理船艘 外託征伐倭國 其實欲打新羅 百姓聞之 驚懼不安”

23) 赤司海彦, 2017, 「大宰府と古代山城の誕生」『徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生』(發表資料集), 九州國立博物館・熊本縣教育委員會, 2~3쪽.

24) 서정식, 2018, 「관방유적」『일본속의 百濟 - 유적지』, 중앙역사문화연구원, 74쪽.

25) 최석영, 2003, 「일제 식민지 상황에서 의 부여(扶餘) 고적에 대한 재해석과 '관방명소' 화」『미교문화연구』9-1, 서울대학교 미교문화연구소, 120~124쪽.

大阪金太郎が青馬山城を得爾辛城としたのは明確な根拠があってではなく、内鮮一体を基本方針に定めた朝鮮総督府の植民統治政策を支えるため遺跡を再解釈した結果であった²⁶⁾。その点から青馬山城が百済時代に築城されたのかについては今後詳しく検討する必要がある²⁷⁾。実際、最近になって青馬山城内からは百済・泗沘の横穴式石室墓が発見され²⁸⁾、青馬山城築城時期の見直しが求められている。

また、忠清南道・礼山にある任存城は、百済の復興運動の際に登場する中核的な拠城であると理解されているが²⁹⁾、任存城の立地と構造的な特徴から見て、はたして百済山城なのかについて疑問を抱く見解もあり³⁰⁾、実際最近では城内から統一新羅時代の建物跡が発掘された³¹⁾。極一部分に関する調査であったため、これだけでは断言できないが、少なくとも関連記録や考古学的特徴から見て、現在の礼山郡大興面にある任存城が百済復興運動期に登場する任存城である可能性はそれほど大きくないと考えられる³²⁾。

第三に、築城が答林春初、憶礼福留、四比福夫など百済の遺民によって行われた事実である。そのような点から日本の朝鮮式山城は百済様式の築城法が採用された可能性が高いものと考えられる³³⁾。したがって、これからはこのような山城を「朝鮮式山城」という曖昧な名称で呼ぶのではなく、「百済式山城」と呼ぶのがより適していると考えられる³⁴⁾。

一方、〈史料A〉でもうひとつ目につくのは、当時の築城に決定的な役割を果たした人物がすべて達率官位の所持者だったという点である³⁵⁾。周知のとおり、百済には16官位があったが、そのうち達率は第2位の官位に当たる。このような達率官位の所持者はすべて30人と定められていたというが、問題はこのような達率官位の官人が王都5部と地方5方の長官を務めたという³⁶⁾。さらに、5方にいた方領は険しい山に位置した方城に駐屯し、700人ないし800人から、多くは1,000人の軍隊を擁していた。豊富な軍事知識と山城を築造した知識を備えていたのである。そのような点で、こうした達率官位の所持者が築城を担当したのは至極当然といえる³⁷⁾。実際、長門国城を築造した答林春初と大野城を築造した憶礼福留は671年に日本の朝廷から大山下という官位を受けることになるが、『日本書紀』には彼らが「閑兵法」（兵法に閑う：兵法に通じているの意）にといて兵法に優れていたことが特記されている³⁸⁾。

3. 「朝鮮式山城」と防御戦術

西日本に位置する朝鮮式山城が〈史料A〉からもわかるように、百済滅亡後、日本に渡った百済の遺民たちの指揮の下、築造されただけに、百済山城と朝鮮式山城が深い関連があることは容易に察するに余りある³⁹⁾。そのため、そうした関連性に対する様々なアプローチがあった。

まず、神籠石論争の最中、関野貞は韓国の踏査

26) 김중수, 2016, 「일제강점기 부여 고석의 제해적과 고석관광의 성격」『文化財』49-1, 국립문화재연구소, 91쪽.
 27) 서정식, 2007, 「사미도성의 땅미채제와 금강」『백제와 금강』, 서경, 109~110쪽.
 28) 김영국 외, 2019, 「부여 청마산성」, 백제문화재연구원, 29~35쪽.
 29) 김정교, 1983, 「百濟 復興軍의 主要 據點에 對하여」『百濟研究』14, 160~162쪽.
 30) 이남식, 1999, 「禮山 鳳首山城 (任存城)의 現況과 特徵」『百濟文化』28, 221~224쪽.
 31) 오종길 외, 2016, 「禮山 任存城 建物址遺蹟」, 백제문화재연구원, 15~33쪽.
 32) 서정식, 2000, 「百濟 5方城의 位置에 對한 試考」『濶西考古學』3, 67~70쪽.
 33) 小田富士雄, 2000, 「日本の朝鮮式山城の調査と成果」『古文化談叢』44, 137쪽.
 34) 성주탁, 1989, 「韓國 古代山城의 日本傳播」『國史館論叢』2, 1쪽.
 西谷王, 1994, 「朝鮮式山城」『岩波講座 日本通史』(제3권) 고대 2, 286쪽.
 서정식, 2012, 「일본 고대산성 연구의 현단계」『백제와 주변세계』, 689쪽.
 35) 연변수, 1996, 「西日本 지역의 朝鮮式山城과 그 성격」『韓國古代史論叢』8, 가락국사적개발연구원, 335쪽.
 36) 『韓苑』권30, 「藩吏部」, 百濟條.
 37) 연변수, 1996, 앞의 논문, 355쪽.
 38) 『日本書紀』권27, 「天智紀」10년 춘정월조, “一以大山下 授達率谷那智首(閑兵法) 木素貴子(閑兵法) 憶禮福留(閑兵法) 答林春初(閑兵法) …”
 39) 박순환, 2000, 「百濟 泗沘羅城의 構造」『古文化談叢』44, 240쪽.

の際に目撃した韓国の古代山城の特徴を探し出し、日本にある「朝鮮式山城」こそ、そのような韓国古代の山城を模倣したものであるという見解を示した⁴⁰⁾。この時、関野貞が提示した韓国古代山城の特徴は次の4つに要約できる⁴¹⁾。

第一に、王宮は平地や丘陵上に位置し、その奥の険山に山城を配置して食糧と武器を備蓄しておく、有事の際にはその山城に入って籠城する。第二に、三国時代の山城の周辺には、必ずそれに関連する多数の古墳が散在する。第三に、土城と石城があるが、山城は主に山峰で求めやすい石材を用いた石城として築城し、平城は土城として築城する。第四に、必ず一ヶ所以上の溪谷部を囲み、稜線から少し下がった所に城壁を築造する。

また、関野貞は「大野城」や「基肄城」のような日本の「朝鮮式山城」こそ、韓国古代の山城を模倣したものであるとした。その後、韓国古代山城と西日本朝鮮式山城の発掘調査が行われ、両者の関係についても様々なアプローチがあり、その結果、西日本朝鮮式山城の源流を百済山城へと探る研究が続いている⁴²⁾。例えば、ソン・ジュタクは西日本の朝鮮式山城に現れた百済山城の特徴として、以下の6つの事象を挙げている⁴³⁾。

第一に、都城体制において、大宰府都城は政庁の都府楼を中心に、後の大野城と前の基肄城、そして西の羅城に当たる水城が位置し、平地城（政庁＋羅城（郭城））＋高地山城（大野城＋基肄城）で構成されているが、このような構造が平地城（王宮＋羅城（郭城））＋山城（扶蘇山城－青馬山城）で構成された泗沘都城と配置体制の面で類似性がある。

第二に、大野城の平面構造は南側と北側に二つの山頂式山城があり、その中央に包谷式山城がある複合式山城の形をしているが、扶蘇山城も山頂式山城と包谷式山城が結合された複合式山城の形をしている。

第三に、築城法において、大野城と扶蘇山城がともに版築技法で築造された土城であり、所々に築石をした痕跡が現れている。

第四に、大野城と扶蘇山城がともに、所々に濠施設が敷設されている。

第五に、大野城の中には倉庫用に使われた建物址があるが、扶蘇山城もその中に軍倉址のような軍事用倉庫が存在する。

第六に、青馬山城は発掘調査がきちんと行われていないため、正確なことは分かっていないが、基肄城のような役割を果たしていた山城と推定される。

このような両者の比較は、文献記録に記された百済遺民による西日本の朝鮮式山城の築造という歴史的事実を立証する興味深い結果ではあるが、両地域の子城に対する本格的な発掘調査が行われる前の話であるため、今日の立場では修正すべき部分があるのも事実である。例えば、複合式山城の場合、一時は百済の典型的な山城として理解されたが⁴⁴⁾、発掘調査によりこのような複合式山城が実のところ百済山城ではないことが確認された。したがって、考古学的な調査に先立ち、西日本の朝鮮式山城に関する文献記録を綿密に分析することが優先されるのではないかと考えられる。実際、西日本にある朝鮮式山城に関連する文献記録を綿密に調べると、次のような事実が見られる。

40) 関野貞, 1913, 「所謂神籠石は山城址なり」『考古學雜誌』4권 2호; 小田富士雄 編, 1985, 『西日本古代山城の研究』, 名著出版, 90~113等。

41) 関野貞, 1913, 위의 논문; 小田富士雄, 1985, 위의 책, 96~99等。

42) 鏡山猛, 1968, 『大宰府都城の研究』, 風間書房。

齊藤忠, 1968, 「城柵考」『日本古代遺跡の研究』, 吉川弘文館。

李進熙, 1977, 「朝鮮と日本の山城」『城』(上田正昭 編), 社会思想社。

成周鏢, 1980, 「大野城小攷」『古文化論攷』, 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行會。

小田富士雄, 1985, 「朝鮮式山城と神籠石」『九州古代文化の形成』下巻, 学生社。

井上秀雄, 1987, 「東アジアのなかの古代朝鮮の城郭」『東アジアと日本』, 吉川弘文館。

서정식, 2013, 「백제산성이 일본 '朝鮮式山城'에 끼친 영향」『역사와 담론』67, 호서학회。

43) 정주탁, 1989, 위의 논문, 18~21等。

44) 윤부영·정주탁, 1977, 「百濟山城의 新類型」『百濟研究』8, 18~22等。

第一に、白村江の戦いの後、日本列島に登場した最初の防御施設は水城である。〈史料 A-①〉によると、水城が築造されたのは664年12月のことである。百済の遺民たちが日本列島に渡ったのが663年9月であっただけに、その翌年にすぐ水城が築造されたわけである。

ところが周知のように、水城は一般的な城郭とは異なり遮断城である。城郭は本来、ひとつの地点から出発し、一定の空間を取り囲んだ後、再び出発点に戻ってこそ完成する。少なくとも、廃合されなくても一定の空間が確保されてこそ城郭といえる⁴⁵⁾。そのような点で、水城は一般的な城郭とは異なる。一定の空間を取り囲んだのではなく、唐・新羅連合軍が九州に上陸した場合に備えて、博多湾から大宰府政庁に至る中間地点に一字に築造した長さ1.2kmの遮断城であるためである⁴⁶⁾。水城が築造された当時の状況が如何ほど緊迫していたかを如実に感じさせるものである。

実際、百済でこのような遮断城を築造した事例はあまり見当たらない。ただし、強いて探せば次のような事例が挙げられるのではないだろうか。

C-① 秋の7月に禿山柵と狗川柵の二つの木柵を立てて楽浪との通路を塞いだ⁴⁷⁾。

② 春に国内の人で15歳以上を徴発し、関防を設置したが、青木嶺から北には八坤城に達し、西には海に至った⁴⁸⁾。

百済で遮断城を築造した事例は、まず上記の2つではないかと思われる。上記の2つの事例の他に、東城王の時代、炭岨に柵を設置した事例があ

るが⁴⁹⁾、柵を設置したのみとなっており、正確な形は不明だが、炭岨が新羅から百済へと来る要衝地であったこと、そして新羅の攻撃に備えて設置されたものであることを考えると、炭岨に設置された遮断城である可能性があると考えられる。

もちろん〈史料 C-①〉の場合、これが遮断城なのかどうかは正確に分からないが、これが同年4月に楽浪が靺鞨に瓶山柵を攻撃させ、100人余りを捕まえた後の逃亡回避という点で、百済から楽浪に通じる幹線道路を遮断した遮断城ではないかと思われる。

考古学的に見ると、扶余羅城、つまり泗沘都城の外郭城壁も、一種の遮断城といえるのではないかと考える。もちろん、泗沘都城の外郭城は水城とは異なり、単なる防御施設としての意味だけがある訳ではない。その外側にちょうど陵山里古墳群があるという点で、王都の内外を区分する基準のような意味も持っている。さらに、水城が図1や写真1から見てとれるように、丘陵と丘陵の間にある平地に位置しており、典型的な遮断城の形をしているとすれば、泗沘都城の外郭城は丘陵と平地をともに通っており、若干の差が見られるのは事実である。ただ、一定の空間を取り囲んだわけではないという点では、遮断城の一種と見ることもできるのではないかと思う。現在、泗沘都城の外郭をなす城壁は北羅城と東羅城と呼ばれるものが残っている。西羅城と南羅城もあった可能性があるという見解もあるが⁵⁰⁾、北羅城と東羅城だけを築造した可能性も排除できない⁵¹⁾。そのような点で、これも一種の遮断城と見ることもできるのではないかと思われる。

45) 송영식, 1987, 『韓國 城郭의 研究』, 문화재관리국, 15쪽.

46) 長沼賢海, 1932, 「水城の大槓の調査」『史跡名勝天然記念物調査報告書 제7집』, 福岡縣.

福岡縣教育委員會, 1976, 『水城』(昭和50年度發掘調査報告).

九州歴史資料館, 2009, 『水城跡』(上)・(下).

47) 『三國史記』권23, 『百濟本紀』1, 온조왕 11년 (서기전 8) 조, “秋七月 設禿山狗川兩柵 以塞樂浪之路”

48) 『삼국사기』권25, 『백제본기』3, 진사왕 2년 (386) 조, “春 發國內人年十五歲已上 設關防 自青木嶺 北距八坤城 西至於海”

49) 『삼국사기』권26, 『백제본기』4, 동성왕 22년조, “七月 設柵於炭岨 以備新羅”

50) 홍세진, 1982, 「百濟 泗沘城研究」, 동국대학교대학원 석사학위논문, 23~34쪽.

성주탁, 1982, 「百濟泗沘都城研究」『百濟研究』13, 32쪽.

田中俊明, 1990, 「王都모시의 泗沘城에 대한 豫備의 고찰」『百濟研究』21, 176~179쪽.

51) 박순만·성정용, 2000, 『百濟泗沘羅城』, 충남대 백제연구소.

박순만 외, 2002, 『百濟泗沘羅城』III, 충남대 백제연구소.

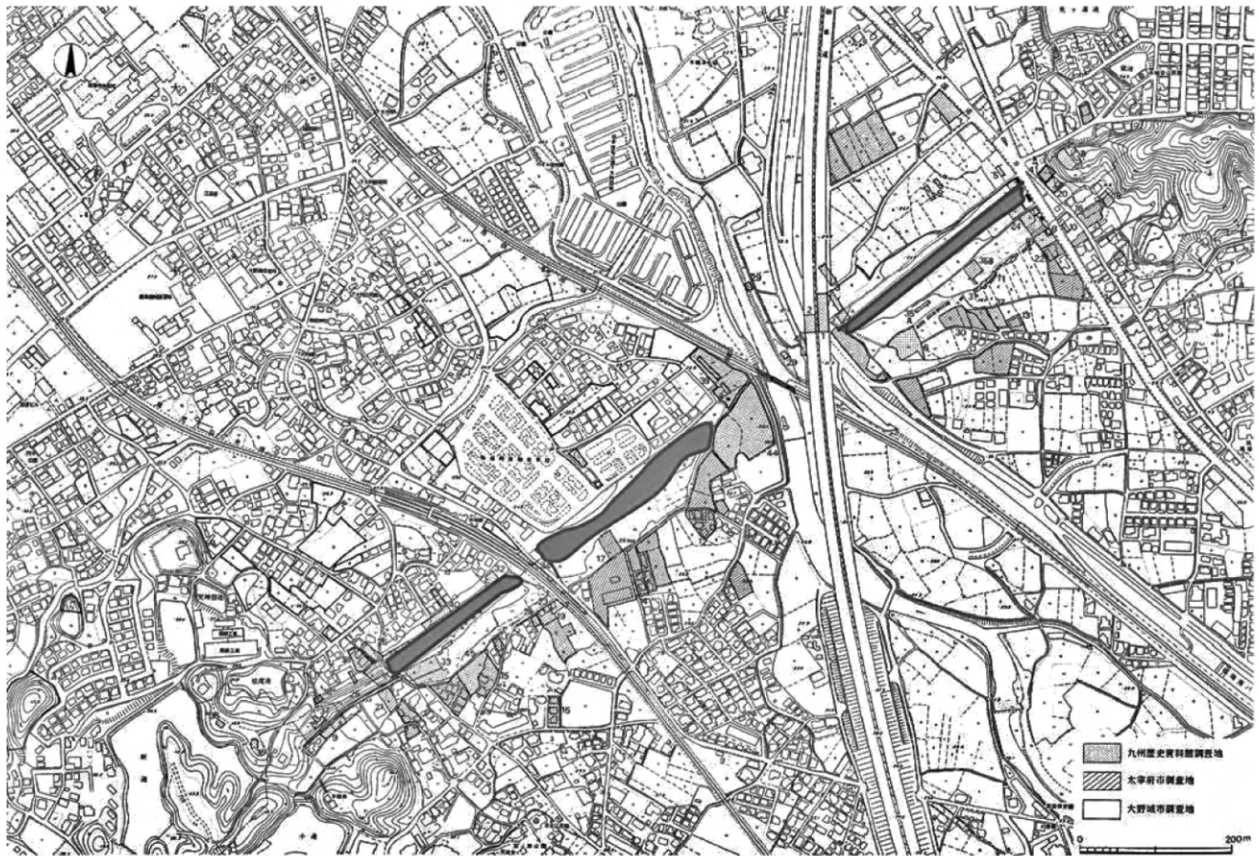


図1 水城位置図

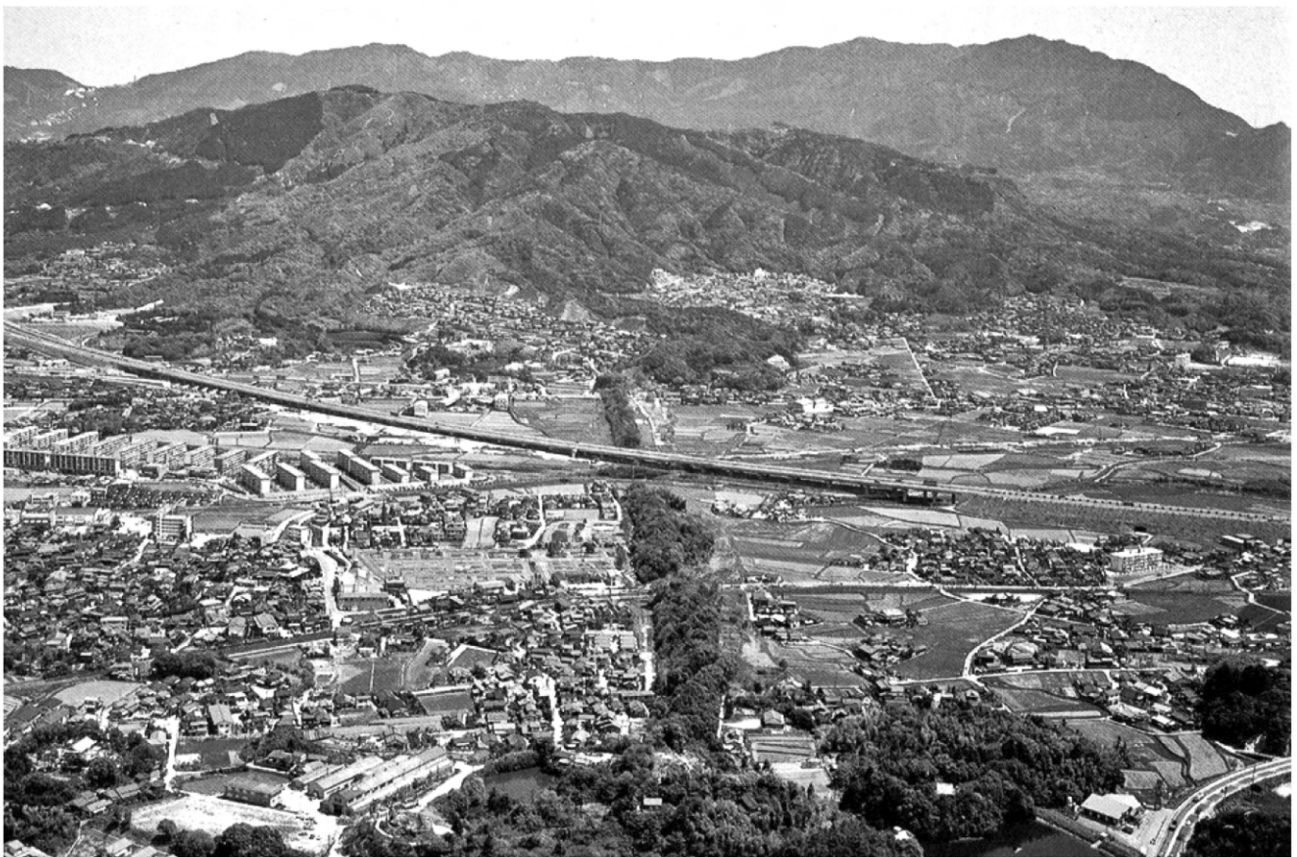


写真1 水城近景（右側が大宰府政庁方向）

このように、水城のような遮断城は百済の城郭としては極めて異例の事例といえる。しかも、そのような遮断城を平地に築造しているという点に特徴がある。例えば、炭岨に設置した柵は土城ではなく柵ではあるが、炭岨の丘陵部に設置した可能性がある。平地ではなかった可能性が高いという意味である。

実際、今まで確認された百済山城は全て自然の地形を適切に活用しながら、山峰に築造されているのが特徴である。自然の地形をうまく活用して築城されているため、城壁の外側に急斜面が続いており、実際の城壁の高さよりはるかに大きな防御効果を得ている。そのような点で、水城は遮断城という形態も特異だが、そのような遮断城が平地を通っているという点で、一般的な百済山城の立地とは異なる。自然の地形を活かしたメリットを全く活かすことができないからである。

このように、水城は形や立地の面で百済山城とは距離のある防御施設であることは間違いなく、それが664年に出現したという点で、当時の状況が緊迫していたことの証拠であるとみたい。だが、水城は城郭としては直接比較できる遺跡はないものの、戦術的な側面では、百済において駆使した戦術と類似した側面がある。博多湾と大宰府の間の平地に位置する水城は、丘陵と丘陵の間の細い道を遮断するという点で、660年7月の黄山伐の戦いと戦術的に似ている面があると考えられるからである⁵²⁾。

黄山伐の戦いの現場については論山市連山面の漢民大学校付近説⁵³⁾、開泰寺付近説⁵⁴⁾、連山面青銅里梅峰付近説⁵⁵⁾などがあるが、開泰寺付近で

ある可能性が高いと考えられる⁵⁶⁾。開泰寺付近こそ成忠が強調していた「陰しく狭い道」に当たるからである⁵⁷⁾。そうであるとすれば、その地政学的な位置は水城の位置に酷似している。つまり、城壁があるかどうかは別だが、狭い道において少数の軍隊で大軍を迎えようとした点に通じる面がある。そのため、日本の大和政権も、百済の遺民も博多湾に上陸し、すぐに大宰府政庁まで攻撃してくる唐・新羅連合軍に備え、従来は見られなかった遮断城という特異な防御施設を誕生させたのではないかと考えられる。

第二に、本格的な「朝鮮式山城」を築造しようとした時、最初に築造したのが長門国城という事実である。〈史料 A ②〉のように、水城を築造した翌年(665年)から長門国城、大野城、基肆城など本格的な山城を築造することになるが、そのうち初めて築造されたのが長門国城である。最初に築造したということは、それだけ戦術的価値が高いという意味になるであろう。それでは長門国城はいかにしてこのように戦術的に最も重要な山城になったのであろうか。

大野城や基肆城と違い長門国城は現在その正確な位置がどこなのかわかっていない。遺跡が発見されていないからである。ただし、その名称からして現在の山口県一帯に位置していたことは容易に推測できる。そのため、下関市の唐櫃山説、四王寺山説、茶臼山説などがあり、北九州市門司区の古城山を挙げる見解もある⁵⁸⁾。

ところが、下関市長府町に位置する「火の山」を候補地とする見解がある⁵⁹⁾。この山は〈図2〉からもわかるように海拔286mの独立丘陵で、そ

52) 서정식, 2010, 「의자왕의 전략과 황산벌전투의 실상」 『軍史』 76, 군사편찬연구소.

53) 홍사준, 1967, 「炭岨考」 『역사학보』 35·36.

성주탁, 1990, 「百濟 炭岨 小考」 『百濟論叢』 2, 백제문화개발연구원.

54) 서정식, 2010, 앞의 논문, 15쪽.

55) 심정보, 2010, 「백제사상 황산벌 전투와 삼영 설지에 대하여」 『충정문화와 충정문화』 10, 92쪽.

56) 서정식, 2010, 앞의 논문, 15쪽.

57) 『삼국사기』 권28, 「백제본기」 6, 의자왕 16년(656) 3, “若異國兵來 陸路不使過沈岨 水軍不使入伐伐浦之岸 舉其險隘以禦之 然後可也”

58) 豊元國, 1985, 「長門城の所在について」 『北九州瀬戸内の古代山城』 (小田富士雄 編), 名著出版, 320等.

59) 豊元國, 1985, 위의 논문, 320等.

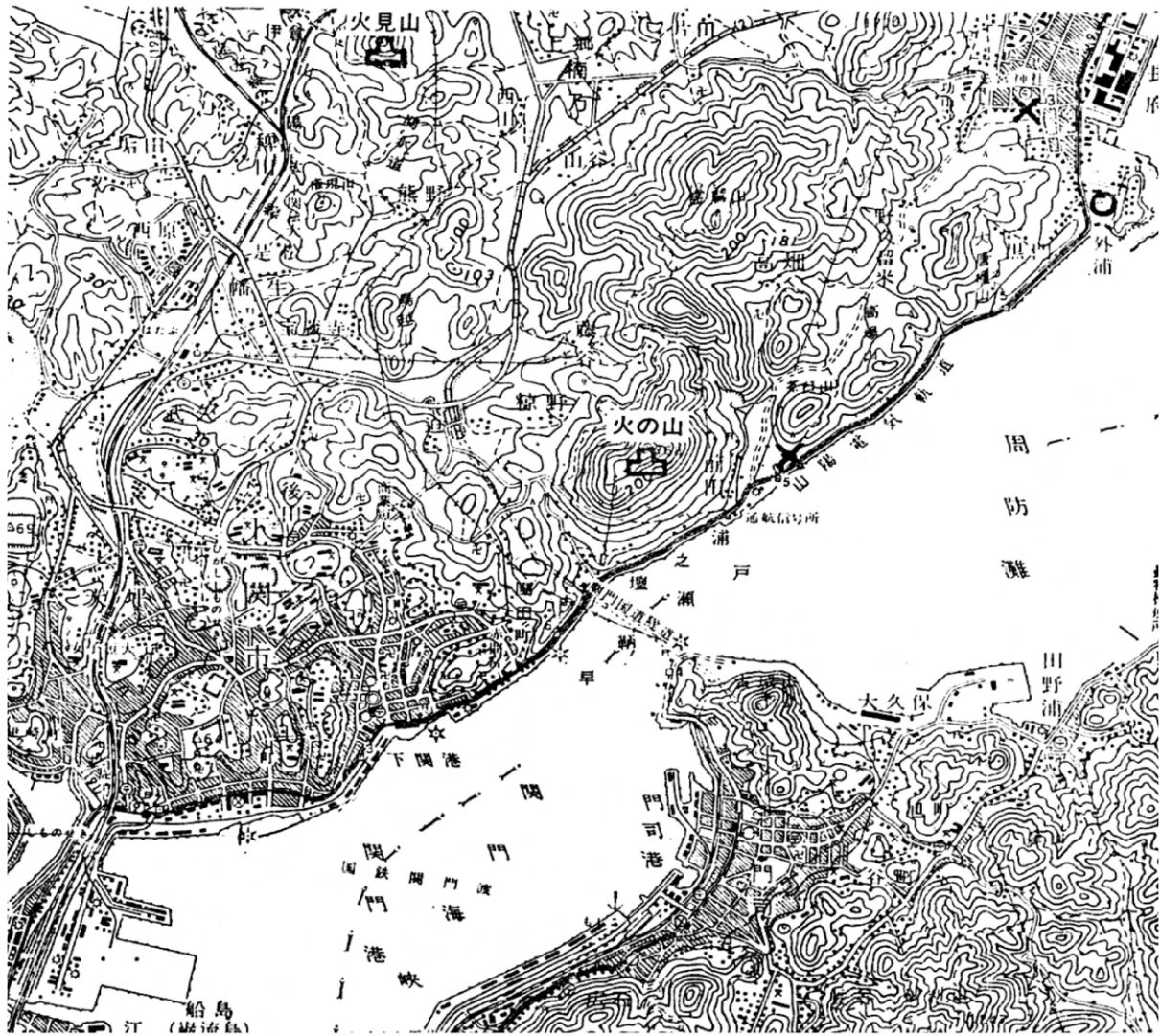


図2 長門国城の推定位置（「火の山」）



写真2 関門海峡の近景（グーグルアース）

の立地が讃岐の屋嶋城や備後の茨城に似ている。言い換えれば、一般的な「朝鮮式山城」の立地と同様の条件を備えている。

それだけでなく、ここは日本の本州と九州の間に位置する関門海峡が一望でき、〈写真2〉からもわかるように、向かい側には北九州市門司区の古城山が向かい合っていて、関門海峡の中でも最も幅の狭い場所である。ここを天然の要塞であり「日本のスエズ」と呼ぶのもそのためである。そうしたこともあり、この「火の山」の周辺には実際に敏達朝に築造された古城があったという言い伝えもあるという⁶⁰⁾。

このように、瀬戸内海へ入る道なので、朝鮮半島から日本の近畿地方へ行くためには必ず通らなければならない要衝である上、幅が狭く戦術的に非常に重要な所が関門海峡である。もし唐・新羅連合軍が船に乗ってここを通ろうとする時、関門海峡の両側で弓を使って火攻めにすれば、この狭い海峡を無事に通れる船は一隻もないだろう。百済

の遺民が初めてここに山城を築造したのもそのためではなかったかと思われる。言い換えれば、まず初めに水城を築造したことからして、大和政権や百済の遺民の第一次戦略は唐・新羅連合軍が九州を占領できないようにすることだったと思われる。このような戦略が失敗に終わった時、第二の戦略として考えたのが、唐・新羅連合軍が瀬戸内海に入れないようにすることだった。最初の朝鮮式山城を長門国に、それも最も狭い関門海峡を制圧できる場所に築造したのはそのためである。

もちろん、唐・新羅連合軍が関門海峡を通過せずに周辺のどこかに上陸することもあり得る。実際、この関門海峡の中ほどにあたる赤間神宮周辺は、朝鮮時代、ここを通った朝鮮通信使が上陸した場所として知られている。ここに港があったという意味になるわけである。したがって、時間の差はあるものの、唐・新羅連合軍が日本列島に侵攻した際、ここに上陸して陸路でここを通過する可能性も完全に排除することはできない。ここに



写真3 聖興山城の位置

60) 豊元國, 1985, 위의 논문, 322쪽.

長門国城を築造したもうひとつの目的は、まさにそうして陸路で進撃する唐・新羅連合軍から防御するためでなかったかと考えられる。

このように、上陸して陸路で進もうとする時は、上陸しようとする海浜部を制圧し、船に乗って関門海峡を通過しようとする時は海峡の両側に待ち伏せし、火攻めを加えてこれ以上進めないようにするのが長門国城であった。まさに「水陸の要衝」だったわけである。それで、山城の中で最初にこの山城を築造したのではないかと推測する。

長門国城はこのように海浜部と海峡を同時に制御できる機能を持っていたと考えられる。ここをこのように効果的に制御することさえできたら、唐・新羅連合軍が九州を掌握したとしても、近畿地方まで手中に入れることは非常に困難であっただろう。自然とその位置は「火の山」をはじめとする周辺一帯、つまり関門海峡からそれほど離れていない場所にあったのではないかと考えられる。関門海峡から遠いほど、ここを制御するのに不利であったはずだからである。

このように長門国城を「水陸の要衝」と見たとき、そうした防御体系は「加林城」を通じて伎伐浦と錦江を同時に統制した百済の戦略・戦術と似ていて興味深い。

周知のとおり、百済は滅亡する前に、長門国城と同じ位置に城郭を築き、外部勢力の侵入に備えた経験があった。それが他ならぬ加林城である。

加林城は現在の扶余郡林川面の聖興山城に比定される⁶¹⁾。百済が王都の防衛のため、ここに山城を築造したのは東城王23年(501年)であった⁶²⁾。当時の都・公州や泗沘期の上都・扶余は、錦江の

東であるにもかかわらず、王都の防衛のため、山城を錦江の西側に築造したのは錦江河口に位置していた伎伐浦と錦江を同時に制御できる位置に該当するためである。

有事の際、外部勢力が錦江を通じて泗沘都城に到着するためには、伎伐浦に上陸しなければならなかった。成忠や興首(訳注1)が有事の際、「水軍を伎伐浦の中に入れないようにせよ」⁶³⁾と命じたことや、「唐の軍が白村江に入れないようにせよ」⁶⁴⁾と命じたのもそのためである。前述したように、川はどこにでも船が停泊できるわけではなかったため⁶⁵⁾、伎伐浦のような特別な場所でのみ停泊することが可能であった。他の場所は干潟のようになっていたので船を停泊できる場所ではなかった。したがって、錦江を通じて泗沘都城を攻撃するためには、伎伐浦から上陸して陸路で泗沘都城まで進むか、または伎伐浦をそのまま通り過ぎ、泗沘都城まで錦江に逆らって船で進む方法があった⁶⁶⁾。

訳注1 成忠、興首は、百済の將軍。階伯と合わせて百済三大忠臣とされた。

ところで錦江は他の川も同様だが、上流に行くほど幅が狭くなり、川の左右の丘に待ち伏せし、火矢で攻撃すると船は全焼してしまう。船に乗って泗沘都城まで進むことができなかったのもそのためだ。百済の大臣たちが「鳥かごの中にいる鶏を絞め、網にかかった魚を捕るのと同様」⁶⁷⁾と語ったのがこれである。加林城から第一に伎伐浦の方に軍を送り伎伐浦への上陸を阻止し、それがままならないか、侵入勢力が川を遡って来れば、第二に江境の方へ軍を送り、待ち伏せしながら待つこ

61) 유원재, 1996, 「百濟 加林城研究」『百濟論叢』5, 백제문화개발연구원.

안승주·서정석, 1996, 『성흥산성문서발굴조사보고서』, 충남발전연구원.

심상유·정현화, 2013, 『성흥산성』(II), 부여군문화재보존재단.

심상유 외, 2017, 『부여 가림성』(I), 백제고도문화재단.

심상유·이명호, 2018, 『부여 가림성』(II), 백제고도문화재단.

62) 『三國史記』권26, 「百濟本紀」4, 東城王 23년 (501) 조, “八月 築加林城 以衛土佐平菴加鎖之”

63) 『三國史記』권28, 「百濟本紀」6, 義總王 16년 (656) 조, “若吳國兵來 陸路不使過津岨 水軍不使入伎伐浦之岸”

64) 『삼국사기』권28, 「백제본기」6, 의자왕 20년 (660) 조, “一宜簡勇士往守之 使唐兵不得入白江…”

65) 이희진, 2004, 「전쟁의 발견」, 동아시야, 249쪽.

66) 서정석, 2007, 「사미포성의 땅미제제와 금강」『백제와 금강』, 서경, 120~122쪽.

67) 『삼국사기』권28, 「백제본기」6, 의자왕 20년 (660) 조, “當此之時 縱兵擊之 譬如殺在籠之鷄 離網之魚也”

とのできる所が加林城であった。百済の加林城を「水陸の要衝」⁽⁶⁸⁾と表現したのもそのためである。

長門国城が関門海峡付近のどこかにあったとみる理由がここにある。だからこそ朝鮮式山城の中で最初に長門国城が築造されたとはずである。言い換えれば、今まで伝えられた9つの「朝鮮式山城」のうち、最も重要な城をひとつ挙げるとすれば、まさにこの長門国城になるだろう。大和政権の立場からも百済遺民の立場からも唐・新羅連合軍が日本列島を攻撃して来れば、防御できる最も有利な場所をここと判断したわけである。それでここに最初の山城を築造したと思われる。

第三に、長門国城や大野城、基肄城を築造した後は、667年に高安城、屋嶋城、金田城を築造し、清野作戦（訳注2）を駆使する準備を整えたという事実である。

訳注2 清野作戦とは城外を焦土化する戦法のこと。

前述したように、大和政権と百済遺民の第一次戦略は、唐・新羅連合軍が九州を占領できないようにすることであった。唐・新羅連合軍であっても、九州を掌握できないまますぐに近畿地方を攻撃することはできないためである。そうするうちに瀬戸内海で退路でも遮断されれば、唐・新羅連合軍はそれこそ「籠中の鳥、網中の水魚（進退両難）」のような状況になるからである。

唐・新羅連合軍の立場から見ると、まず九州を掌握して橋頭堡を確保した後、ここを足場に瀬戸内海へ進んでこそ近畿地方を攻撃できる。大和政権と百済の遺民から見れば、九州地方が唐・新羅連合軍の手中に入ると瀬戸内海や近畿地方を守ることは非常に不利になるが、九州地方を守り抜くことが近畿地方を守ることになるのである。結局、九州地方を誰が掌握するかに勝敗がかかっていたわけである。

それでは九州地方を掌握するというのはどういう意味であろうか。それはまさに大宰府政庁を誰が制するかが重要な鍵である。もし唐・新羅連合軍が大宰府政庁を占領することになれば、それは九州を掌握することになり、大和政権と百済の遺

民が大宰府政庁を守り抜くことになれば、唐・新羅連合軍の攻撃を退けることになるわけである。

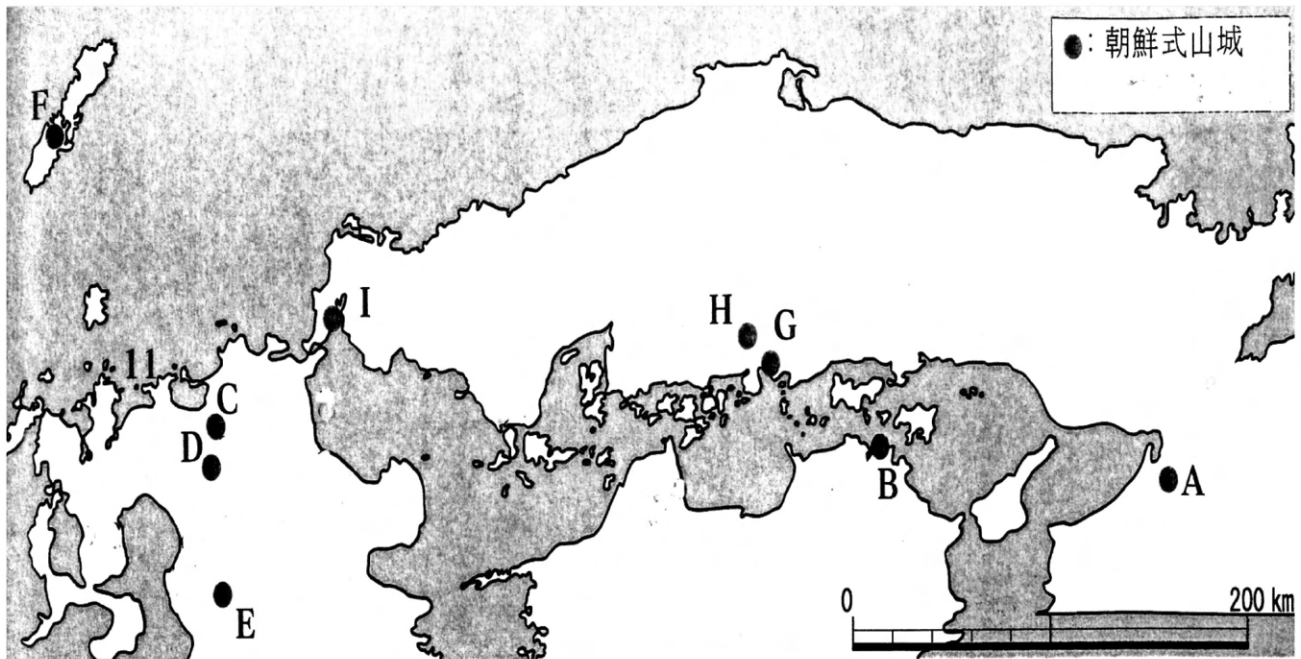
このように、大宰府政庁を誰が制するかは九州地方を誰が制圧するかにつながり、九州地方を誰が制圧するかによって近畿地方も誰が制圧するかが決まるため、結局、大和政権や百済の遺民にとっては九州地方を守り抜くのが重要な勝負どころになるほかなかった。長門国城の築造に続き、大宰府政庁の周辺に大野城と基肄城を築造したのはそのためだと考えられる。言い換えれば、水城だけでは唐・新羅連合軍の攻撃を防御するのは困難だと考え、さらに大宰府政庁の周辺に防御力を追加したのが665年にあった大野城と基肄城の築城である。大宰府周辺にこのような山城を配置することで水城の防御が崩れると、すぐにこの二つの山城に入り、籠城することで唐・新羅連合軍が九州を掌握できないようにしようとしたのが当時の戦略であったと考えられる。

こうして九州と関門海峡に防御力を集中させ、第一には九州を防御し、これがうまくいかなければ、第二に関門海峡を防御することで、唐・新羅連合軍が瀬戸内海に入れないようにすることが665年までの戦略であった。

667年に入り、高安城、屋嶋城、金田城などが追加築造されたのは、唐・新羅連合軍を防御するための戦略がまた変わったことを意味する。ここでいう高安城は〈図3〉のように大阪南部に位置し、屋嶋城は四国の香川県に位置し、金田城は対馬にある。対馬～瀬戸内海～近畿地方に至る長い幹線交通路の要所に山城を築造したわけである。言い換えると、665年までの戦略が関門海峡や九州地方に限られていたとすれば、今度は対馬から近畿地方までの長い戦線を構築した。

唐・新羅連合軍が日本列島を攻撃するならば、通過が避けられない攻撃ルート周辺に山城を配置したのは、百済、百、共に三国が駆使した「清野作戦」を試みるためだったと考えられる。百済が「清野作戦」を試みたことは貞観城を通じて知ることができる。

(68) 『삼국사기』 권28, 「백제본기」 6, 의자왕 20년 (660) 조, “…或曰 加林城水陸之衝 合先擊之…”

図3 朝鮮式山城の分布図⁶⁹⁾

- A. 高安城 B. 屋嶋城 C. 大野城 D. 基肄城 E. 鞠智城
F. 金田城 G. 茨城 H. 常城 I. 長門国城

D. 福信などは、真峴城が川に臨み、高く険しく要衝地にあたるため、軍を投入し守らせた。仁軌が夜に新羅の軍を督励し、城の胸壁まで肉迫したが、夜が明ける頃に城に入って800人の首を斬り、ついに新羅の兵糧輸送路を開拓した⁷⁰⁾。

〈史料D〉によると、百済復興運動当時、復興軍が真峴城に駐屯していた時に新羅から扶余の唐・新羅連合軍に伝わる補給品を断ち切ったことにより、泗沘都城に孤立していた唐・新羅連合軍が真峴城を攻撃し陥落させたことで、ようやく饒道(兵站線)が開通したことを明らかにしている。ここでいう「真峴城」は、大田市西区黒石洞に位置する黒石洞山城であるが⁷¹⁾、〈史料D〉からもわかるように国境から泗沘城に至る中間地点に位置し、補給品を遮断することで泗沘城に駐屯していた唐・新羅連合軍を苦境に陥れている。これが

まさに清野作戦である。本来、「清野」とは、野原や民家に備蓄されている穀物をすべて山城に移し、敵が一粒の兵糧も取られないようにする計略をいう⁷²⁾。山城防御は、このような清野が並行してこそ効果を発揮できるが、国境線から都に至る幹線道路が長いほど有利である。667年に対馬から大阪までの長い路線に山城を築造したのもそのためと思われる。

つまり、大和政権と百済の遺民は、唐・新羅連合軍が日本列島を攻撃してくるかもしれないという不安感の中で、第一に九州地方を守る戦略を採択し、万が一の時は瀬戸内海の中に入らないように第二の防御網を構築し、最後には国境から都に至る侵攻路周辺に山城を配置することで、第三の防御網を構築した。このような防御網こそ百済が普段構築していた国境防備体系と非常に似通ったものであった。

69) 古代山城サミット実行委員会, 2010, 『あつまれ! 古代山城』, 33쪽을 변경함.

70) 『三國史記』권28, 「百濟本紀」6, 의자왕 20년, 唐 龍朔 2년 (662) 조. “福信等以眞峴城臨江高峻當衝要 加兵守之 仁軌夜督新羅兵 薄城板堞 比明而入城 斬殺八百人 遂通新羅饒道”

71) 심정보, 1983, 「百濟 復興軍의 主要 據點에 對하여」 『百濟研究』 14, 167~168쪽.

서정식, 2002, 『百濟의 城郭』, 학연문화사, 319쪽.

72) 李章熙, 1995, 「壬亂中 山城修築과 堅壁清野에 對하여」 『阜村申延澈教授停年退任紀念史學論叢』, 621쪽.

4. 結び

西日本には白村江の戦いの後、日本に渡った百済遺民の指揮の下、築城された山城がある。それがいわゆる「朝鮮式山城」である。百済の遺民たちの指揮の下で築造された山城であるため、当然ながら百済の山城と密接な関係があるものと考えられるが、その具体的な実情についてはまだ明らかになっていない。それは両国の山城を比較できるほど発掘調査が十分に行われていないためであろう。したがって、ここでは「朝鮮式山城」の築城に関する文献記録を見てみることで百済山城との関連性を探ってみた。

大和政権と百済の遺民は唐・新羅連合軍が九州地方を掌握できないようにするのが第一次戦略だったようである。大宰府政庁の周辺に水城や大野城、基肄城を集中して築造したのはそのためと思われる。

ところが、このような第一次戦略が失敗に終わった時に備えて築造したのが、665年における「長門国城」の築造である。長門国城はまだその実体が確認されておらず、正確な位置はわからないのが実情だが、だとしても長門国に築城したという記録を参考にすると、関門海峡の周辺に位置していた可能性が高いと考えられる。ここに山城を築造した理由は、関門海峡を掌握して唐・新羅連合軍が瀬戸内海に入れないようにするためであった。これが第二次防御戦略といえるが、伎伐浦と錦江を掌握することで錦江からの侵入を遮断した百済の防御体系と非常に類似した防御戦略であった。

このような第二防御網を構築しても安心できなかったのか、対馬から四国、そして近畿地域に至る場所に金田城、屋嶋城そして高安城を築造した。667年のことである。これは国境から王都に至る幹線道路周辺に山城を配置し、有事の際に補給品を遮断することで侵入勢力を苦境に陥れた百済の典型的な山城戦術、つまり「清野作戦」をそのまま再現したものといえる。

このように西日本の「朝鮮式山城」は記録に残っている如く、百済の遺民によって築造されただけに、百済の山城と密接な関連があることがわかる。

山城の位置から見て、百済が普段駆使した山城戦術をそのまま再現したと言っても過言ではない。今後、両地域の山城に対する発掘調査が行われ、構成要素の別にどのような共通点と相違点があるのか、つまびらかに明かされることを期待する。

ソ・ジョンソク 国立公州大学校博物館長

서일본 '朝鮮式山城'의 축성 기록과 백제산성

서정석*

< 目次 >

I. 머리말

II. '朝鮮式山城'에 대한 문헌 기록

III. '朝鮮式山城'과 방어 전술

IV. 맺음말

국문초록

서일본에는 백제 멸망 후 일본으로 건너간 백제 遺民들에 의해 축조된 산성이 있다. 그것을 '朝鮮式山城'이라 부른다. 이러한 조선식산성은 백제 유민들에 의해 축조된 만큼 백제산성과 밀접한 관련이 있을 것으로 생각된다. 다만 아직까지 백제산성과의 관련성은 명쾌하게 밝혀진 것이 거의 없는 실정이다. 그래서 여기에서는 '조선식산성'의 축조 기록을 중심으로 백제산성과의 관련성을 살펴보고자 한다.

'조선식산성'의 축조 기록을 보면 맨 먼저 水城을 축조하고, 이어서 長門國城, 大野城, 基肄城을 차례로 축조하였다. 이러한 사실로 미루어 볼 때 처음에는 수성을 축조하여 博多灣에서 大宰府로 들어오는 길목을 차단하고자 하였음을 알 수 있다. 이것이 1차 방어망이다. 뒤이어 長門國城을 축조하여 關門海峽을 통제하고자 하였다. 이것이 2차 방어망이다. 그 다음에는 對馬島에서 시코쿠(四國)를 거쳐 가와치(河内)에 이르는 곳곳에 산성을 배치하였다. 이것이 3차 방어망이다.

이렇게 당시 서일본에는 물론 틈 없는 방어망이 구축되어 있었는데, 이는 백제가 구축한 방어체계와 매우 유사하여 백제 유민들의 지휘하에 산성이 축조되었다는 역사적 사실을 뒷받침해 주고 있다.

주제어: 조선식산성, 水城, 長門國城, 清野作戰

* 공주대학교 문화재보존과학과 교수

I. 머리말

서일본에 백제 유민들에 의해 축조된 고대산성이 자리한다는 것은 이미 널리 알려진 사실이다.¹⁾ 이러한 산성은 한때 朝鮮式山城과 神籠石으로 나누어 보기도 하였는데, 그 때문에 神籠石의 성격을 둘러싸고 100년에 걸쳐 치열한 논쟁이 이어지기도 하였다.²⁾

1963년부터 시작된 'おつば山神籠石'의 발굴을 계기로 그때까지 神籠石으로 불려오던 것이 실은 방어용의 산성임이 밝혀지면서³⁾ 神籠石은 神籠石式山城으로 부르게 되었고,⁴⁾ 이제는 朝鮮式山城과 神籠石式山城을 구별하지 않고 다 같이 고대산성으로 부르고 있다.⁵⁾

조선식산성은 물론이고, 神籠石式山城 또한 산성임이 분명한 이상 단순히 문헌기록에 그 명칭이나 축성 기사가 보인다는 이유만으로 조선식산성이라 부르고, 그러한 명칭이나 축성 기록이 보이지 않는다는 이유만으로 神籠石式山城이라 하여 양자를 구별해 보는 것은 분제가 아닐 수 없다. 다만 神籠石式山城에 대해서는 아직까지 축성 시기나 축성 목적이 분명하게 밝혀지지 않은 이상 그 성격이나 축성 시기가 밝혀질 때까지는 양자를 서로 구별해 보는 것도 전혀 부의미한 일은 아니라고 생각된다. 여기에서 특별히 조선식산성만을 떼어서 살펴보고자 하는 것도 그 때문이다.

주지하듯이 조선식산성은 663년에 있었던 백촌강 전투 후 일본으로 망명한 백제 귀족들의 지휘하에 서일본에 축조된 산성을 말한다. 그러한 산성을 '朝鮮式山城'이라고 부르는 이유도 여기에 있다. 다시 말해서 한국 스타일의 산성이라는 뜻이다.

이렇게 백제 귀족의 지휘하에 탄생한 만큼 조선식산성이 백제산성과 밀접한 관련이 있으리라는 것은 쉽게 짐작해 볼 수 있다.⁶⁾ 그런데도 아직까지 양자의 관련성은 그다지 명쾌하게 밝혀지지 않고 있다. 양자를 직접적으로 비교할 수 있을 만큼 충분한 발굴조사가 이루어지지 않았기 때문일 것이다. 그래서 여기에서는 조선식산성의 축성과 관련된 문헌기록을 검토하고, 그것을 바탕으로 백제산성과 서일본 조선식산성과의 관련성을 살펴보고자 한다.

II. ‘朝鮮式山城’에 대한 문헌 기록

앞에서도 설명하였듯이 서일본의 고대산성은 일반적으로 朝鮮式山城과 神籠石式山城으로 나누어 보고 있다. 여기서 말하는 조선식산성은 『日本書紀』나 『續日本紀』와 같은 문헌기록에 성곽의 명칭이나 축성 기사, 혹은 수축 기사가 등장하는 성곽을 말하는 것이고, 유적은 있지만 그러한 城名이나 축성 기사 등이 문헌기록에 보이지 않는 성곽을 神籠石式山城이라 한다. 문헌기록에 등장하느냐의 여부가 기준인 셈이다.

일본에는 이렇게 축성 기사가 있는 산성이 있기 때문에 유적은 몇 개 안 되지만 축성 시기를 분명하게 알 수 있는 산성이 있는 반면에 백제 故地에는 산성은 많지만 축성 시기를 알 수 있는 유적이 거의 없다. 따라서 앞으로 백제산성이나 조선식산성을 연구하기 위해서는 서로가 부족한 부분을 보완할 필요가 있다고 생각한다. 그런 점에서 먼저 조선식산성에 대한 문헌 기록을 살펴볼 필요가 있을 듯하다.

A-(1) 이 해에 對馬島, 壹岐島, 筑紫國 등에 防人을 두고 烽火를 설치하였다. 또 筑紫에 큰 제방을 쌓고 물을 저장해 두었는데, 이를 이름하여 水城이라 한다.¹²⁷

(2) 8월에 達率 答婁春初를 長門國에 보내 城을 쌓게 하였다. 達率 憶禮福留와 達率 四比福夫를 筑紫國에 보내 大野城과 椽城 등 두 개의 성을 쌓게 하였다.¹²⁸

(3) 이 달(11월:인용자)에 倭國의 高安城, 讚吉國 山田郡의 屋嶋城, 對馬島의 金田城을 축조하였다.¹²⁹

(4) 8월 천황이 高安嶺에 올라 城을 수리하는 것을 의논하였다. 그러나 백성들이 피곤하리라 여겨 중지하였다. 가을에 高安城을 수리하고 畿内の 田稅를 거두어 들였다.¹³⁰

(5) 2월에 高安城을 수리하고, 곡식과 소금을 쌓아 두었다.¹³¹

(6) 2월 丁酉에 천황이 高安城에 행차하였다.¹³²

(7) 11월에 難波에 羅城을 쌓았다.¹³³

(8) 9월에 新城을 시찰하였다. 10월에 천황이 高安城에 행차하였다.¹³⁴

(9) 5월에 大宰府로 하여금 大野城, 基肄城, 鞠智城 등 3개의 성을 수리하도록 하였다. 8월에 高安城을 수리하였다.¹³⁵

(10) 9월에 高安城을 수리하였다. 12월에 大宰府로 하여금 大野城과 稻積城 등 두 성을 수리하게 하였다.¹³⁶

(11) 8월에 高安城을 廢하였다.¹³⁷

(12) 정월에 河內國 高安의 烽火를 폐하고, 처음으로 高見의 烽火 및 大倭國 春日의 烽火를 두었다. 8월에 高安城에 행차하였다.¹³⁸

(13) 12월에 備後國 安那郡의 炭城, 葦田郡의 常城을 停止하였다.¹³⁹

이것이 663년 이후 축조된 조선식산성에 대한 기록이다. 대단히 간단한 기록이기는 하지만 문헌기록을 통해 다음과 같은 몇 가지 사실을 알 수 있다.

첫째, 조선식산성에 대한 축성 기록이 백촌강전투 이후부터 나타난다는 사실이다. 주지하는 바와 같이 백제와 왜의 연합군은 663년 8월에 있었던 백촌강전투에서 나당연합군에게 패하였다.¹⁴⁰ 자연히 부흥운동의 중심지였던 周留城도 함락되고 많은 백제 遺民들은 일본으로 망명하였다.¹⁴¹

이렇게 많은 백제 遺民들이 일본으로 건너간 그 이듬해부터 축성이 시작되었다. 그런 점에서 일본의 조선식산성은 나당연합군이 일본 열도를 공격해 올지도 모른다는 위기감 속에서 축성된 것임을 알 수 있다. 이를 뒷받침해 주는 것이 <사료 B>가 아닐까 한다.

B. 總章 元年에 이르러... 또 소식을 들으니 ‘唐이 배를 수리하는 것은 길으로는 倭國을 정벌한다고 하지만 실제로는 新羅를 치고자 하는 것이다’하여 백성들이 그 말을 듣고 놀라고 두려워서 불안해 하였습니다.¹⁴²

<사료 B>는 당나라가 신라를 공격하고자 하는 것에 대한 신라인들의 불만을 말하는 것인데, 사실

이야 어떠하든 간에 실제로 당나라가 일본 열도를 공격한다는 소문이 당시에 있었던 것을 알 수 있다. 아울러 신라인들이 소문을 듣고 놀라고 두려워 하였듯이 일본 열도 또한 그러했으리라는 것은 쉽게 짐작해 볼 수 있다. 결국 일본의 조선식산성은 이러한 대외적인 긴장감 속에서 축성된 것이라고 보아야 할 것이다.³³⁾

둘째, 앞서서도 설명하였듯이 일본의 조선식산성은 성곽의 수는 얼마 안 되지만 정확한 축성 연대를 알 수 있다는 사실이다.³⁴⁾ <사료 A>에서 보듯이 664년에 水城을 축조한 것을 시작으로 665년에 長門國城, 大野城, 基肄城 등이 축성되었고, 667년에도 高安城, 屋嶋城, 金田城 등이 축성되었다.

주지하는 바와 같이 일본에 있는 조선식산성의 원류라 할 수 있는 백제산성의 경우, 백제산성으로 알려진 유적의 수는 많지만 정작 축성 시기를 분명히 알 수 있는 유적은 거의 없다. 심지어 기존에 백제산성이라고 믿어왔던 유적이 백제산성인지 아닌지 논란이 되는 경우도 있다. 예컨대 부여에 있는 靑馬山城은 대표적인 백제산성으로 알려져 있지만, 청마산성이 백제산성으로 알려지게 된 계기는 1932년에 백제진열관 관장으로 부여에 온 오사카긴타로(大阪金太郎)가 『일본서기』에 나오는 得爾辛城을 청마산성에 비정하면서부터다.³⁵⁾

오사카긴타로가 청마산성을 득이신성이라고 한 것은 뚜렷한 근거가 있어 그런 것은 아니고, 內鮮一體를 기본 방침으로 정한 조선총독부의 식민통치 정책을 뒷받침하기 위해 유적을 재해석한 결과였다.³⁶⁾ 그런 점에서 청마산성이 백제 때 축조한 것인지에 대해서는 앞으로 변별이 따져볼 필요가 있을 듯하다.³⁷⁾ 실제로 최근 청마산성 내에서는 백제 사비기의 회현식식설묘가 발견되어³⁸⁾ 청마산성의 축성 시기에 대한 재검토를 요구하고 있다.

또 충남 예산에 있는 任存城은 백제 부흥운동 때 등장하는 핵심적인 據城으로 이해되고 있지만,³⁹⁾ 임존성의 입지와 구조적인 특징으로 볼 때 과연 백제산성인지에 대해 의심하는 견해도 있고,⁴⁰⁾ 실제로 최근에는 성내에서 통일신라 때의 건물지가 발굴되기도 하였다.⁴¹⁾ 지금도 일부분에 대한 조사였기 때문에 이것만으로 단언할 수는 없지만, 적어도 관련 기록이나 고고학적 특징으로 볼 때 현재의 예

산군 대흥면에 있는 임존성이 백제 부흥운동기에 등장하는 임존성일 가능성은 그다지 크지 않다고 생각된다.⁴²⁾

셋째, 축성이 答怱春初, 憶禮福留, 四比福夫 등 백제 遣民들에 의해 이루어졌다는 사실이다. 그런 점에서 일본의 조선식산성은 백제 양식의 축성법이 채용되었을 가능성이 높은 것이 아닌가 한다.⁴³⁾ 따라서 앞으로는 이러한 산성을 ‘조선식산성’이라는 애매한 명칭으로 부를 것이 아니라 ‘백제식산성’으로 부르는 것이 더 적합하다는 생각이다.⁴⁴⁾

한편, <사료 A>에서 또 하나 눈에 띄는 사실은 당시 축성에 결정적인 역할을 했던 인물들이 모두 達率 관등의 소지자였다는 점이다.⁴⁵⁾ 주지하다시피 백제에는 16관등이 있었는데, 그 중 달솔은 제 2위 관등에 해당된다. 이러한 달솔 관등의 소지자는 모두 30인으로 정해져 있었다고 하는데, 문제는 이러한 달솔 관등의 관인이 京都 5부와 지방 5방의 장관을 지냈다고 한다.⁴⁶⁾ 뿐만 아니라 5방에 있던 方領들은 현산에 자리한 方城에 주둔해 있으면서 700명 내지 800명에서 많게는 1,000명에 이르는 군대를 거느리고 있었다. 풍부한 군사지식과 산성 축조 지식을 갖추고 있었던 셈이다. 그런 점에서 이러한 達率 관등의 소지자들이 축성을 담당한 것은 너무나도 당연하다고 할 수 있다.⁴⁷⁾ 실제로 長門國城을 축조한 答怱春初와 大野城을 축조한 憶禮福留는 671년에 일본 조정으로부터 大山下の 관위를 받게 되는데, 『일본서기』에는 이들이 ‘關兵法’이라 하여 병법에 뛰어났음을 특기하고 있다.⁴⁸⁾

III. ‘朝鮮式山城’과 방어 전술

서일본에 자리하고 있는 조선식산성이 <사료 A>에서 보듯이 백제 멸망 후 일본으로 건너간 백제 유민들의 지휘하에 축조된 만큼 백제산성과 조선식산성이 깊은 관련이 있으리라는 것은 쉽게 짐작하고도 남음이 있다.⁴⁹⁾ 그래서 그러한 관련성에 대한 다양한 접근이 있었다.

먼저 神籠石 논쟁이 한창일 때 關野貞은 한국을 답사하면서 목격한 한국 고대 산성의 특징을 찾아내고, 일본에 있는 ‘조선식산성’이야말로 그러한 한국 고대 산성을 그대로 모방한 것이라는 견해를 제

시하였다.¹⁰⁰ 이때 關野貞이 제시한 한국 고대산성의 특징은 다음과 같이 4개로 요약된다.¹⁰¹

첫째, 왕궁은 평지나 구릉상에 자리하고, 그 뒤의 險山에 산성을 배치하여 석량과 부기를 비축해 두었다가 유사시에는 그 산성에 들어가 농성한다. 둘째, 삼국시대 산성의 주변에는 반드시 그와 관련된 다수의 고분이 산재한다. 셋째, 토성과 석성이 있되 산성은 주로 山腹에서 구하기 쉬운 석재를 이용한 석성으로 축조하고, 평지상은 토성으로 축조한다. 넷째, 반드시 한 곳 이상의 계곡부를 에워싸고, 능선에서 약간 내려간 곳에 성벽을 축조한다.

아울러 關野貞은 大野城이나 基肄城과 같은 일본의 ‘조선식산성’이야말로 한국 고대 산성을 그대로 모방한 것이라고 하였다.

그 후 한국 고대 산성과 서일본 조선식산성에 대한 발굴조사가 이루어지면서 양자간의 관계에 대한 다양한 접근이 이루어졌는데, 그 결과 서일본 조선식산성의 원류를 백제산성에 찾는 연구가 이어지고 있다.¹⁰² 예컨대 성주탁은 서일본의 조선식산성에 나타난 백제산성의 특징으로 다음과 같은 여섯 가지 사실을 들고 있다.¹⁰³

첫째, 토성체제에 있어 大宰府都城은 政廳인 都府樓를 중심으로 매후의 大野城과 앞쪽의 基肄城, 그리고 서쪽으로 羅城에 해당되는 水城이 자리하고 있어 平地城(政廳+羅城(郭城)) + 高地山城(大野城+基肄城)으로 구성되어 있는데, 이러한 구조가 平地城(王宮+羅城(郭城)) + 산성(부소산성+정마산성)으로 구성된 사비도성과 체제면에서 유사성이 있다.

둘째, 大野城의 평면 구조는 남쪽과 북쪽에 두 개의 테회형산성이 있고, 그 중앙에 포곡식산성이 있는 복합식산성의 형태를 하고 있는데, 부소산성 역시 테회형산성과 포곡식산성이 결합된 복합식산성의 형태를 하고 있다.

셋째, 축성법에 있어서 大野城과 부소산성이 다 같이 관측기법으로 축조한 토성이며, 군데군데 석축을 한 흔적이 나타나고 있다.

넷째, 大野城과 부소산성이 다 같이 못에 따라 垓子시설이 부설되어 있다.

다섯째, 大野城 안에는 창고용으로 쓰여진 건물지가 자리하고 있는데, 부소산성 역시 그 안에 군창

지와 같은 군사용 창고가 자리하고 있다.

여섯째, 南馬山城은 발굴조사가 제대로 이루어지지 않아 정확한 것은 알 수 없지만 基肄城과 같은 역할을 하던 산성으로 추정된다.

이러한 양자의 비교는 문헌 기록에 나타난 백제 遺民에 의한 서일본 조선식산성의 축조라는 역사적 사실을 입증해 주는 흥미로운 결과이기도 하지만, 두 지역의 산성에 대한 본격적인 발굴조사가 이루어지기 전 이야기기 때문에 오늘날의 입장에서는 수정되어야 할 부분도 있는 것이 사실이다. 예컨대 복합식산성의 경우 한 때는 백제의 전형적인 산성으로 이해되기도 하였지만¹⁰⁴ 발굴조사를 통해 이러한 복합식산성이 실은 백제산성이 아닌 것이 확인되었다. 따라서 고고학적인 조사에 앞서 서일본 조선식산성에 대한 문헌기록을 면밀하게 따져보는 것이 우선이지 않을까 한다. 실제로 서일본에 있는 조선식산성과 관련된 문헌 기록을 면밀히 살펴보면 다음과 같은 사실을 발견할 수 있다.

첫째, 백촌강전투 후 일본 열도에 등장한 최초의 방어시설은 水城이다. 사료 <A-(1)>에 의하면 水城이 축조된 것은 664년 12월의 일이다. 백제 遺民들이 일본 열도로 건너간 것이 663년 9월이었던 만큼 그 이듬해에 곧바로 水城이 축조된 셈이다.

그런데 주지하다시피 水城은 일반적인 성곽과 달리 차단성이다. 성곽은 원래 한 지점에서 출발하여 일정 공간을 에워싼 다음, 다시 출발점으로 돌아와야 완성된다. 적어도 廢습이 되지 않더라도 일정 공간이 확보되어야만 성곽이라고 할 수 있다.¹⁰⁵ 그런 점에서 水城은 일반적인 성곽과는 차이가 있다. 일정 공간을 에워싼 것이 아니라 나당연합군이九州에 상륙했을 때를 대비하여 博多灣에서 大宰府政廳 이르는 중간지점에 一字 형태로 축조한 길이 1.2km의 차단성이기 때문이다.¹⁰⁶ 그런 점에서 일반적인 성곽과는 다르다. 水城이 축조될 당시의 상황이 얼마나 긴박했었는가를 고스란히 느낄 수 있는 대목이다.

사실 백제에서 이러한 차단성을 축조한 사례는 잘 드러나지 않는다. 다만 군이 찾는다면 다음과 같은 사례를 들 수 있지 않을까 한다.

C-(1) 가을 7월에 禿山柵과 狗川柵의 두 목책

을 세워 낙랑과의 통로를 막았다.¹³⁾

- (2) 북에 나라 안 사람으로 15세 이상을 징발하여 關防을 설치하였는데, 靑木嶺에서 북쪽으로는 八甲城에 닿았고, 서쪽으로는 바다에 이르렀다.¹⁴⁾

백제에서 차단성을 축조한 사례는 일단 위의 두 가지가 아닌가 한다. 위의 두 사례 이외에 동성왕 때 炭岫에 柵을 설치한 사례가 있는데,¹⁵⁾

책을 설치했다고만 되어 있어 정확한 형태를 알 수 없지만 탄현이 신라에서 백제로 오는 요충지라는 사실, 그리고 신라의 공격을 대비해 설치한 것이라는 사실을 감안해 볼 때 탄현 위에 설치한 차단성일 가능성이 있다고 생각한다.

물론 사료 <C-1>의 경우 이것이 차단성인지 아닌지는 정확히 알 수 없는 것이 사실인데, 이것이 그해 4월에 낙랑이 말갈을 시켜 瓶山柵을 공격하여 1백 여 명을 잡아간 후속조지라는 점에서 백제에서 낙랑으로 통하는 간선도로를 차단한 차단성이 아닌가 한다.

고고학적으로 본다면 부여 나성, 즉 사비도성의 외곽 성벽도 일종의 차단성으로 볼 수 있지 않을까 한다. 물론 사비도성의 외곽성은 水城과 달리 단순히 방어시설로서의 의미만 있는 것은 아니다. 그 바깥쪽에 곧바로 능산리고분군이 자리하고 있다는 점에서 王都의 내외를 구분하는 기준과 같은 의미도 담고 있다. 뿐만 아니라 水城이 <그림 1>이나 <사진 1>에서 보듯이 구릉과 구릉사이의 평지에 자리하고 있어 전형적인 차단성의 형태를 하고 있다면 사비도성의 외곽성은 구릉과 평지를 다 같이 지나고 있어 약간의 차이를 보이는 것이 사실이다. 다만 일정 공간을 에워싼 것이 아니라는 점에서는 차단성의 일종으로 볼 수도 있지 않을까 한다.

현재 사비도성의 외곽을 이루는 성벽은 북나성과 동나성이라 부르는 것이 남아 있다. 서나성과 남나성도 있었을 가능성이 있다는 견해도 있지만,¹⁶⁾ 북나성과 동나성만 축조하였을 가능성을 배제할 수 없다.¹⁷⁾ 그런 점에서 이것도 일종의 차단성으로 볼 수 있지 않을까 한다.

이렇게 水城과 같은 차단성은 백제의 성곽으로써는 대단히 이례적인 사례라고 볼 수 있다. 너무나

그러한 차단성을 평지에 축조하였다는데 특징이 있다. 예를 들어 탄현에 설치한 柵은 도성이 아니라 柵이기는 하지만 탄현 정상부에 설치했을 가능성이 있다. 평지가 아니었을 가능성이 높다는 뜻이다.

사실 지금까지 확인된 백제산성은 모두가 자연지형을 적절히 활용하면서 山峯에 축조되어 있는 것이 특징이다. 자연지형을 잘 활용하여 축조하였기 때문에 성벽 바깥쪽으로 급경사면이 이어지고 있어 실제 성벽의 높이보다 훨씬 큰 방어 효과를 거두고 있다. 그런 점에서 水城은 차단성이라는 형태도 특이하지만 그러한 차단성이 평지를 지나고 있다는 점에서 일반적인 백제산성의 입지와는 차이를 보인다. 자연지형을 활용한 잇점을 전혀 살릴 수 없기 때문이다.

이처럼 水城은 형태나 입지면에서 백제산성과는 거리가 있는 방어시설임에 틀림없고, 그것이 664년에 출현하였다는 점에서 그만큼 당시 상황이 긴박하게 돌아가고 있었다는 반증이라고 보고 싶다.

그런데 水城은 성곽으로는 직접 비교할 수 있는 유적이 없지만 전술적인 측면에서는 백제에서 구사한 전술과 유사한 측면이 있다. 博多灣과 大宰府 사이의 평지에 자리하고 있는 水城은 구릉과 구릉사이의 좁은 길목을 차단한다는 점에서 660년 7월에 있었던 황산벌전투와 전술적으로 비슷한 면이 있다고 생각되기 때문이다.¹⁸⁾

황산벌전투의 현장에 대해서는 논산시 연산면의 한민대학교 부근 설,¹⁹⁾ 開泰寺 부근 설,²⁰⁾ 連山面靑銅里 대봉 부근 설,²¹⁾ 등이 있는데, 개태사 부근일 가능성이 높다고 생각한다.²²⁾ 개태사 부근이야말로 성충이 그토록 강조하던 ‘활하고도 좁은 길’에 해당되기 때문이다.²³⁾ 그렇다면 그 지정학적인 위치는 水城이 자리한 위치와 매우 흡사하다. 즉 성벽이 있느냐 없느냐의 차이는 있지만 좁은 길목에서 소수의 군대로 대세를 맞이하고자 했던 점이 통하는 면이 있다. 그렇기 때문에 일본 야마토정권도, 백제 유민도 博多灣에 상륙하여 곧바로 大宰府政廳으로 들어타진 나당연합군을 대비하여 종래에 볼 수 없었던 차단성이라는 특이한 방어시설을 탄생시킨 것이 아닌가 한다.

물론, 본격적인 ‘조선식산성’을 축조하고자 하였을 때 가장 먼저 축조한 것이 長門國城이라는 사

설이다. 사료 <A-(2)>에서 보듯이 水城을 축조한 그 이듬해(665)부터 長門國城, 大野城, 基肄城 등 본격적인 산성을 축조하게 되는데, 그 중 처음으로 축조한 것이 長門國城이다. 가장 먼저 축조했다는 것은 그만큼 전술적인 가치가 높다는 의미가 될 것이다. 그렇다면 長門國城은 어떻게 해서 이렇게 전술적으로 가장 중요한 산성이 되었을까.

大野城이나 基肄城과 달리 長門國城은 현재 그 정확한 위치가 어디인지 알지 못하고 있다. 유적이 발견되지 않고 있기 때문이다. 다만 그 명칭으로 보았을 때 현재의 山口縣 일대에 자리하였으리라는 것은 쉽게 짐작해 볼 수 있다. 그래서 下關市の 唐櫃山說, 四王寺山說, 茶臼山說, 등이 있고, 門司市の 古城山을 꼽는 견해도 있다.³⁸⁾

그런데 下關市 長府町에 위치한 '火の山'을 후보지로 보는 견해가 있다.³⁹⁾ 이 산은 <그림 2>에서 보듯이 해발 286m의 독립 구릉으로, 그 입지가 讃岐의 尾鷲城이나 備後の 炭城과 흡사하다. 다시 말해서 일반적인 '조선식산성'의 입지와 비슷한 조건을 갖추고 있다.

뿐만 아니라 이곳은 일본의 本州와 九州 사이에 놓여 있는 關門海峽을 한눈에 조망할 수 있고, <사진 2>에서 보듯이 바로 건너편으로는 門司市の 古城山이 마주보고 있어 關門海峽 중에서도 가장 폭이 좁은 곳이다. 이곳을 천연의 요새이자 '일본의 수에즈'라고 부르는 것도 그 때문이다. 그래서 그런지 이 '火の山' 주변에는 실제로 敏達朝에 축조한 古城이 이곳에 있었다는 전언도 있다고 한다.⁴⁰⁾

이렇게 瀬戸内海로 들어가는 길목이라서 한반도에서 일본 近畿地域으로 가기 위해서는 반드시 거쳐야 하는 요충인 데다가 폭이 좁아 전술적으로 대단히 중요한 곳이 關門海峽이다. 만약 나당연합군이 배를 타고 이곳을 지나가고자 할 때 關門海峽 양쪽에서 활을 이용하여 火攻을 하면 이 좁은 해협을 부사히 통과할 수 있는 배는 한척도 없을 것이다. 백제 유민이 이곳에 가장 먼저 산성을 축조한 것도 그 때문 아니었을까 한다. 다시 말해서 가장 먼저 水城을 축조한 것으로 보아 大和 정권이나 백제 遺民들의 1차적인 전략은 나당연합군이 九州를 점령하지 못하도록 하는 것이었다고 생각된다. 이러한 전략이 실패로 돌아갔을 때 두 번째 전략으로

생각한 것이 나당연합군이 瀬戸内海(瀬戸内海)로 들어서지 못하도록 하는 것이었다. 최초의 조선식산성을 長門國에, 그것도 가장 좁은 關門海峽을 제압할 수 있는 곳에 축조한 것은 그 때문이다.

물론 나당연합군이 關門海峽을 통과하지 않고 주변 어딘가에 상륙할 수도 있다. 실제로 이 關門海峽의 중간 쯤에 해당되는 赤間神宮 주변은 조선시대 때 이곳을 지나던 조선통신사가 상륙한 곳으로 알려져 있다. 이곳에 항구가 있었다는 의미가 될 것이다. 따라서 시간차가 나기는 하지만, 나당연합군이 일본 열도를 침공한다고 했을 때 이곳에 상륙하여 육로로 이곳을 통과할 가능성도 완전히 배제할 수는 없다. 이곳에 長門國城을 축조한 또 하나의 목적은 바로 그렇게 육로로 진격하는 나당연합군을 방어하기 위함이 아니었을까 한다.

이처럼 상륙하여 육로로 전진하고자 할 때에는 상륙하고자 하는 浦口를 제압하고, 배를 타고 關門海峽을 통과하고자 할 때에는 해협의 양쪽에 배를 해 있다가 火攻을 가함으로써 더 이상 전진하지 못하도록 할 수 있는 곳이 長門國城이었다. 그야말로 '水陸의 要衝' 이었던 셈이다. 그래서 산성 중에서 가장 먼저 이 산성을 축조한 것이 아닌가 한다.

長門國城은 이렇게 浦口와 海峽을 동시에 제어할 수 있는 기능을 갖고 있었다고 생각된다. 이곳을 이렇게 효과적으로 제어할 수만 있다면 나당연합군이 九州를 장악했다 하더라도 近畿地域을 수중에 넣기는 대단히 어려웠을 것이다. 당연히 그 위치는 '火の山'을 비롯한 주변 일대, 다시 말해서 關門海峽에서 그다지 멀지 않은 곳에 자리하고 있었던 것이 아닐까 한다. 關門海峽에서 멀면 멀수록 이곳을 제어하기에 불리했을 것이기 때문이다.

이렇게 長門國城을 '水陸의 要衝' 이라고 보았을 때 그러한 방어체계는 加林城을 통해 기벌포와 금강을 동시에 통제하였던 백제의 전략·전술과 닮아 있어 흥미롭다.

주시하다시피 백제는 멸망하기 전에 長門國城과 같은 위치에 성곽을 쌓아 외부 세력의 침입에 대비했던 경험이 있었다. 그것이 다름 아닌 加林城이다.

가림성은 지금의 부여군 임천면에 있는 성흥산성으로 비정된다.⁴¹⁾ 백제가 왕도 방비를 위해 이곳에 산성을 축조한 것은 동성왕 23년(501)이었다.⁴²⁾ 다

시의 왕도 항주나 사비기의 왕도 부여는 금강의 동쪽임에도 왕도 방비를 위한 산성을 금강의 서쪽에 축조한 것은 금강 하구에 자리하고 있던 伐伐浦와 금강을 동시에 제어할 수 있는 위치에 해당되기 때문이다.

유사시에 외부 세력이 금강을 통해 사비도성에 이르기 위해서는 伐伐浦에 상륙하지 않으면 안 되었다. 成惠이나 興首가 유사시 ‘水軍을 伐伐浦 안으로 들어오지 못하게 하라’¹⁰⁰고 한 것이나 ‘당나라 군사가 白江에 들어오지 못하게 하라’¹⁰¹고 주문한 것도 그 때문이다.

앞에서도 설명하였듯이 강은 아무 곳이나 배를 정박할 수 있는 것이 아니어서¹⁰² 기벌포와 같은 특별한 장소에서만 정박이 가능하였다. 나머지 다른 곳은 갯벌처럼 되어 있어서 배를 댈 수 있는 곳이 아니었다. 따라서 금강을 통해 사비도성을 공격하기 위해서는 기벌포에서 상륙하여 육로로 사비도성까지 나아가든지, 아니면 기벌포를 그대로 지나친 다음 사비도성까지 금강을 거슬러 배로 나아가는 방법이 있었다.¹⁰³

그런데 금강은 다른 강도 마찬가지로지만 상류로 갈수록 폭이 좁아지 강변 좌우 언덕에 배복하고 있다가 불화살로 공격하면 배는 손쉽게 되고 만다. 배를 타고 사비도성까지 나아갈 수 없었던 것도 그 때문이다. 백제의 大臣들이 ‘조룡속에 있는 닭을 죽이고, 그물에 걸린 물고기를 잡는 것과 같다’¹⁰⁴고 얘기한 것이 이것이다. 가림성에서 1차적으로 기벌포쪽으로 군사를 보내 기벌포로의 상륙을 저지하고, 이것이 여의치 않거나 침입세력이 강을 거슬러 올라오게 되면 2차로 강정쪽으로 군사를 보내 배복하면서 기나릴 수 있는 곳이 가림성이었다. 백제 가림성을 ‘수륙의 요충’¹⁰⁵이라고 표현한 것도 그 때문이다.

長門國城이 關門海峽 부근 어딘가에 있었을 것으로 보는 이유가 여기에 있다. 그랬기 때문에 조선식산성 중에서 가장 먼저 長門國城을 축조하였을 것이다. 다시 말해서 지금까지 알려진 9개의 ‘조선식산성’ 중에서 가장 중요한 성을 하나만 꼽으라면 바로 이 長門國城이 될 것이다. 야마토정권의 입장에서나 백제 遺民의 입장에서 나당연합군이 일본 열도를 공격해 온다면 방어할 수 있는 가장 유리한 곳을 이곳으로 판단한 셈이다. 그래서 이곳에 최초

의 산성을 축조하였다고 생각한다.

셋째, 長門國城이나 大野城, 基肄城을 축조한 다음에는 667년에 高安城, 屋嶋城, 金田城을 축조하여 淸野작전을 구사할 수 있는 준비를 마쳤다는 사실이다.

앞에서도 설명하였듯이 야마토정권과 백제 遺民들의 1차적인 전략은 나당연합군이 九州를 점령하지 못하도록 하는 것이었다. 아무리 나당연합군이라 하더라도 九州를 장악하지 못한 채 곧바로 近畿地域을 공격할 수는 없기 때문이다. 그렇게 하다가 세토내해(瀬戸内海)에 세 되로라도 차단당하게 되면 나당연합군은 그야말로 ‘조룡 속의 새나 그물에 걸린 물고기’와 같은 상황이 되기 때문이다.

나당연합군의 입장에서 본다면 먼저 九州를 장악하여 교두보를 확보한 다음, 이곳을 발판으로 세토내해(瀬戸内海)로 나아가야만 近畿地域을 공격할 수 있다. 야마토정권과 백제 유민들의 입장에서 본다면 九州地域이 나당연합군의 수중에 들어가면 세토내해(瀬戸内海)나 近畿地域을 방어하는 것이 대단히 불리해지지만 九州地域을 지켜낸다면 그 만큼 近畿地域을 지켜내는데 유리할 수밖에 없다. 결국 九州地域을 누가 장악하느냐에 승패가 달려 있었던 셈이다.

그럼 九州地域을 장악한다는 것은 무슨 뜻일까. 그것은 바로 大宰府 政廳을 누가 차지하느냐가 중요한 관건이다. 만일 나당연합군이 大宰府 政廳을 차지하게 되면 그것은 곧 九州를 장악하게 되었다는 뜻이 되고, 야마토정권과 백제 유민들이 大宰府 政廳을 지켜내게 되면 나당연합군의 공격을 물리치게 되는 셈이다.

이처럼 大宰府 政廳을 누가 차지하느냐가 九州地域을 누가 장악하느냐로 연결되고, 九州地域을 누가 장악하느냐에 따라 近畿地域 또한 누가 장악하느냐가 결정되기 때문에 결국 야마토정권이나 백제 유민들의 입장에서 九州地域을 지켜내는 것이 중요한 승부처가 될 수밖에 없었다. 長門國城의 축조에 뒤이어 大宰府 政廳 주변에 大野城과 基肄城을 축조한 것은 그 때문이었던 것으로 이해된다. 다시 말해서 水城만으로는 나당연합군의 공격을 방어하기에 벅차다고 생각하고, 추가로 大宰府 政廳 주변에 방어력을 추가한 것이 곧 665년에 있었던 大野

城과 基肄城의 축성이다. 大宰府 주변에 이러한 산성을 배치함으로써 水城이 뚫리게 되면 곧바로 이 두 산성으로 들어가 농성함으로써 나당연합군이 九州를 장악하지 못하게 하고자 한 것이 당시의 전략이었다고 생각된다.

이렇게 九州와 關門海峽에 방어력을 집중하여 1차적으로는 九州를 방어하고, 이것이 여의치 않게 되면 2차적으로 關門海峽을 방어함으로써 나당연합군이 세토내해(瀬戸内海)로 들어오지 못하도록 하는 것이 665년까지의 전략이었다.

667년에 들어서서 高安城, 屋嶋城, 金田城 등이 추가로 축조된 것은 나당연합군을 방어하기 위한 전략이 또 한번 변화했음을 의미한다. 여기서 말하는 高安城은 <그림 3>에서 보듯이 오사카 남부지역에 자리하고 있고, 屋嶋城은 시코쿠(四國)의 香川縣에 위치하고 있고, 金田城은 對馬島에 있다. 對馬島~세토내해(瀬戸内海)~近畿地域에 이르는 긴 간선도로의 요소요소에 산성을 축조한 셈이다. 다시 말해서 665년까지의 전략이 關門海峽이나 九州地域에 한정되어 있었다면 이제는 對馬島에서 近畿地域에 이르는 긴 전선을 구축하였다.

나당연합군이 일본 열도를 공격한다면 통과할 수밖에 없는 공격로 주변에 산성을 배치한 것은 백제, 아니 삼국이 공히 구사하던 清野作戰을 시도하기 위함이었다고 생각한다. 백제가 청야작전을 시도하였던 것은 眞硯城을 통해서 알 수 있다.

D. 幅信 등은 眞硯城이 강에 임하여 높고 험하고 요충지에 해당되므로 군사를 더하여 지키게 하였다. 仁軌가 밤에 신라 군사를 독려하여 성가위에 육박하였는데, 날이 밝을 무렵에 성으로 들어가 800명을 목 베고 드디어 신라의 군량 수송로를 끊었다.⁷⁶⁾

<사료 1>에서 보면 백제 부흥운동 당시 부흥군들이 眞硯城에 주둔해 있으면서 신라로부터 扶餘의 나당연합군에게 전해지는 보급품을 차단함에 따라 사비도성에 고립되어 있던 나당연합군이 진현성을 공격하여 함락시킴으로써 비로소 饑道가 개통되었음을 밝히고 있다. 여기서 말하는 眞硯城은 대전시 서구 흑석동에 자리하고 있는 흑석동산성인데,⁷⁷⁾

<사료 1>에서 보듯이 국경에서 사비도성에 이르는 중간지점에 자리하면서 보급품을 차단함으로써 사비도성에 주둔하고 있던 나당연합군을 곤경에 빠뜨리고 있다. 이것이 바로 청야작전이다. 원래 ‘清野’라는 것은 들판이나 민가에 비축되어 있는 곡식을 전부 산성으로 옮겨 적으로 하여금 한톨의 군량도 취할 수 없도록 하는 계책을 말한다.⁷⁸⁾ 산성방어는 이러한 청야가 병행되어야만 효과를 발휘할 수 있는데, 국경선에서 도읍지에 이르는 간선도로가 길수록 유리하다. 667년에 對馬島에서 오사카에 이르는 긴 노선에 산성을 축조한 것도 그 때문이라 생각한다.

요컨대 야마토정권과 백제 유민들은 나당연합군이 일본 열도를 공격해 올지도 모른다는 불안감 속에서 1차적으로는 九州地域을 지켜내는 전략을 채택하였고, 그것이 여의치 않을 때에는 세토내해(瀬戸内海) 안으로 들어오지 못하도록 2차 방어망을 구축하였으며, 마지막에는 국경에서 도읍지에 이르는 침공로 주변에 산성을 배치함으로써 3차 방어망을 구축하였다. 이러한 방어망이야말로 그 자체 백제가 평소 구축하고 있던 관방체계와 아주 흡사한 것이었다.

IV. 맺음말

서일본에는 백촌강전투 후 일본으로 건너간 백제 유민들의 지휘하에 축조된 산성이 자리하고 있다. 그것이 이른바 ‘조선식산성’이다. 백제 유민들의 지휘하에 축조된 산성이기 때문에 당연히 백제산성과 밀접한 관련이 있을 것으로 예상되지만, 그 구체적인 실상에 대해서는 아직까지 잘 밝혀지지 않고 있다. 그것은 양쪽의 산성을 서로 비교할 수 있을 만큼 발굴조사가 충분히 이루어지지 않았기 때문일 것이다. 그래서 여기에서는 ‘조선식산성’의 축성과 관련된 문헌기록을 살펴봄으로써 백제산성과의 관련성을 찾아보았다.

야마토정권과 백제 유민들은 나당연합군이 九州地域을 장악하지 못하도록 하는 것이 1차적인 전략이었던 듯하다. 大宰府 政廳 주변에 水城이나 大野城, 基肄城을 집중해서 축조한 것은 그 때문이라 생각된다.

그런데 이러한 1차 전략이 실패로 돌아갔을 때를 대비해서 축조한 것이 665년에 있었던 長門國城의 축조다. 長門國城은 아직 그 실체가 확인되지 않아 정확한 위치를 알 수 없는 형편이지만, 그렇다 하더라도 長門國에 쌓았다는 기록을 참고해 볼 때 關門海峽 주변에 자리하고 있었을 가능성이 높다고 생각한다. 이곳에 산성을 축조한 이유는 關門海峽을 장악함으로써 나당연합군이 세토내해(瀬戸内海)로 들어서지 못하도록 하고자 한 의도였다. 이것이 바로 2차 방어전략이었다고 할 수 있는데, 伐伐浦와 금강을 장악함으로써 금강을 통한 침입을 차단하던 백제의 방어체제와 대단히 유사한 방어 전략이었다.

이러한 2차 방어방을 구축하고자도 안심이 안 되었던지 대마도에서 시코쿠(四國), 그리고 近畿地域에 이르는 곳에 金田城, 屋嶋城, 그리고 高安城을 축조하였다. 667년에 있었던 일이다. 이것은 국경에서 왕도에 이르는 간선도로 주변에 산성을 배치하여 유사시에 보급품을 차단함으로써 침입세력을 환경에 빠뜨리던 백제의 전형적인 산성 전술, 즉 清野作戰을 그대로 재현한 것이라 할 수 있다.

이렇게 서일본의 ‘조선식산성’은 기록에 남아 있는 것처럼 백제의 유민들의 의해 축조된 만큼 백제산성과 밀접한 관련이 있음을 알 수 있다. 산성이 자리한 위치로 미루어 볼 때 백제가 평소 구사하던 산성 전술을 그대로 재현한 것이라 해도 과언이 아니다. 앞으로는 양 지역의 산성에 대한 발굴조사가 이루어져 각 구성 요소별로 어떠한 공통점과 차이점이 있는지가 하나 하나 밝혀지기를 기대한다.

【참고문헌】

1. 사료

『삼국사기』, 『日本書紀』, 『續日本書紀』, 『翰苑』

2. 단행본 / 보고서

김영국 외, 2019, 『부여 청마산성』, 백제문화재연구원.

박순발·성정용, 2000, 『百濟泗沘羅城』, 충남대 백제연구소.

박순발 외, 2002, 『百濟泗沘羅城』 III, 충남대 백제연구소.

서정석, 2002, 『百濟의 城郭』, 학연문화사.

손영식, 1987, 『韓國 城郭의 研究』, 문화재관리국.

심상욱·성현화, 2013, 『성흥산성』 (Ⅱ), 부여군 문화재보존센터.

심상욱 외, 2017, 『부여 가림성』 (Ⅰ), 백제고도문화재단.

심상욱·이병호, 2018, 『부여 가림성』 (Ⅱ), 백제고도문화재단.

안승주·서정석, 1996, 『성흥산성분지발굴조사보고서』, 충남발전연구원.

오종길 외, 2016, 『禮山 任存城 建物址遺蹟』, 백제문화재연구원.

이희진, 2004, 『전쟁의 발전』, 동아시아.

鏡山猛, 1968, 『大宰府都城の研究』, 風間書房.

古代山城サミット實行委員會, 2010, 『あつまれ! 古代山城』.

九州歴史資料館, 2009, 『水城跡』 (上)·(下).

福岡縣教育委員會, 1976, 『水城』 (昭和 50 年度發掘調査報告).

小田富士雄, 1980, 『朝鮮式山城と神籠石』 『ゼミナール日本古代史』 (下).

_____, 1983, 『北九州瀬戸内の古代山城』, 名著出版.

_____, 1985, 『西日本古代山城の研究』, 名著出版.

_____, 1985, 『朝鮮式山城と神籠石』 『九州古代文化の形成』 下卷, 學生社.

齊藤忠, 1968, 『日本古代遺迹の研究』, 吉川弘文館.

向井一雄, 2017, 『よみがえる古代山城』, 吉川弘文館.

3. 논문

김중수, 2016, 『일제강점기 부여 고적의 재해석과 고적관왕의 성격』 『文化財』 49-1, 국립문화재연구소.

서정석, 2000, 『百濟 5 方城의 位置에 對한 試考』 『湖西考古學』 3, 호서고고학회.

_____, 2007, 『사비도성의 방비체제와 금강』 『백제와 금강』, 서경.

_____, 2010, 『의자왕의 전략과 황산벌전투의 실상』 『年史』 76, 군사편찬연구소.

_____, 2012, 『일본 고대산성 연구의 현단

계」『백제와 주변세계』, 진인진.

_____, 2013, 「백제산성이 일본『朝鮮式山城』에 끼친 영향」『역사와 담론』 67, 호서사학회.

_____, 2018, 「관방유적」『일본속의 百濟 - 남부지역』, 충남역사문화연구원.

성주탁, 1982, 「百濟泗沘都城研究」『百濟研究』 13, 충남대 백제연구소.

_____, 1989, 「韓國 古代山城의 日本傳播」『國史館論叢』 2, 국사편찬위원회.

_____, 1990, 「百濟 炭岬 小考」『百濟論叢』 2, 백제문화개발연구원.

심정보, 1983, 「百濟 復興軍의 主要 據點에 對하여」『百濟研究』 14.

_____, 2010, 「백제사상 황산벌진투와 삼영 설치에 대하여」『충정학과 충정문화』 10.

연민수, 1996, 「西日本 지역의 朝鮮式山城과 그 性格」『韓國古代史論叢』 8, 가락국사적개발연구원.

유원재, 1996, 「百濟 加林城研究」『百濟論叢』 5, 백제문화개발연구원.

윤무병·성주탁, 1977, 「百濟山城의 新類型」『百濟研究』 8.

이남석, 1999, 「禮山 鳳首山城(任存城)의 現況과 特徵」『百濟文化』 28.

李章熙, 1995, 「王亂中 山城修築과 堅壁清野에 對하여」『草村中延澈教授停年退任紀念史學論叢』.

田中俊明, 1990, 「王都로서의 泗沘城에 對한 豫備的 考察」『百濟研究』 21, 충남대 백제연구소.

차용걸, 2005, 「백제지역의 고대산성」(백제문화개발연구원 역사분고 18), 주류성.

_____, 2007, 「제 5 절 일본에 있는 백제계 산성들」『百濟의 建築과 土木』(백제문화사대계연구총서 15), 충남역사문화연구원.

최식영, 2003, 「일제 식민지 상황에서의 부여(扶餘) 고작에 대한 재해석과 '관광명소' 화」『비교문화연구』 9-1, 서울대학교 비교문화연구소.

홍사준, 1967, 「炭岬考」『역사학보』 35·36.

홍재선, 1982, 「百濟 泗沘城研究」, 동국대학교대학원 석사학위논문.

鏡山猛 外, 1965, 「おつば山神籠石」, 佐賀縣 武雄市.

關野貞, 1913, 「所謂神籠石は山城址なり」『考古學

雜誌』 4 권 2 호.

박순발, 2000, 「百濟 泗沘羅城의 構造」『古文化談叢』 44.

西谷正, 1994, 「朝鮮式山城」『岩波講座 日本通史』(제 3 권) 古代 2.

成周鐸, 1980, 「大野城小攷」『古文化論攷』, 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行會.

小野忠熙, 1983, 「石城山神籠石」『北九州瀬戸内の古代山城』, 名著出版.

小田富士雄, 2000, 「日本の朝鮮式山城の調査と成果」『古文化談叢』 44.

李進熙, 1977, 「朝鮮と日本の山城」『城』(土田正昭 編), 社會思想社.

長沼賢海, 1932, 「水城の大樋の調査」『史跡名勝天然記念物調査報告書 제 7 집』, 福岡縣.

赤司善彦, 2017, 「大宰府と古代山城の誕生」『徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生』(發表資料集), 九州國立博物館·熊本縣教育委員會.

井上秀雄, 1987, 「東アジアのなかの古代朝鮮の城郭」『東アジアと日本』, 吉川弘文館.

豐元國, 1985, 「長門城の所在について」『北九州瀬戸内の古代山城』(小田富士雄 編), 名著出版.

蓮華文を有する陶板について ～塚原遺跡群出土未報告資料の紹介～

上田 龍児

1. 経緯

令和元年12月12日、大野城市の文化財収蔵庫を整理中に1点の資料（以下、本資料）が目にとまった。一見して瓦に見えたが、手にとって観察してみると表面に蓮華文を表現していることが分かった。新しい時代の遺物である可能性も考えたが、全体的に古代の遺物の雰囲気であったため、持ち帰って図化し類例を検討することとした。

本稿は、塚原遺跡群出土未報告資料を紹介するものである。

2. 塚原遺跡群の概要と出土状況

(1) 遺跡の概要

塚原遺跡群は大野城市牛頸に所在する。牛頸川

左岸の河岸段丘上に位置し、牛頸窯跡群の中央部にあたる（図1）。

1991～1993年度にかけて発掘調査を実施し、1994年度に報告書を刊行した。調査では古墳時代の群集墳、古墳時代～古代の集落跡や縄文時代集落の一部を確認した（図2）。群集墳は調査区南側に位置し、5世紀後半に始まり6世紀前半頃まで新規造墓が認められる。6世紀後半～末になると群集墳の北側に集落が出現する。一部は古墳を破壊して竪穴住居がつけられており、この段階になると古墳への営みは停止していた可能性が高い。当該期は牛頸窯跡群で窯の基数が増加する生産の拡大期にあたり、周辺では多数の竪穴住居で構成する集落が複数出現することから、塚原遺跡の集落の出現もこの脈絡の中で理解できる。竪穴住居は30棟ほどあり、多くは6世紀末～7世紀前半頃のもので、7世紀中頃～8世紀後半まで継続する。竪穴住居群の東側・北側には掘立柱建物が複数あり、詳細な時期は不明であるが住居群と併



図1 塚原遺跡群の位置

存する可能性が高い。このほか、住居に混在して多数の土坑があり、大半が8世紀の廃棄土坑である。なかでもSK12などは多量の須恵器が出土しており、出荷する須恵器の選別に関わる遺構である可能性も指摘される。牛頸窯跡群が終焉を迎える9世紀前半には集落が断絶することからも、須恵器生産に関わる集落と想定される。

(2) 出土状況

本資料が収納されていた袋には、「21号墳石室

アナ 911118」というラベルが伴っていた。21号墳は群集墳の中では最も北側の集落域に近い場所に位置する。直径8mほどの円墳で、墳丘は完全に消滅しており、横穴式石室の基底石および敷石の一部が残存する。石室中央～奥壁は、直径1.5～2.0mほどの円形土坑により破壊されている。ラベルに記された「アナ」というのは、この円形土坑（報告書では「攪乱」と表現）である可能性が高い。なお、同じ袋に収納されていた遺物は、古墳時代～奈良時代の須恵器が主体であり、本資

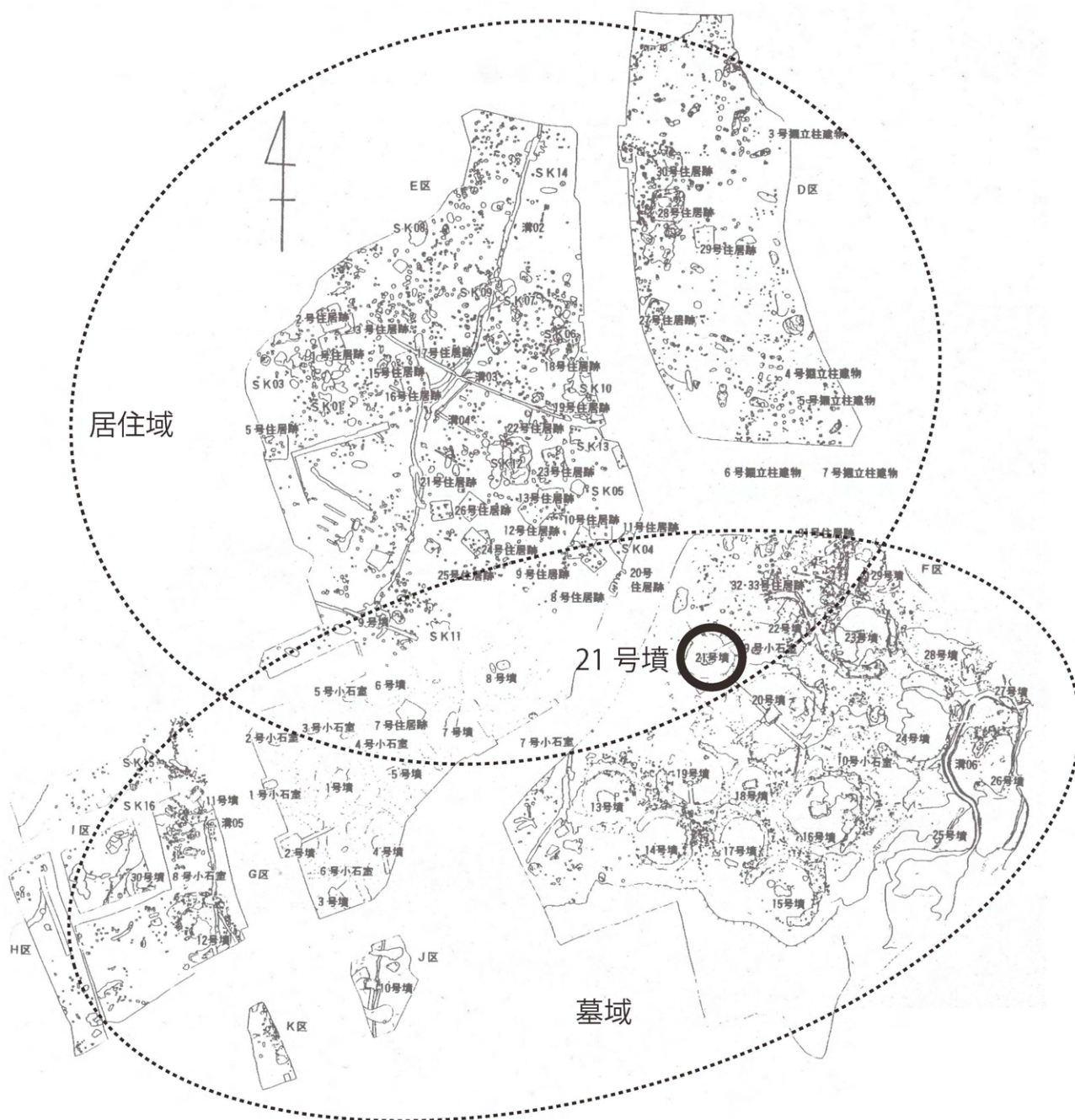


図2 塚原遺跡群遺構配置図

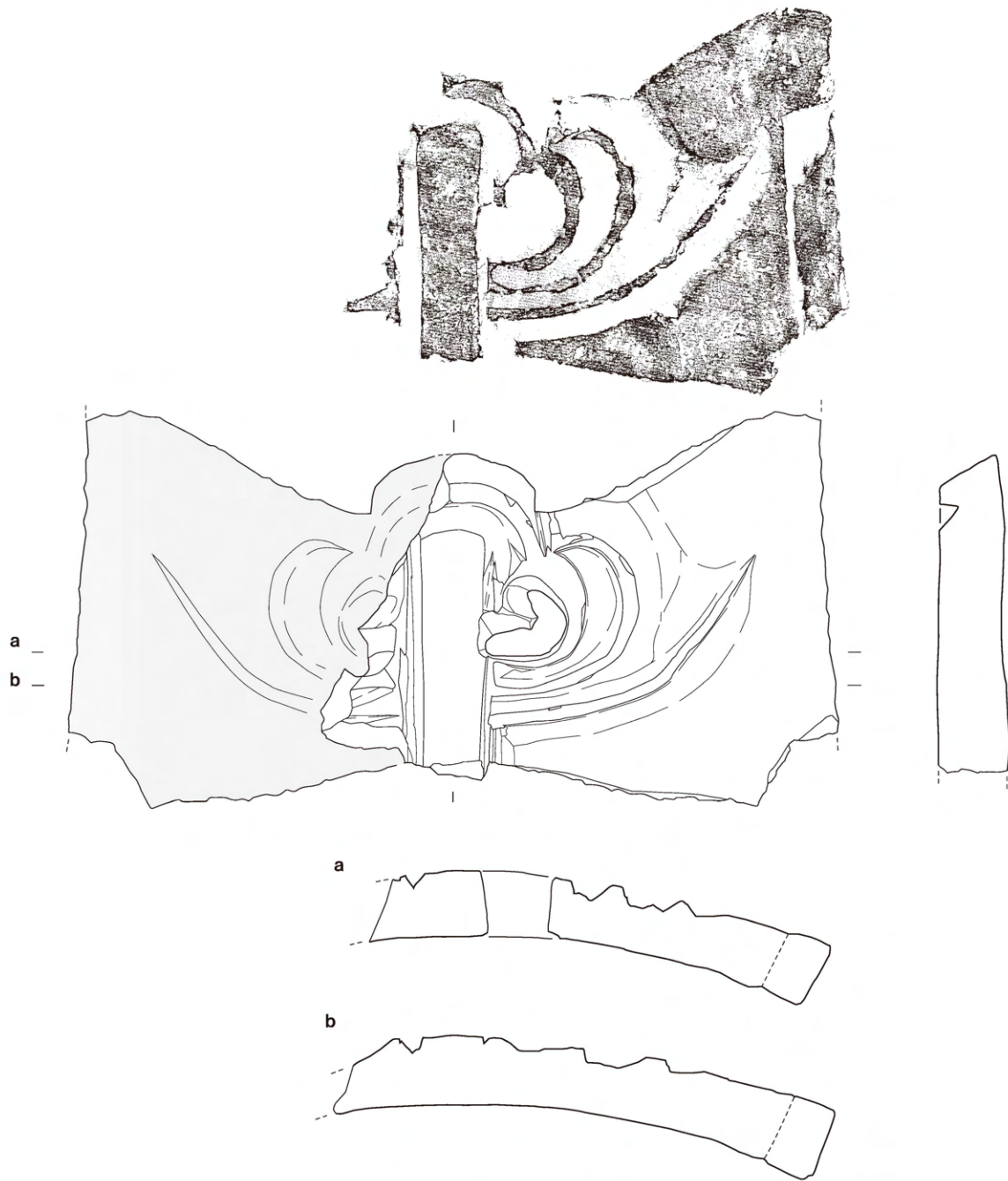


図3 塚原遺跡群出土の陶板



写真1 陶板（凸面）



写真2 陶板（凹面）

料はこれらと一緒に出土したものと考えられる。ただし、本来的に円形土坑に伴うかどうかは不明であり、明確な共伴遺物は不明といわざるを得ない。

3. 資料の紹介 (図3、写真1・2)

図3に図示した。破片であるため全形は不明であるが、厚さ1.9～2.3cmの板状を呈し、現状の幅は15.7cm、推定復元で最大幅23.4cmである。短軸方向に若干湾曲しており、平瓦のような形態となる。片面（以下、凸面）に側面観の蓮華文を表現する。2本の直線的な線刻により中軸線を描いた後、頂部を削り出し、中心部の花卉を透かし彫りする。その後、中心側の花卉から外側の花卉へと描画していったことが、粘土の乾燥状態から復元できる。ヘラ状工具により施文しており、ヘラケズリ状の痕跡が残る。鉄刀子のような工具が想定できよう。凸面は不定方向のナデ、裏面（以下、凹面）は横（短軸）方向のナデである。側縁部は幅1.5cmほどの粘土紐を継ぎ足しており、側縁部にケズリを施し、継ぎ足し部の裏面は縦方向のナデを施す。タタキの痕跡や布目痕・模骨痕は確認できず、端部に継ぎ足しがあることや凹面・凸面を丁寧にナデる点など、通常の平瓦の製作技法と

は異なっている。

焼成は良好で瓦質というより須恵質である。凸面は褐灰色、凹面は灰色を呈する。胎土中に1～2mmの白色砂粒や黒色粒子を含む。器面には靱殻状の圧痕が複数有り、破断面でも確認できることから混和材の可能性がある。また、胎土中には繊維状の物質を含む。

4. 類例の検討

側面観の蓮華を表現した瓦や鴟尾もしくは瓦塔のような器物である可能性を想定して、類例を検討した。

側面観の蓮華を表現した資料 ①近江に分布する蓮華文方形軒瓦、②大阪・西淋寺跡や扶余王興寺の鴟尾などが挙げられる（図4）。

本資料はわずかに凸状を呈する面に施文することから、①の可能性は低い。また、推定幅25cmほどであり鴟尾にしては小さく、また横方向に湾曲していることや側縁部も表面と同程度の焼成具合であることから、②鴟尾の可能性も否定される。

このほか、近いモチーフを有す資料としてパルメット文を有する隅木蓋瓦もあるが、やはり湾曲することや側縁部の焼成具合から可能性は低い。

瓦塔 瓦塔で透かしを有する部位として、水煙が



図4 側面観の蓮華を表現した資料

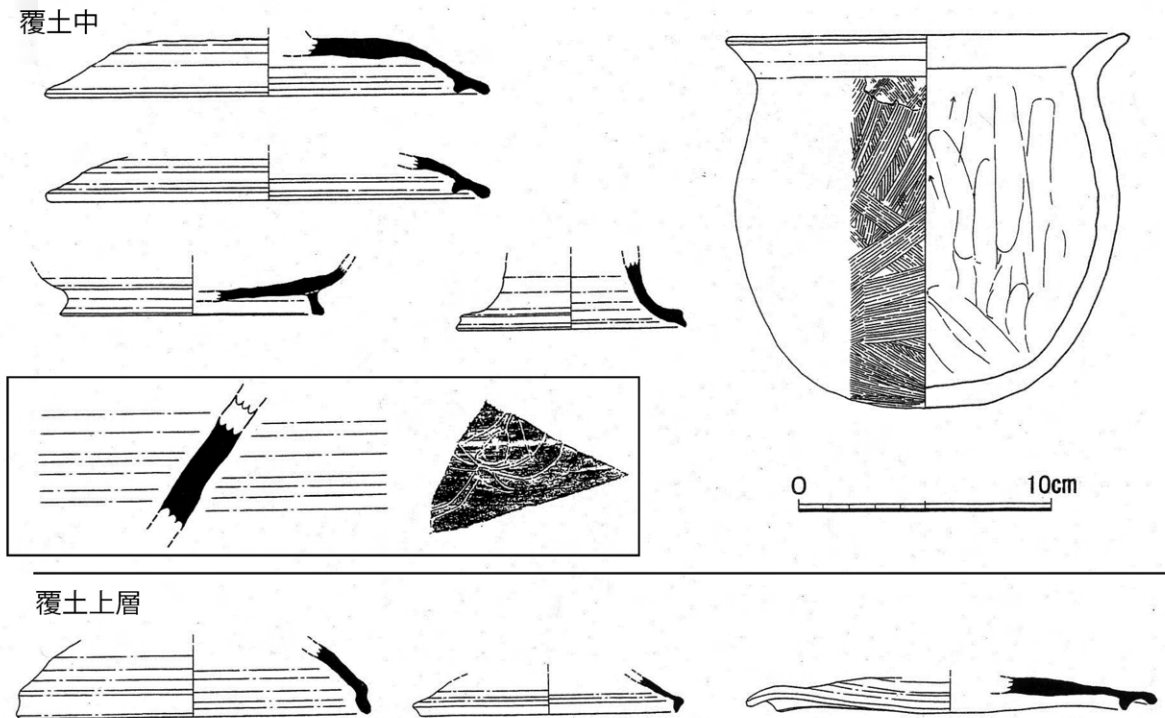


図5 上園遺跡14次SC12出土遺物

ある。本資料は凹面には文様がなく、片面のみを見せる意図がうかがえることから、水煙の可能性はない。また、瓦塔に伴う水煙と仮定した場合、非常に長大な瓦塔を想定する必要があり、この点からも否定される。

5. 結論

性格 凸面に蓮華文の側面観を透かし彫り・線彫りで表現した陶板、という以外に用途・機能については全く不明であるが、蓮華文という性格上、仏教的な器物が想定される。実際、牛頸窯跡群では、瓦はもちろんのこと水瓶・托や瓦塔を生産し、本堂遺跡では8世紀後半を中心に仏教的な性格が強い墨画土器や香炉蓋・相輪形鈕蓋、「識」・「山門」銘墨書土器などの仏教的遺物が出土している。また、本堂遺跡12・17次SB04のような村落内寺院と考えられる遺構や、御供田遺跡（九州大学筑紫地区遺跡群）でも古代の寺院跡が確認される。

以上より、本資料は仏教的な器物であり、道具瓦の一種である可能性を提示しておきたい。

製作時期 製作時期については不明である。上述したように、本資料を道具瓦と仮定した場合、塚原遺跡群では7世紀中頃以前のいわゆる初期瓦が

伴うものの奈良時代以降の瓦が出土していないこと、類例のない珍奇な1点ものであることから、牛頸窯跡群で初期瓦を生産する6世紀末～7世紀前半頃の所産である可能性を提示したい。

ところで、牛頸窯跡群開窯期以来の須恵器工人集落である上園遺跡では、7世紀後半の堅穴住居の中から側面観の蓮華文をへら書きした須恵器片が出土している（図5）。上園遺跡では7世紀以降の資料がやや乏しく、特に7世紀後半段階における評価は今後更なる検討を要するが、周辺では依然として須恵器の窯が継続していることから、工人集落であった可能性は充分想定できる。したがって、牛頸窯跡群内には少なくとも7世紀後半には側面観の蓮華文を表現しうる須恵器工人がいた可能性が高い。塚原・上園の両資料とも側面観の蓮華文を表現する点で共通している点は非常に興味深い。

以上、本資料について7世紀前後に生産された道具瓦の一種と想定した。当該期の牛頸窯跡群では、渡来人が居住し窯業生産に関わっていたことが明らかになっている。塚原遺跡群で出土した蓮華文を施す陶板は、いち早く外来文化を摂取し、焼物として生産するという牛頸窯跡群の特徴の一

つを示す資料である可能性がある。

いずれにせよ、類例不明の器物であり、年代や性格については根拠が脆弱である。今後も継続して類例の探索を行うとともに、検討を進めていきたい。

図3は上田が実測、小嶋のり子が製図・採拓した。写真1・2は上田が撮影した。その他の図は、各参考文献より引用（一部改変）した。

謝辞

本稿をなすにあたり、ふるさと文化財課職員より教示を得た。また、一般的な瓦との比較については元大野城心のふるさと館職員主税和賀子氏よりご教示を得た。記して感謝申し上げます。

【参考文献】

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会，1975，『榎木原遺跡発掘調査報告－南滋賀廃寺瓦窯－』。

大野城市教育委員会，1995，『牛頸塚原遺跡群』，大野城市文化財調査報告書第44集。

羽曳野市教育委員会，1995，『古市遺跡群XVI』，羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第32集。

大脇潔，1999，『日本の美術 第392号 鷗尾』。

羽曳野市教育委員会，1999，『古市遺跡群XX』，羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第37集。

大野城市教育委員会，2008，『牛頸窯跡群－総括報告書－』，大野城市文化財調査報告書第77集。

九州大学総合博物館，2009，『奴国の南－九大筑紫地区の埋蔵文化財－』（九州大学総合博物館平成20年度公開展示・九州国立博物館トピック展示図録）。

大野城市教育委員会，2015，『上園遺跡5 第14次調査－』大野城市文化財調査報告書第130集。

洪バルグム（翻訳：岩戸晶子），2020，「9 韓国の鷗尾」『鷗尾・鬼瓦の展開－鷗尾－（古代瓦研究会第20回シンポジウム発表要旨』，奈良文化財研究所。

上田 龍児（うえだ りゅうじ）

大野城市教育委員会ふるさと文化財課係長

西海道における軒丸瓦一本づくり

主税 和賀子

1. はじめに

本稿では、西海道における軒丸瓦一本づくりについて、現状を把握することを目的とする。日本列島では、6世紀後半の飛鳥寺造営以降、造寺技術が伝えられ、その際に瓦をつくる技術ももたらされた（『日本書紀』巻21 崇峻元年）。遺跡から出土する瓦の文様や作り方を観察することで、およそその年代や地域の特徴を把握することが可能である。特にこの40年ほどで、瓦の作り方、製作技法に着目した研究が増加してきた。各地で製作技法に関する事例が蓄積されてきたこともあり、全国を対象にした製作技法の総括的検討が研究会のテーマとして取り上げられるようになってきた（奈良文化財研究所 2018, 2019）。

本稿で扱う西海道についても、瓦の製作技法に関する検討が進められており、そのような中でも、軒平瓦や平瓦の製作技法については、国分寺造営に伴って一枚づくりを採用する地域が多いなど、一定の共通見解が得られてきたと考えられる（栗原 1990, 1999, 梶原 2000, 奈良文化財研究所 2019）。そこで本稿では、各地で発掘調査が増加し、従来個別に事例報告されている軒丸瓦の一本づくり技法に着目し、西海道における現状を整理したい。

2. これまでの研究状況と課題

軒丸瓦の一本づくりは、全国で確認されている。一本づくりについては先行研究で整理されており、A～D技法の4つに類型化されている（鈴木 1990）。A技法は筒形成形台成形、B技法は粘土紐巻きあげ成形で、後述する神ノ前窯跡や月ノ浦窯跡出土の例が挙げられている。C技法は瓦当面嵌め込み成形で、後述する興善寺廃寺出土例が挙げられている。Dは型造り成形で、いわゆる横置型一本作りと呼ばれている方法である。近年では、横置型一本作り技法と国分寺造営期の造瓦技術の展開の関連について言及されている（梶原

2008）。また一本づくり技法を研究会のテーマにして全国的傾向を把握する動きもあるが（奈良文化財研究所 2018, 2019）、地域によって一本づくり技法の内容や時期が異なるため、全国的な議論が難しい状況である。本稿で対象とする西海道は、一本づくり技法が他地域とは様相が異なることも指摘されている（山口 2011）。

西海道では、神ノ前窯跡出土の無文軒丸瓦（石松・高橋 1979）や、興善寺廃寺出土の鬼面文軒丸瓦・単弁八葉軒丸瓦（野田編 1980, 広瀬 1980）、月ノ浦1号窯跡出土の単弁軒丸瓦（石松・舟山 1983）で一本づくりの瓦が早くに報告されている。特に西海道では、後述するように、一本づくり技法が西海道内の造瓦技術の展開のあり方と関連するため、その現象を把握することは重要である。

西海道では、朝鮮半島や畿内でみられる瓦当文様や、観世音寺・大宰府政庁を中心とした大宰府史跡で主に使用された「大宰府系瓦」の瓦当文様の影響を受けた瓦が広くみられる。西海道の瓦研究で基礎となる小田富士雄の一連の研究では、大宰府系瓦の影響を受けた瓦が西海道各地の国分寺を中心とした遺跡で出土することから、国分寺造営時に大宰府から各国へ技術的援助があり、大宰府文化圏のようなものがこの時期に成立したと評価されてきた（小田 1957 a, 1957 b, 1958 a, 1958 b）。そのため、大宰府系瓦がどのように成立したのか、その成立過程が一つの議論となっている。大宰府系瓦の成立については、一本づくり技法との関連を指摘した森郁夫の研究がある。森は、大宰府系瓦の一つである老司式軒丸瓦の特徴として、瓦当裏面下半部周縁が堤状に高く作られることがあり、これは肥後地域で主にみられる、一本づくりから派生した「技法II」（野田編 1980）と関連があるとして、肥後の工人の関与を指摘した（森 1983）。しかし、老司式軒丸瓦と肥後の瓦の年代的矛盾によりこの説は否定されており、近年では筑前や豊前で出土している朝鮮半島系瓦と関連する可能性も指摘されている（高橋 2007, 杉原 2007）。大宰府系瓦の成立過程と一本づくり技法の展開の関連の有無を調べるには、まずは西海道における一本づくり軒丸瓦の現状を把

握する必要がある。

3. 西海道における一本づくり軒丸瓦 (図1～3、表1)

西海道出土の古代瓦にみられる主な一本づくりは、瓦当と円筒状の丸瓦を各々製作し、両者を接合して不要部分を除去するという方法である。特徴としては、多くの資料で瓦当裏面の下端に凸帯が残る。また、瓦当裏面に一周するようなナデ調整がみられる場合や、円筒状丸瓦を半裁した際の工具痕（または糸切痕）が丸瓦側面延長上の瓦当側面に確認されることが多い。一本づくりの中でも細部で違いがあり、瓦当裏面に別作りした円筒状丸瓦を接合したり、瓦当裏面に円筒状の丸瓦を製作するもの（Ⅰ-1）と、円筒状丸瓦を瓦当に嵌め込むもの（Ⅰ-2）がみられる（図1）。Ⅰ-1は丸瓦の先端が瓦当裏面にまでしか到達しない。鈴木の本技法に近い。それに対して、Ⅰ-2は丸瓦の先端が瓦当の周縁部を形成する。（鈴木1990）のC技法、（野田編1980）の技法Ⅰに相当する。他地域で確認される縦置き型一本づくり（鈴木の本技法）や横置き型一本づくり（鈴木の本技法）は、西海道では確認されていない。

一本づくりではない軒丸瓦は、瓦当と別作りして半裁した丸瓦を接合する接合式である（Ⅱ）。西海道出土の軒丸瓦では、おおよそ3種の接合方法が確認される（図1）。1つめは半裁した丸瓦を瓦当に被せる方法（Ⅱ-1）、2つめは半裁した丸瓦を瓦当裏面に接合する方法（Ⅱ-2）、3つめは瓦範に途中まで瓦当の粘土を詰めた後に半裁した丸瓦を接合し、残りの瓦当分の粘土を付加するのに合わせて丸瓦を固定する方法（Ⅱ-3）である。

西海道出土の古代瓦のうち、現在管見で確認されている一本づくり軒丸瓦は表1、図2の通りである。主に、筑前、筑後、肥後地域で確認されている。どの地域も早い時期から寺院が造営された地域である。そのなかでも、筑前・筑後ではⅠ-1が多く、肥後ではⅠ-2のみが確認される。一方、同じく早くから多くの寺院が造営された豊前では、一本づくり軒丸瓦がほとんど確認されてい

ない。上坂庵寺跡出土の百済系単弁八葉軒丸瓦でのみ確認されているが、こちらの製作技法については一本づくりか否かについて賛否両論ある。当該資料を実際に観察した結果、瓦当裏面下端にケズリ面を伴う凸帯残り、瓦当裏面には一周するナデ調整が確認され、丸瓦側面延長上の瓦当側面には円筒状丸瓦を半裁したときについたと考えられる工具痕が確認されることから、本稿では本資料を一本づくりとして位置づけたい。

筑前の塔原庵寺や日向の下北方塚原第2遺跡でも、瓦当裏面下端に凸帯をもつ軒丸瓦が出土している。但し、下北方塚原第2遺跡の報告書では接合式と報告されており（西嶋編2011）、塔原庵寺の報告書では特に製作技法については触れられていない（宮小路1967）。実見していないので断定はできないが、老司式軒丸瓦や豊前の新羅系軒丸瓦にみられるような、接合式でありつつも瓦当裏面に凸帯をもつ事例の可能性が高い。一方、肥後の興善寺庵寺出土の単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、先行研究において一本づくり（Ⅰ-2、瓦当嵌め込み式法）とされているが（鶴嶋1991、金田1997）、実際に資料を観察した結果、瓦当裏面に半裁した丸瓦を接合した痕跡がみられ、また、瓦当周縁部は何度も粘土を付加することによって成形されている様子が観察された。よって、本資料は通常の接合式の可能性が残る。

4. 今後の課題

以上、報告が増加してきた一本づくり軒丸瓦について述べてきた。その結果、筑前、筑後、肥後地域で主に一本づくり軒丸瓦が確認され、その中でも筑前・筑後ではⅠ-1、肥後ではⅠ-2が主体を占めることがわかった。今後は、一本づくり軒丸瓦と接合式軒丸瓦との関連について検討を進めることが課題である。この検討を進めることで、西海道において広く影響を及ぼした大宰府系瓦の成立過程について、より検討を深めることが可能となる。

謝辞

資料の実見に際しては、諸機関並びに多くの

方々にお世話になりました。記して深く感謝申し上げます。

【参考文献】

- 石松好雄・高橋章, 1979, 「Ⅲ調査の内容 B 遺物 2 瓦類」『神ノ前窯跡』, 太宰府町文化財調査報告書第2集, 36-38, 太宰府町教育委員会。
- 石松好雄・舟山良一, 1983, 「月ノ浦窯跡の小型瓦」『古代研究』25・26, 95-99。
- 江本直編, 1980, 『興善寺Ⅱ』, 熊本県文化財調査報告第45集, 熊本県教育委員会。
- 大塚紀宜・松尾奈緒子・藏富士寛編, 2013, 『那珂64』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1191集, 福岡市教育委員会。
- 小田富士雄, 1957 a, 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開 (一)」『九州考古学』(1), 8-9。
- 小田富士雄, 1957 b, 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開 (二)」『九州考古学』(2), 8-10。
- 小田富士雄, 1958 a, 「九州に於ける法隆寺系宇瓦の展開」『九州考古学』(3) (4), 7-11。
- 小田富士雄, 1958 b, 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開 (三)」『九州考古学』(5) (6), 10-11。
- 柏原孝俊・山崎頼人編, 2014, 『上岩田遺跡Ⅴ』, 小郡市文化財調査報告書第277集, 小郡市教育委員会。
- 梶原義実, 2000, 「国分寺造営期の瓦供給体制ー西海道諸国の例からー」『考古学雑誌』86 (1), 27-62。
- 梶原義実, 2008, 「横置型一本作り軒丸瓦の諸技法とその年代」『名古屋大学文学部研究論集 (史学54)』, 59-81。
- 片岡宏二編, 1998, 『井上廃寺Ⅰ』, 小郡市文化財調査報告書第122集, 小郡市教育委員会。
- 片岡宏二, 2004, 「筑後における奈良時代以前の古瓦」『福岡大学考古学論集ー小田富士雄先生退職記念ー』, 571-584, 小田富士雄先生退職記念事業会。
- 金田一精, 1997, 「文様・技法からみた肥後の古瓦」『肥後考古』10, 20-40。
- 栗原和彦, 1990, 「九州における平瓦一枚作り」『九州歴史資料館研究論集』15。
- 栗原和彦, 1999, 「奈良時代 大宰府の瓦は縄目瓦であったー第98次南北溝SD2340調査からー」『九州歴史資料館研究論集』24。
- 久留米市教育委員会, 1985, 『東部地区区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第4集』, 久留米市文化財調査報告書第43集, 久留米市教育委員会。
- 酒井仁夫編, 1979, 『神ノ前窯跡』, 太宰府町文化財調査報告書第2集, 太宰府町教育委員会。
- 酒井仁夫・高橋章, 1984, 「豊前地方の8世紀代の軒瓦についてー上坂廃寺跡出土瓦を中心にー」『九州考古学』59, 47-57。
- 坂田邦洋編, 1994, 「玉名郡衙」『玉名市歴史資料集成第12集ー市制40周年記念ー』, 玉名市・秘書企画課。
- 島津義昭, 1983, 「鞠智城についての一考察」『大宰府古文化論叢』上, 745-769, 吉川弘文館, 東京。
- 下村智・荒牧宏行編, 1992, 『那珂遺跡4』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集, 福岡市教育委員会。
- 菅波正人編, 1994, 『那珂10』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集, 福岡市教育委員会。
- 杉原敏之, 2007, 「老司Ⅰ式軒先瓦」『観世音寺考察編』, 93-100, 九州歴史資料館, 福岡。
- 鈴木久男, 1990, 「一本作り軒丸瓦の再検討」『畿内と東国の瓦』, 189-214, 京都国立博物館, 京都。
- 高橋章, 2007, 「筑紫観世音寺軒先瓦の編年と課題」, 西日本古瓦研究会資料。
- 鶴嶋俊彦, 1991, 「肥後における歴史時代研究の現状と課題」『交流の考古学ー三島格会長古稀記念肥後考古』8, 105-133。
- 奈良文化財研究所, 2018, 「第18回 シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅦー一本づくり・一枚づくりの展開1ー」発表要旨。
- 奈良文化財研究所, 2019, 「第19回 シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅧー一本づくり・一枚づくりの展開2ー」発表要旨。
- 西嶋剛広編, 2011, 『下北方塚原第2遺跡』, 宮崎市文化財調査報告書第82集, 宮崎市教育委員会。
- 野田拓治編, 1980, 『興善寺Ⅰ』, 熊本県文化財調査報告第45集, 熊本県教育委員会。
- 広瀬正照, 1980, 「第Ⅲ章調査 2. A地区の調

査（I）第1号遺構「ハ. 出土遺物 瓦」『興善寺 I』, 160-171, 熊本県教育委員会.

松本雅明, 1964, 「詫麻郡家址調査報告－熊本市大江町渡鹿A遺跡について－」『熊本史学』27, 1-11.

松本雅明, 1965, 『陳内廃寺調査報告』, 城南町史編纂会.

宮小路賀宏, 1967, 「第6遺物 1 古瓦」『塔原廃寺』, 福岡県文化財調査報告書第35集, 福岡県教育委員会.

森郁夫, 1983, 「老司式軒瓦」『大宰府古文化論叢』下, 311-331, 吉川弘文館, 東京.

山口亨, 2011, 「九州でいう軒丸瓦「一本作り」技法について」『古文化談叢』65 (3), 151-153.

【挿図出典】

図1, 2, 表1: 筆者作成。

図3: 石松・舟山, 1983; 下村・荒牧編, 1992; 石松・高橋, 1979; 大塚・松尾・藏富士編, 2013; 菅波編, 1994; 柏原・山崎編, 2014; 片岡編, 1998; 片岡, 2004; 久留米市教育委員会, 1985; 酒井・高橋, 1984; 坂田編, 1994; 松本, 1964; 松本, 1965; 島津, 1983; 江本編, 1980をもとに筆者作成。

主税 和賀子（ちから わかこ）

元大野城市心のふるさと館運営課職員

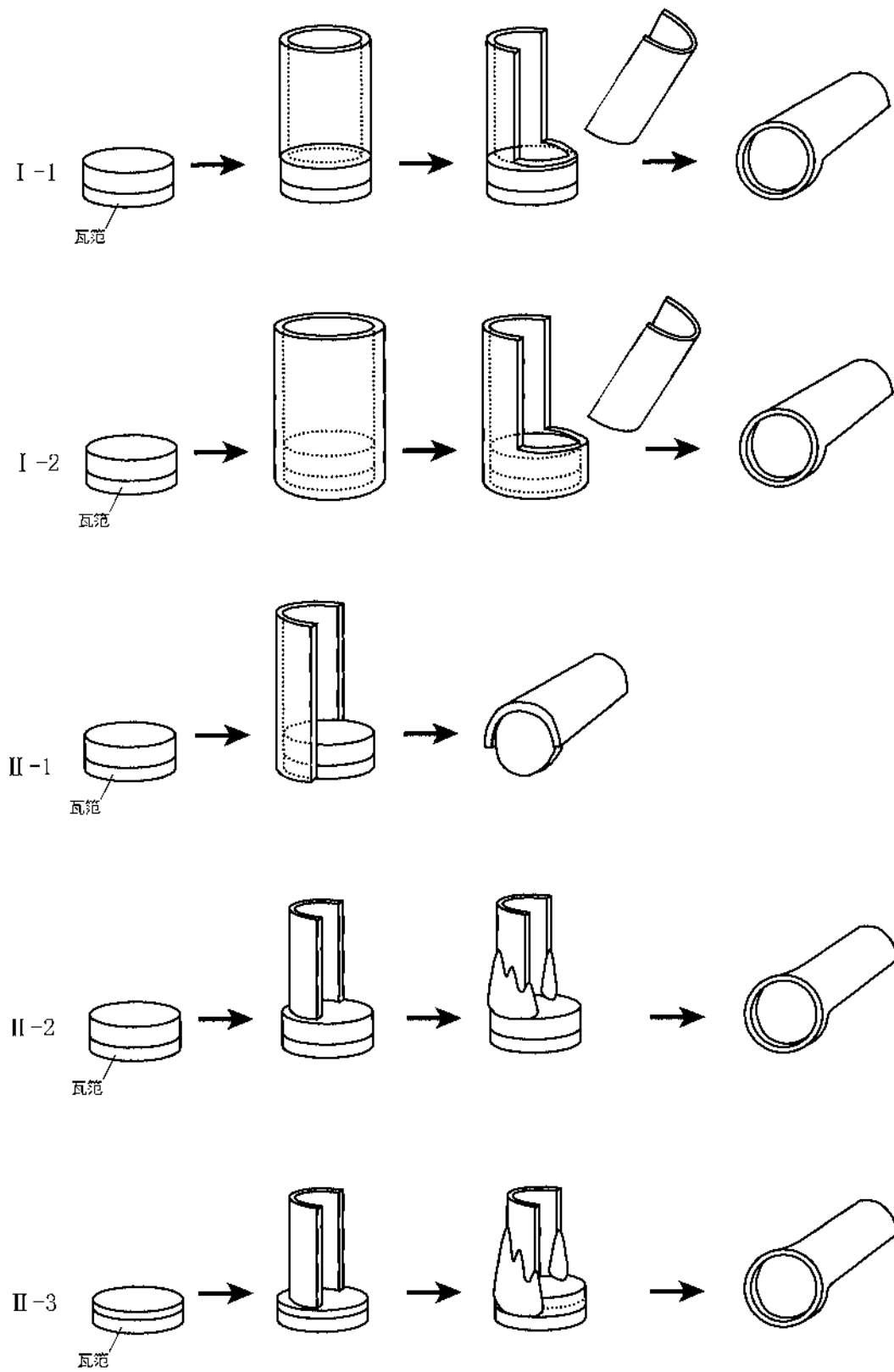


図1 軒丸瓦成形技法の分類

表1 西海道出土の一本づくり軒丸瓦

旧国名	遺跡名	文様・型式名	製作技法	備考	図2No.	図3No.
筑前	月ノ浦1号窯跡	単弁八葉蓮華文	I-1	丸瓦部は粘土紐巻き上げの痕跡あり	1	1-1
	那珂遺跡群			丸瓦部は泥条盤築技法	3	1-2
	月ノ浦1号窯跡	単弁九葉蓮華文	I-1	丸瓦部は粘土紐巻き上げの痕跡あり	1	2
	神ノ前2号窯跡	無文	I-1	丸瓦部は泥条盤築技法	2	3
	那珂遺跡群	単弁七葉蓮華文	I-1	丸瓦部は泥条盤築技法	3	4
	那珂遺跡群	単弁六葉蓮華文	I-1	丸瓦部は泥条盤築技法	3	5
筑後	上岩田遺跡	単弁六葉蓮華文、	I-1	丸瓦部に竹状模骨痕あり	5	6-1
	井上廃寺跡	井上廃寺軒丸瓦1類			6	6-2
	へボノ木遺跡	へボノ木1a式			7	6-3
	へボノ木遺跡	へボノ木1b式	I-1	—	7	7
	へボノ木遺跡	へボノ木1c式	I-1	—	7	8
	へボノ木遺跡	へボノ木4式	I-1	—	7	9
	観興寺	観興寺1式	I-2	—	8	10
豊前	観興寺	観興寺2式	I-2	—	8	11
	上坂廃寺跡	百済系単弁八葉蓮華文	I-1	—	9	12
肥後	立願寺廃寺跡	単弁八葉蓮華文・A型	I-2	—	10	13
	立願寺廃寺跡	複弁八葉蓮華文・B型	I-2	—	10	14
	立願寺廃寺跡	複弁八葉蓮華文・C型	I-2	—	10	15
	渡鹿A遺跡	単弁八葉蓮華文	I-2	—	11	16
	陳内廃寺跡	単弁八葉蓮華文・Ia式	I-2	—	12	17
	陳内廃寺跡	単弁八葉蓮華文・Ib式	I-2	—	12	18
	興善寺廃寺跡	鬼面文・Ia式	I-2	—	13	19
筑前	塔原廃寺跡	単弁八葉蓮華文	接合式?	—	4	
肥後	興善寺廃寺跡	単弁八葉蓮華文・Ib式	接合式?	—	13	
日向	下北方塚原第2遺跡	単弁八葉蓮華文	接合式?	—	14	

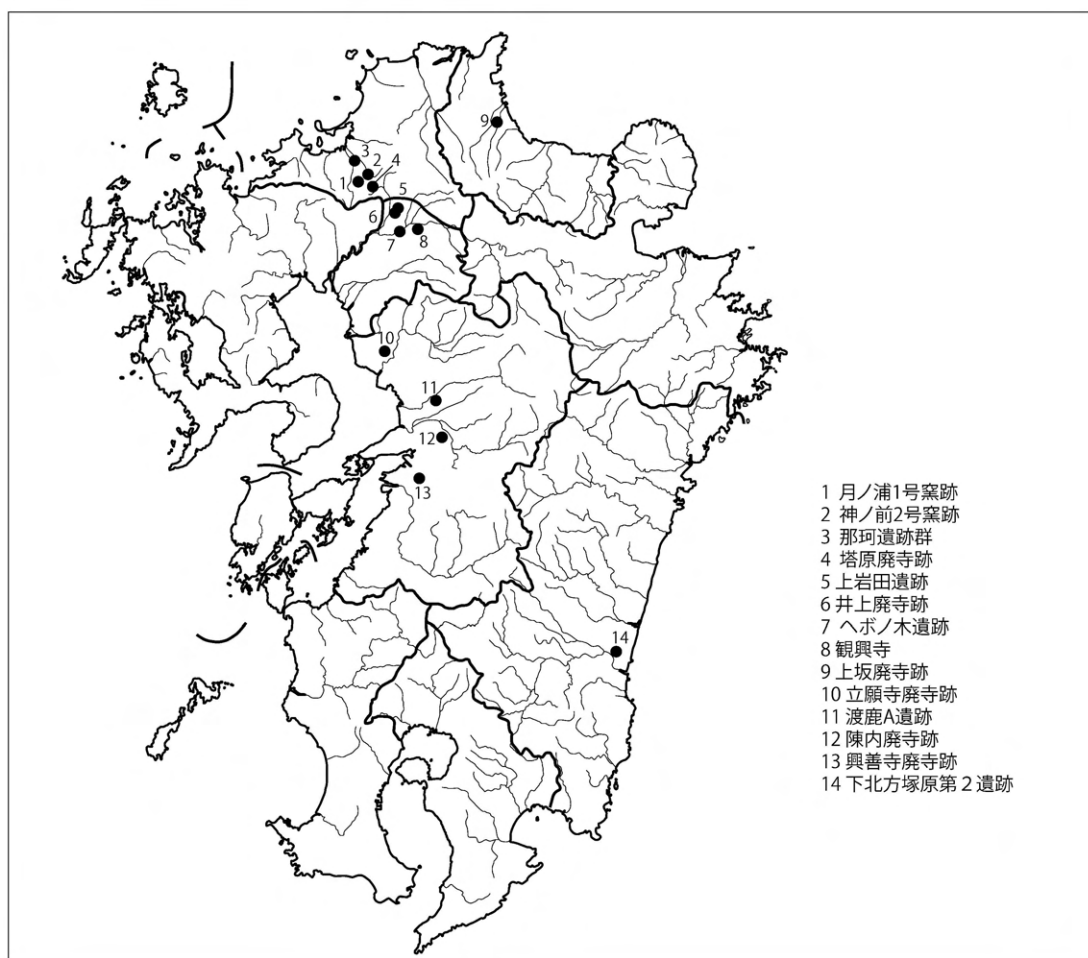
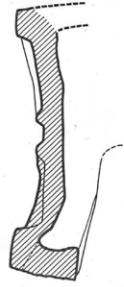
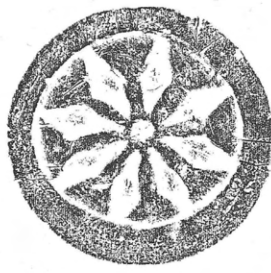


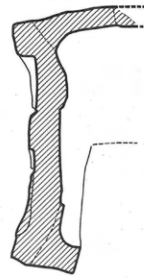
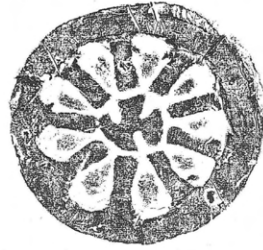
図2 西海道の一本づくり軒丸瓦出土遺跡



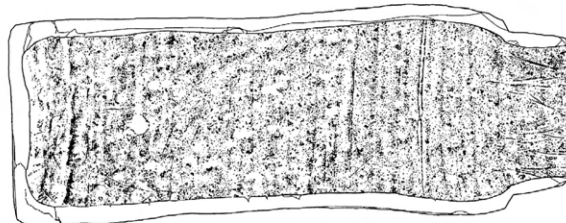
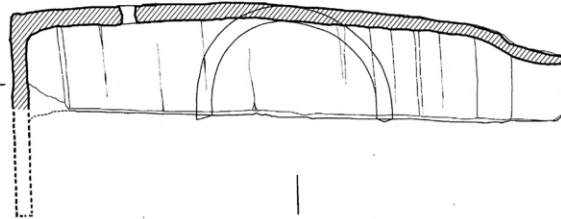
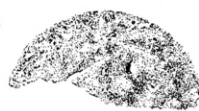
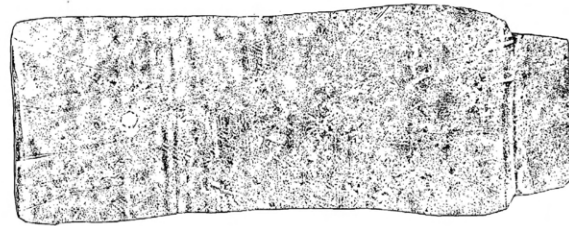
1-1 月ノ浦1号窯跡



1-2 那珂遺跡群



2 月ノ浦1号窯跡

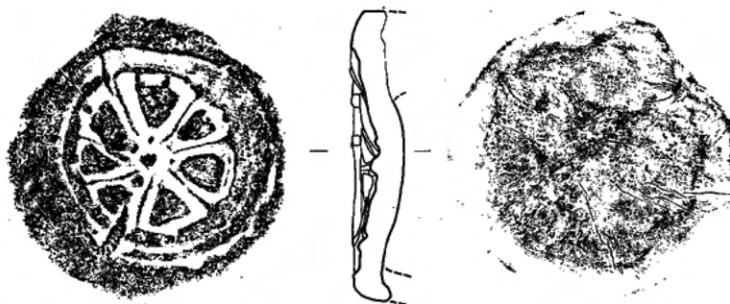


3 神ノ前2号窯跡

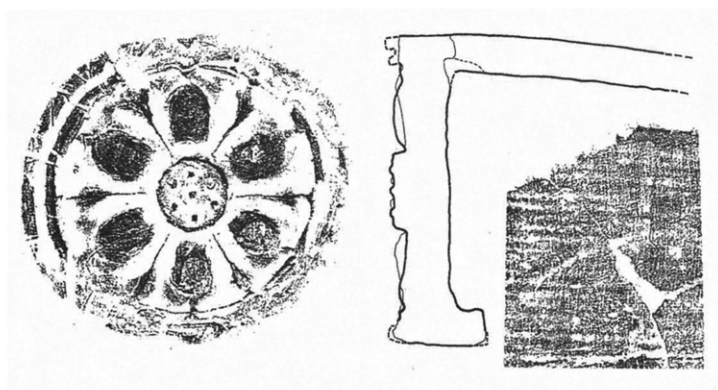
図3-1 一本づくり軒丸瓦 (1~2 : S=1/4, 3 : S=1/6)



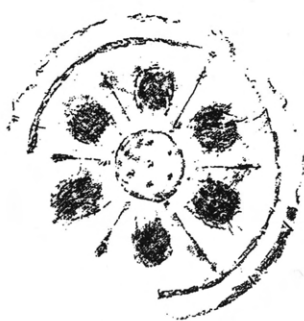
4 那珂遺跡群



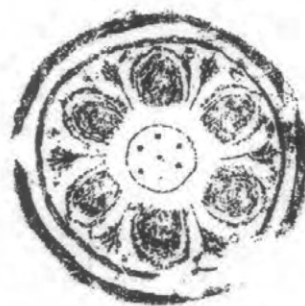
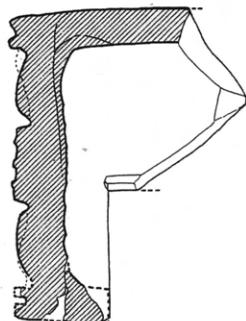
5 那珂遺跡群



6-1 上岩田遺跡



6-2 井上廃寺跡



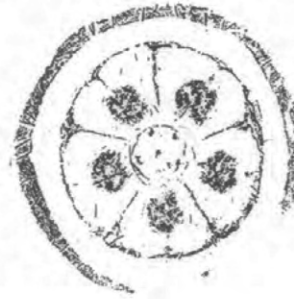
6-3 ヘボノ木遺跡



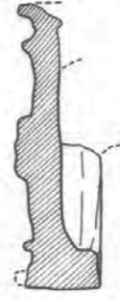
図3-2 一本づくり軒丸瓦 (S=1/4)



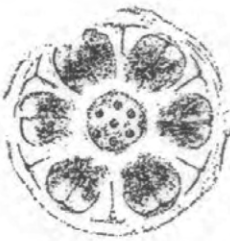
7 ヘボノ木遺跡



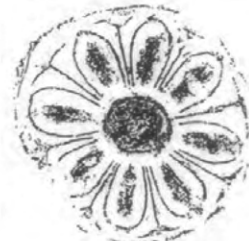
8 ヘボノ木遺跡



9 ヘボノ木遺跡



10 観興寺



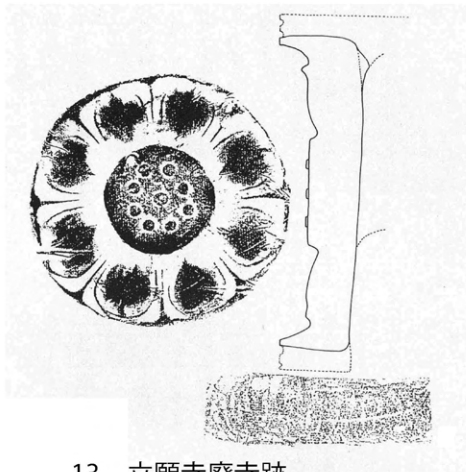
11 観興寺



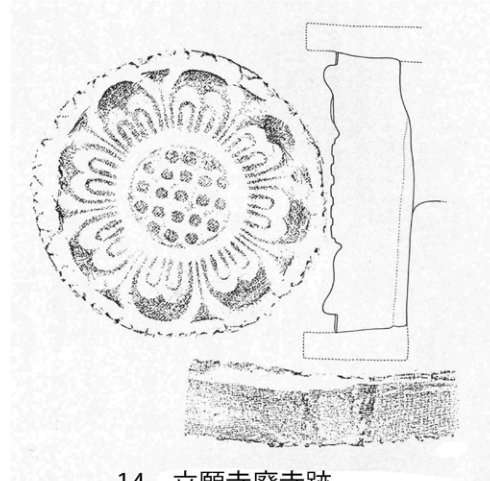
12 上坂廃寺跡



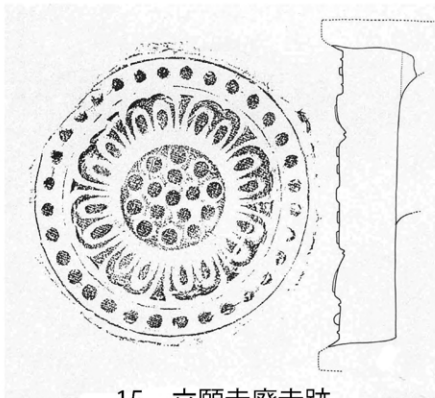
図3-3 一本づくり軒丸瓦 (S=1/4, 9は縮尺不同)



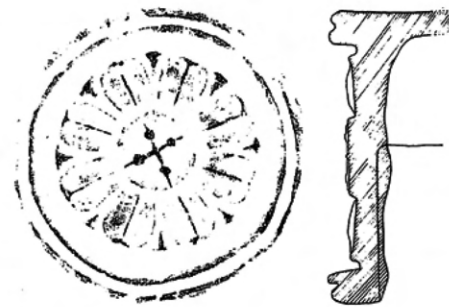
13 立願寺廃寺跡



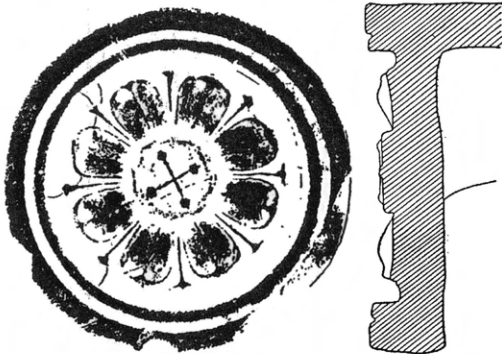
14 立願寺廃寺跡



15 立願寺廃寺跡



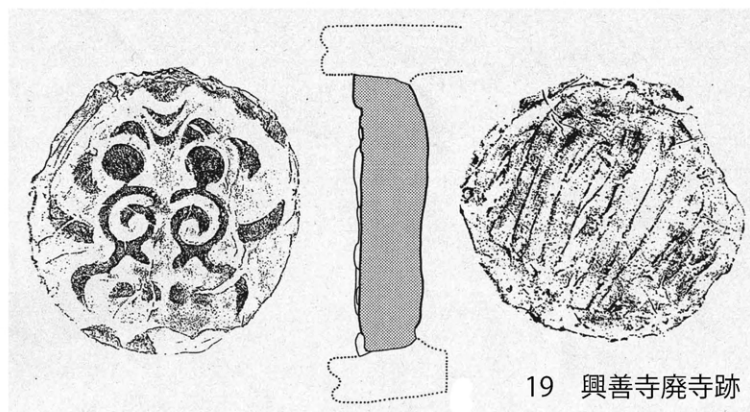
16 渡鹿 A 遺跡



17 陳内廃寺跡



18 陳内廃寺跡



19 興善寺廃寺跡

図3-4 一本づくり軒丸瓦 (S=1/4)

下大利の御大師様 ～御笠郡の数珠繰り行事について～

山村 智子

1. 御大師様

御大師様は真言宗の開祖・空海を「オダイシサマ」、「オタイシサマ」と尊称し、信仰する信者で行う宗教行事のことである（以後、行事のことを御大師様と記す）。この行事は、空海が入定したとされる3月21日の前日の20日を御通夜（オツーヤ）、あるいは恩日（オンピ）、遠忌（オンキ）として、毎月20日の夜に行われる。宿（ヤド）と呼ばれる当番の家に集まり、真言や経を唱えながら大数珠を繰り回す数珠繰りを行う。数珠繰りの後、宿が準備する茶や菓子で歓談するまでが行事の流れである。

また毎月20日の行事ごとに一定金額を積み立て、運営や懇親、時には相互互助として使用されることもあった。

このように特定の信者だけで共同利益（家内安全、健康長寿など）を祈願する集まりのことを講といい、対象とする信仰により男女に分かれて講を持つことがある。戸主（主に男性）だけで行う庚申講があり、本稿で紹介する御大師様は主に女性だけで行われたいわゆる大師講のことである。

御大師様は明治期以降、大野村を含む御笠郡内の農村地域に広がり、多くの集落で毎月20日夜8時に女性たちが宿に参集し、数珠繰りを行っていた（表1）。しかし、昭和40（1965）年代以降、農村部は急激な都市化、あるいは過疎化が進み、職業の多様化や住宅環境の変化、同居世帯の減少等から御大師様を取りやめるところが増えていっ



図1 御笠郡の村配置図

『訂正筑紫国各郡図 御笠十五』
国立国会図書館蔵より作図

() は表1にある地名

人野町市	地区	下大利	時期	オダインサマ	祭日	毎月20日午後8時	神主の おまかせ	十三佛（掛軸）、弘法大師像（掛軸）ほか	供物	豆ご飯（豆はヒース豆御飯）、菓子、果物など	準備する お茶など	お茶、お菓子	十三佛真言 光明真言 「南無大師遍照金剛」 「南無阿彌陀仏」 十句観音経	7回 21回 7回 2回
	内容	毎月20日午後8時に宿（当番の家）に集まり、庫裏に掛けられた弘法大師像と十三佛の掛け軸に線香を上げて、手を合わせる。箱から数珠を取り出し、真ん中の机に真茶の紙を置き、釘を打ちながら、十三佛真言7回と光明真言21回、「南無大師遍照金剛」7回、「南無阿彌陀仏」7回、十句観音経2回を唱え、数珠を繰る。釘を叩く人が唱える回数を数え、1度唱えるごとに1回鳴らし、決められた回数を唱え終わると2回叩く。大珠と中珠が回ってきたら、その都度、礼拝する。数珠繰りが終わると、お茶とお菓子で款談する。宿は祭壇を設け、豆ご飯（豆はヒース豆御飯）や果物、菓子などをお供えし、お菓子を用意する。宿からの申し送り、数珠などが一式入った箱の受け渡しである。焼いた餅、昔は旅行にも行っていた。												
	地区	上大利	時期	オダインサマ（おこもり）	祭日	毎月20日の夜	神主の おまかせ	弘法大師像（掛軸）	供物				「南無大師遍照金剛」	
	内容	毎月20日の夜、当番の家が集まり、八重敷の部屋がはいになるほどの数珠の輪に多勢の人がかかり、数珠を繰りながら、「南無大師遍照金剛」を唱えた。昭和40年頃まで続いた。お茶会だけは続けている。												
	地区	白木原	時期	オダインサマ	祭日	毎月20日の夜	神主の おまかせ	弘法大師像（掛軸）	供物				「南無大師遍照金剛」	
	内容	毎月20日の夜に当番の家が集まり、数珠を繰りながら、「南無大師遍照金剛」を唱えた。												
	地区	乙倉	時期	オダインサマ	祭日	毎月20日の夜	神主の おまかせ	弘法大師像（掛軸）	供物				「南無大師遍照金剛」	
	内容	毎月20日の夜に当番の家が集まり、数珠を繰りながら、「南無大師遍照金剛」を唱えた。												
	地区	番茶	時期	オダインサマ	祭日	毎月20日の夜	神主の おまかせ	弘法大師像（掛軸）	供物				「南無大師遍照金剛」	
	内容	番茶のお大師さまの祭りと盛大に行われ、出店があり、相撲なども行われていた。												
大室町市	地区	五田	時期	オダインサマ	祭日	7月20日	神主の おまかせ	弘法大師像（掛軸）	供物				ガメシバマンジュウ	
	内容	ガメシバマンジュウなどを作り、子どもに接待していた。												
	地区	畑詰	時期	オダインサマ	祭日	毎月18日	神主の おまかせ		供物					
	内容	昔は6月17日にガメシバマンジュウなどを作り、子どもに接待していた。現在も本光寺で行われているそうである。												
	地区	向佐野	時期	観音講	祭日	毎月17日	神主の おまかせ	お観音様（掛軸）	供物			お茶		
	内容	主婦の集まりで、小組ごとに当番の家に来まり、お観音様の機軸を掛けてお参りをし、お茶のみ程度で雑談をした。10鉢掛けでツミキンヨセをしていた。昭和30年代まであった。												
	地区	大佐野	時期	観音講	祭日	毎月17日	神主の おまかせ	お観音様（掛軸）	供物			ガメシバ饅頭とお酒		
	内容	女たちがガメシバ饅頭とお酒を持って、当番の家にお参りに行っていた。												
	地区	大佐野	時期	大師講	祭日		神主の おまかせ	御大師様	供物			お茶、お菓子、酢の物など		
	内容	講が7か所ほどあり、当番の家に女性たちが集まって、お茶・お菓子・酢の物などを食べて話し合いの場であった。お大師様は各戸に祀っている。												
筑紫野市	地区	馬場	時期	観音講	祭日	毎月17日	神主の おまかせ	観音様（掛軸）	供物			寿司または味噌汁・豆御飯		
	内容	毎月17日に各戸から米一台を切り、持ち回りで座をもち、観音様の掛軸を拝んで観音会をした。一口50銭ぐらいを掛けてくじ引きをする給母子講も兼ねていたが、戦時中に消滅した。												
	地区	観音寺	時期	お十七夜（観音講）	祭日	毎月17日の夜	神主の おまかせ		供物			お茶		
	内容	毎月17日の夜、観音寺の庫裏に老若男女の区別なく（子ども）ムラ人が集まって、大きな数珠の五つずつ縛って回しながら、真ん中にある音頭取りに合わせて海歌を唱えながら、数珠繰りをした。お十七夜に使う数珠は、地区に不幸があったとき、お通夜に集まった人が円座を作って死者の供養をする「お数珠繰り」にも用いた。												
	地区	高城	時期	数珠講お通夜	祭日	毎月20日	神主の おまかせ		供物			にぎり飯、煮しめ、お茶	「南無大師遍照金剛」	
	内容	昔は通夜でしていたが、のちに各イエの回り当番となった。10数人で回せばちょうどいいぐらいの数珠で、数珠についている房が自分のところに回ってきたら「南無大師遍照金剛」と唱えて拜む。												
	地区	坂本	時期	お通夜	祭日	4月20日（昔は毎月20日）	神主の おまかせ		供物			小豆飯・煮物・酢の物・煮しめ		
	内容	御大師様はもとお海にあったが、水に流されて、今はカッテンサンに祀られている。お籠りをし、数珠繰りする。												
	地区	吉松	時期	大師講	祭日	毎月20日	神主の おまかせ	弘法大師御影（掛軸）	供物	小豆飯・ガメ煮・酢の物・お神酒		おにぎりなど		
	内容	毎月20日に当番の家で掛軸を掛けて、小豆飯・ガメ煮・酢の物にお神酒を供え、鯛焼、縁香、花をあげる。本人から子供までたくさんの人が集まって数珠繰りをして、お接待にはおにぎりなどが出ている。												
筑紫野市	地区	藤田	時期	大師講	祭日	毎月20日	神主の おまかせ	弘法大師御影（掛軸）	供物	小豆飯・ガメ煮・酢の物・お神酒		おにぎりなど		
	内容	毎月20日に当番の家で掛軸を掛けて、小豆飯・ガメ煮・酢の物にお神酒を供え、鯛焼、縁香、花をあげる。本人から子供までたくさんの人が集まって数珠繰りをして、お接待にはおにぎりなどが出ている。												
	地区	通古賀	時期	大師講	祭日	月1回	神主の おまかせ		供物			簡単なご馳走	般若心経	
	内容	曇天期を避けて月1回当番の家に来まり、般若心経を唱え、数珠繰りする。当番は講中からメシ合つて切って、簡単な御馳走を作ってふるまう。2組あって青年も加わっていたが、現在はおこなわれていない。												
	地区	北谷	時期	大師講	祭日	隔月21日	神主の おまかせ		供物			小豆、飯のにぎり飯		
	内容	ムラ内では、5軒の信者のイエの女性と子どもが、隔月21日に当番の家に来まり、数珠繰りのあと、小豆、飯のにぎり飯を食べて雑談する。講元は輪番。												
	地区	袖須原	時期	観音講	祭日	毎月17日前後	神主の おまかせ	観音堂（聖観音像）、観音像（掛軸）	供物	白御飯		お大師様の白御飯と茶菓子	十句観音経 光明真言	数珠3周回 数珠3周回
	内容	お世話する当番は順番で、4月の観音講は袖須原観音堂で第9時から、4月以外は袖須原公民館で行う。公民館で行う場合は観音像の掛け軸を掛け、数珠繰り前に線香を集り代、お茶を上げ、十句観音講と光明真言を数珠を繰りながら、3周つづ唱える。昔は地区に不幸があったとき、お通夜に大数珠を持っていき、みんなで円座を作って死者の供養をするお数珠繰りをしていて、観音講では方角で数珠を繰るが、通夜の時は反対の右回りで数珠繰りをした。												
	地区	杉塚	時期	お大師様のオツヤ	祭日	毎月20日	神主の おまかせ	弘法大師像（掛軸）	供物			赤飯・サシム・ガメ煮・煮しめなど		
	内容	戦前までは2組において行われていた。												
筑紫野市	地区	紫	時期	お大師様のオツヤ	祭日	毎月20日の夜	神主の おまかせ	弘法大師像（掛軸）	供物					
	内容	講では一人に毎月2千円掛立をして、毎月旅行をしている。これは戦前から続いているそうである。												
	地区	大石	時期	大師講	祭日	毎月20日	神主の おまかせ	弘法大師像（掛軸）	供物					
	内容	明治21年に市川徳三さんが四国から勧誘してきたお大師様があり、毎月20日が通夜で、百万遍の大数珠繰りなどをしている。												
筑紫野市	地区	常松	時期	お大師様のオツヤ	祭日	毎月20日	神主の おまかせ	弘法大師像（掛軸）	供物			お茶・果物（昔は小豆ご飯やカシワ飯、餅など）	ご誂歌	
	内容	忌日（オンビ）であり、女だけがご誂歌を唱える。当番の家にはお大師様の軸を掛け、1時間ほどご誂歌を唱えた後に懇談する。												

表1 数珠繰り行事一覧表

た。そんな中、大野城市教育委員会ふるさと文化財課では下大利の御大師様の記録調査を平成8・15・29（1996・2003・2017）年と継続して実施していた。下大利の御大師様は箱の銘などから少なくとも明治19年6月には行われていたが、行事を行う戸数が減少したことに伴い、平成30（2018）年4月20日に最後の御大師様を行い、132年の歴史に幕を下した。同年7月、下大利の御大師様を行っていた方々から本市教育委員会ふるさと文化財課に数珠繰り道具一式が寄贈され、令和元（2019）年6月1日～8月30日に大野城心のふるさと館2階ミニテーマ展にて「大野城市最後の数珠繰り行事 ～下大利のお大師さま～」展を開催した。

本稿では下大利で行われていた御大師様についてその内容を紹介し、他地域で行われている行事

と比較することで集落の女性たちを中心に営まれてきた行事の役割について考察する。

2. 下大利の御大師様

（1）行事の始まり

下大利の御大師様の行事は明治19年に当時の下大利村の代表が四国八十八ヶ所巡りをしたことに

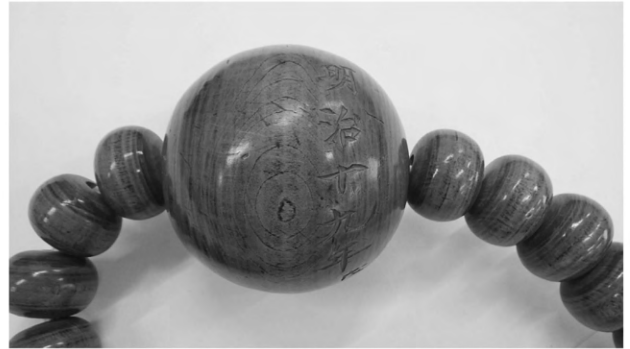


写真1 中玉の刻書

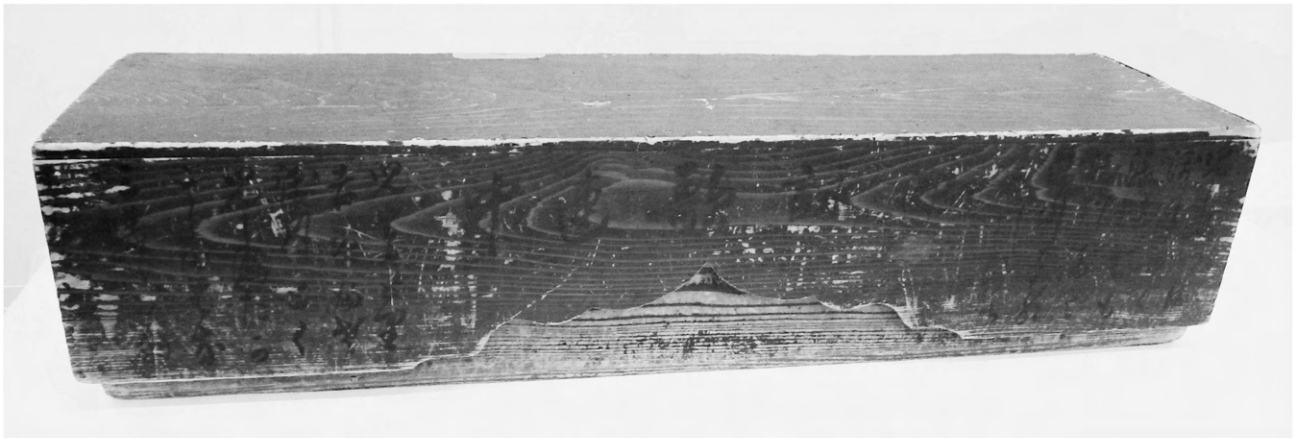


写真2 御大師様で使用する数珠繰り道具一式が収納されている百萬御珠数箱

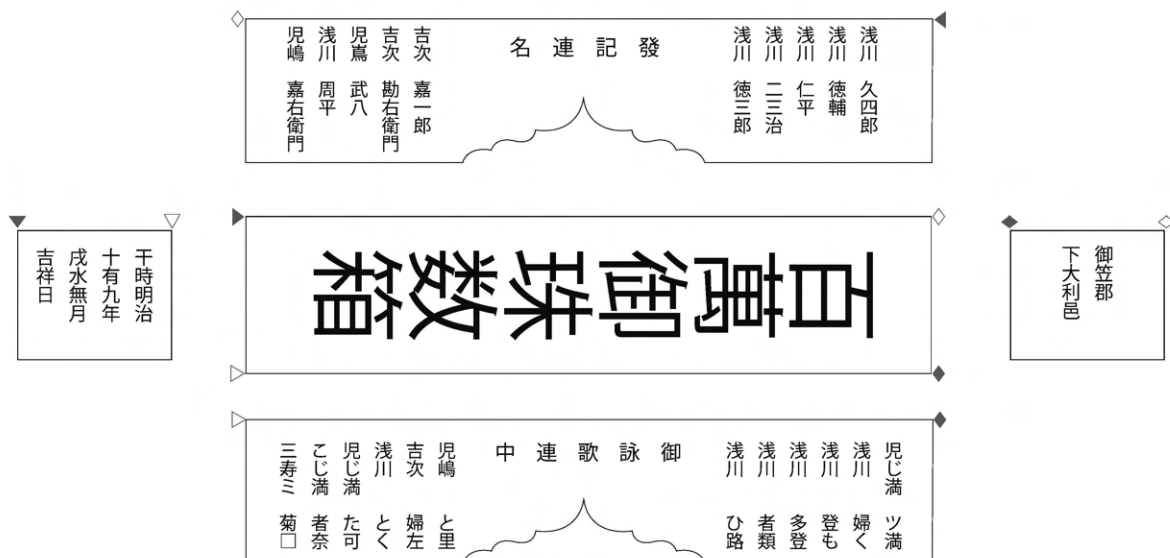


図2 百萬御珠数箱に墨書された文字

村民があやかろうと始めたといわれている。数珠繰りで使用する大数珠の中玉に「明治十九年六月吉日 下大利村」と朱入りの文字が刻まれている。大数珠など道具一式を収納する百萬御珠数箱の蓋外側5面に「百萬御珠数箱」、「下時明治十有九年戌水無月吉祥日」、「御等郡下大利邑」、「發記連名浅川久四郎 浅川徳輔 浅川仁平 浅川二三治 浅川徳三郎 吉次嘉一郎 吉次勘右衛門 児寫武八 浅川周平 児嶋嘉右衛門」「御詠歌連中 児じ満ツ満 浅川婦く 浅川登も 浅川多登 浅川者類 浅川ひ路 児嶋と里 吉次婦左 浅川とく 児じ満た可 こじ満者奈 三寿ミ菊口」が墨書されている。

このことから、明治19年に数珠繰り道具一式が整えられ、行事が始まったことを示している。また22名の内、「三寿ミ菊口」は下大利出身者ではなく、御詠歌連中の女性たちの最後に名を連ねていることから、数珠繰り道具一式を詠えた時に御詠歌を教えていた女性ではないかと考えられる。

(2) 下大利の御大師様の民俗調査記録

ここでは平成8・15・29年と大野城市教育委員

会ふるさと文化財課が実施した「下大利の御大師様」の民俗調査記録を掲載している。平成8年は早瀬ひろ子が、平成15年は丸尾博恵が、平成29年の民俗調査は石木秀啓、林潤也、白濱聖子、山村智子が行い、山村が書き起こしを行った。

【平成8年1月20日】

行事を始めた明治19(1886)年当時は、50軒(下大利村のほぼ全戸)であった構成員も、戦前には15軒になり、現在は9軒になった。昔は男性のおまつりだったが、近年は女性のみで行われている。下大利では2ヶ所で「お大師さま」の集まりがあったが、今も残っているのは、老松神社傍の地区(小字上城戸、下城戸、川路)だけになった。

下大利のまつりでは毎月20日夜8時に当番の家に来るとすぐにお大師さまの掛軸の前に行き、「南無大師遍照金剛」と3回唱えてお参りをし、皆が揃うのを待つ。全員が揃うと、大箱から数珠を取り出し、八畳の間に広げて、鉦を叩く人と念仏の先導者を起点に円陣を組み、念仏を唱えながら30分ほど大数珠をくり回す。大数珠の房付きの大玉と作成年月日(明治十九年六月吉日 下大利村)入りの中玉が自分の前に来たら、押しただいて

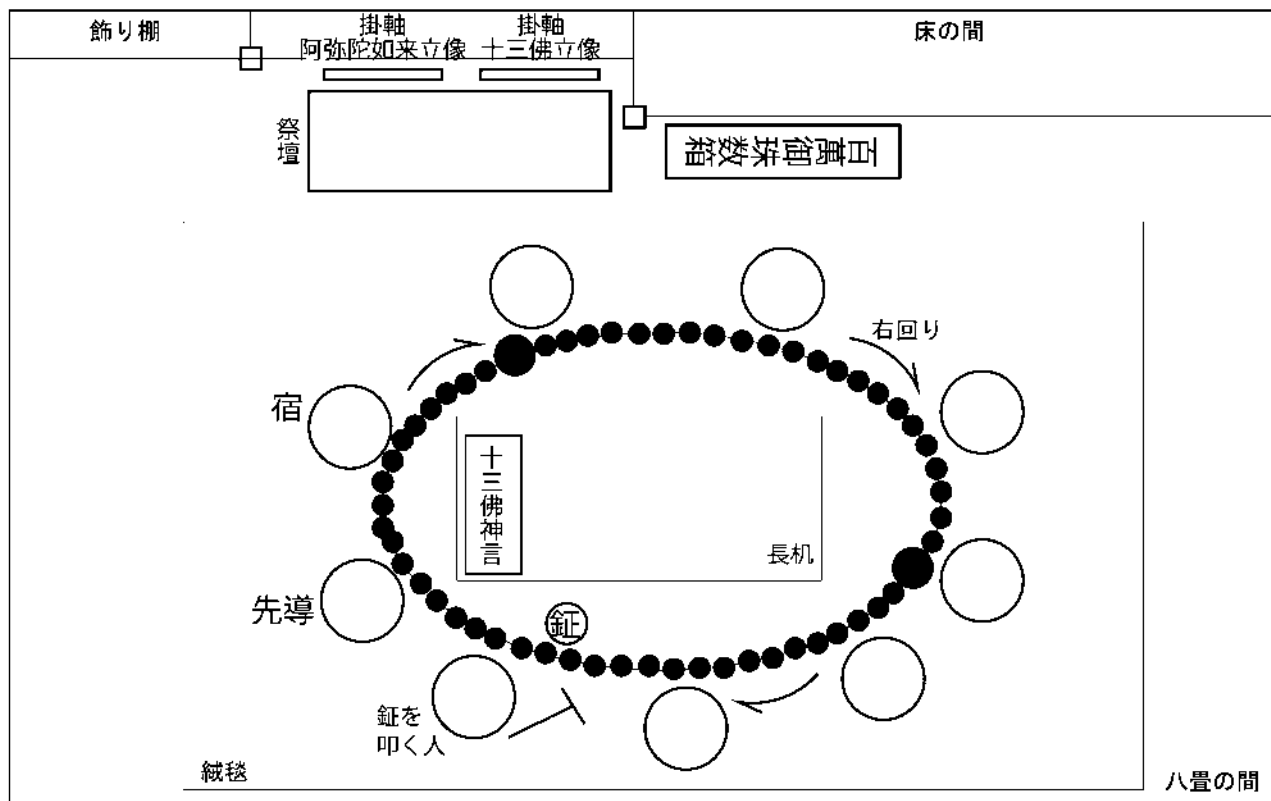


図3 下大利の御大師様の流れ全般図 (平成29年12月20日)

祈りを捧げる。全員が同じ調子で数珠を送るので、どこかで弛むことも張りつめることもなく、念仏と数珠を繰る音が同じリズムで流れる。

30年前までは赤飯付の精進料理を食べていたそうだが、今ではお大師さまに赤飯をお供えするものの、簡素化されて茶と菓子のみになった。

【平成15年12月18～20日】

昔は男性も来ていた。数珠繰りの輪の中に入って唱えていた。子供も来ていた。子供はダメということで大人ばかりになった。

御大師様の御通夜だから、女性ばかりが参加する。病気などの時に御大師様に頼ってしまう。お大師さまを続けるのは意志を引き継ぎたいと思う自分の気持ちである。しかし、子供たちが別所帯になっているので、続けていくのは無理だろう。

数珠繰りではないが、昔は春と秋のお彼岸に御笠八十八ヶ所霊場めぐりに近郊から人がお参りにこられていた。その時はお茶を沸かしてお接待をしていた。下大利には57～65番の霊場がある。

【平成29年12月20日】

(当日の準備)

1. 宿から宿へ申し送り

7戸で構成され、11月20日に当番だった宿が、12月20日の当番の宿に数珠道具一式が入った百萬御珠数箱を持っていき、申し送りをする。

2. 宿の準備

宿では床の間に阿弥陀仏立像と十三佛の掛軸を掛ける。十三佛の掛軸は大珠数箱に納められており、必ず掛けておかなくてはならない。それ以外の掛軸は宿となる家で持っている掛軸（弘法大師御影像や弘法大師修行像、阿弥陀仏立像等）を掛けるため、宿ごとに掛軸が異なる。

宿によっては床の間ではなく、仏壇の横に掛軸を掛け、祭壇を準備する。掛軸の前に白い布をかけた台を準備し、花、菓子、果物、豆御飯を供える。果物や菓子の種類は宿ごとに異なり、ケーキや饅頭がお供えされるときもある。必ず豆御飯を炊き、皿に盛り、供える。豆御飯は季節によって、豆の種類が異なり、初夏の頃はピース豆御飯、秋

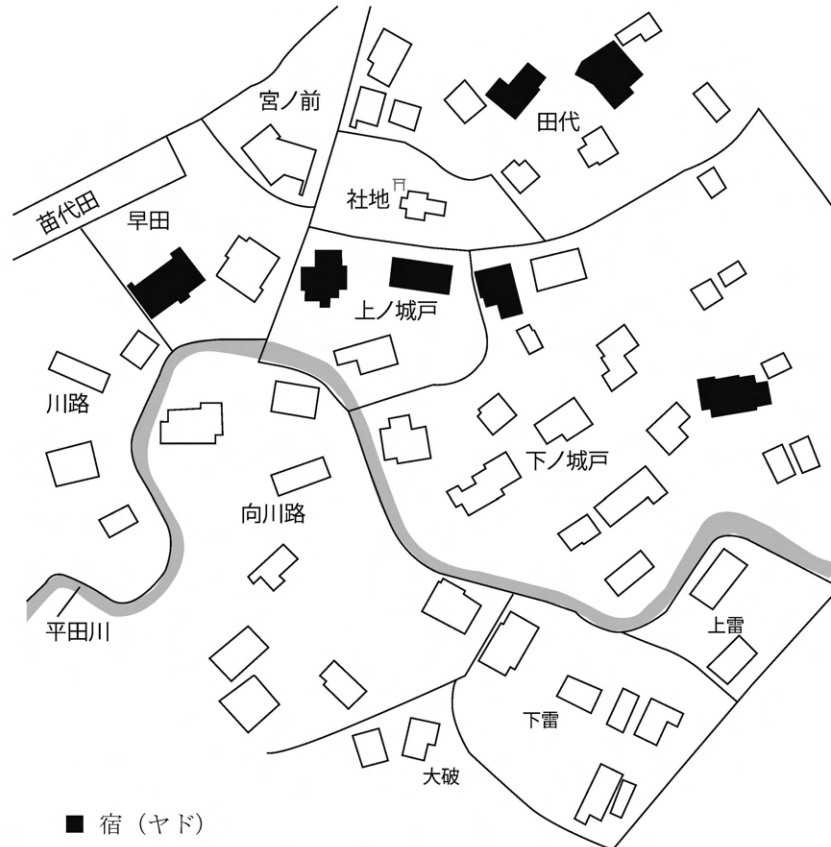


図4 下大利の御大師様の実施地域図（平成29年）



写真3 床の間に掛けられた阿弥陀仏立像掛軸（左）と
十三佛掛軸（右）



写真7 箱から経文と鉦、鉦叩き、大数珠を取り出す



写真4 掛軸の下に祭壇を設える



写真8 鉦の合図で数珠繰りを開始



写真5 豆御飯は必ず供える



写真9 数珠繰りの様子



写真6 茶と菓子を準備



写真10 数珠繰りの様子

から冬なら栗入り赤飯を供える。鉦、線香立て、線香、蠟燭立て、数珠、数珠掛けを用意する。数珠繰りをする際に大数珠が擦れないように絨毯を敷き、部屋の中心に長机を置く。

3. 茶と菓子の準備

湯を沸かし、茶の準備を行う。菓子や果物を人数分、用意しておく。昔は宿が精進料理を用意していたが、準備が大変なため、茶と菓子だけになった。

(宿の行事)

宿に地区の女性たちが集まり始めると、宿の行事が開始される。

1. 祭壇に礼拝

宿に到着したら、まずは祭壇に座り、線香を上げ、鉦を叩き、礼拝した後、講の積立金（2,000円）を供える。

2. 数珠繰り

午後8時、7戸8名の参加者全員で、床の間に置かれた百萬御珠数箱から大数珠、鉦、鉦叩き、十三佛神言が書かれた経文を取り出す。全員で大数珠を持ち、長机を中心にして、円座に座る。大



写真11 大数珠など数珠繰り道具一式を箱に収納する



写真12 数珠繰り後、切れた紐

名称	時代	品質・形状	法量 (cm) ※紐除く	員数	備考
百萬御珠数箱	明治19年 6月	木製 箱型 墨書	95.0×25.0 高さ23.0	1点	蓋に「百萬御珠数箱」、側面に「干時明治十有九年戌水無月吉祥日」、「御笠郡下大利邑」、「浅川久四郎 浅川徳輔 浅川仁平 浅川二三治 児嶋徳三郎 吉次嘉一郎 吉次勘右衛門 児嶋武八 浅川周平 児嶋嘉右衛門」、「御詠歌一同 児嶋満満 浅川婦く 浅川登も 浅川多登 浅川者類 浅川ひ路 児嶋と里 吉次婦左 浅川とく 児嶋満た可 こじ満者奈 三寿ミ菊口」墨書あり
大数珠	明治19年 6月	木製 絹紐 刻書	全長9.52m、珠数434個（大玉1、中玉1、横玉4、丸玉429）	1点	中玉に「明治十九年戌六月吉日 下大利村」刻書あり
経文		継紙	72.4×24.5	1紙	墨書「カイキョウゲ・・・」
経文	昭和37年12月20日	紙製	86.0×24.5	1紙	墨書「十三佛神言・・・」
十三佛立像	(明治時代)	紙製 掛幅装(紙)	66.6×24.3	1幅	修理時裏紙「家紋(三菱に橘)」「福岡市春吉 花月堂寿永 電160278」印字あり 昭和34年以降に修理あり
弘法大師御修行像		紙製 掛幅装(紙)	70.5×26.5	1幅	「弘法大師御修行口御影」
阿弥陀如来立像	(昭和36年)	掛幅装	28.0×11.5	1幅	裏面に落款「本願寺居務釋光尊」、「方便法身尊形」「願主釋」印字あり 包紙「親鸞聖人七百回大遠忌記念 西本願寺」印字あり
叩き棒		木製 釘留め	叩き部12.3 高さ34.6	1点	打部と持ち手部分は丸釘で接合
鉦		金属製	叩き部径8.2 底部径11.1 高さ3.7	1点	裏面に判読不明墨書あり
鉦		金属製	叩き部径7.7 底部径9.7 高さ3.7	1点	裏面に「浅川徳助 児島徳三郎」墨書あり
印鑑袋		紙製 袋	5.0×11.5	1点	朱印「大師」あり
数珠の紐	平成4年～平成29年	絹縫り紐	太4.75m×2 細2.48m	3点	

表2 下大利の御大師講数珠繰り道具一式寄贈品目録（平成30年）

数珠をまたぐことは禁忌とされている。経を詠む人の前に十三佛神言と書かれた紙を置き、鉦を叩く人が横に座る。それ以外に着座のきまりはない。昔は長机を片付けて数珠繰りをしていたが、長机を持ち上げることが体力的に難しくなり、長机を置いたまま数珠繰りを行う。2回叩かれた鉦の音を合図に、十三佛真言が唱えられ、大数珠を時計回り（右回り）に繰る。十三佛真言（各真言×7回）、光明真言（21回）、南無大師遍照金剛（7回）、南無阿弥陀仏（7回）、十句観音経（2回）の順に唱える。真言などを1回唱えると鉦を叩く人が1回鉦を叩き、唱えるべき回数に達すると2回鉦を叩いて、次の真言や経へ誘導する。数珠繰り中に梵天がついた大玉と中玉が回ってきた時は、大数珠を額近くに持ち上げ、両手で頂いて礼拝する。十句観音経を唱え終わると、数珠繰りは終了と

なる。全員で最後に大数珠を持って、礼拝し、大数珠と鉦、十三佛神言が書かれた紙を箱に戻す。

3. お接待

数珠繰りの後、午後11時頃まで宿が用意したお茶とお菓子で歓談する。昔は御通夜（オツーヤ）だから、精進料理（豆御飯付き）を作って食べていた。

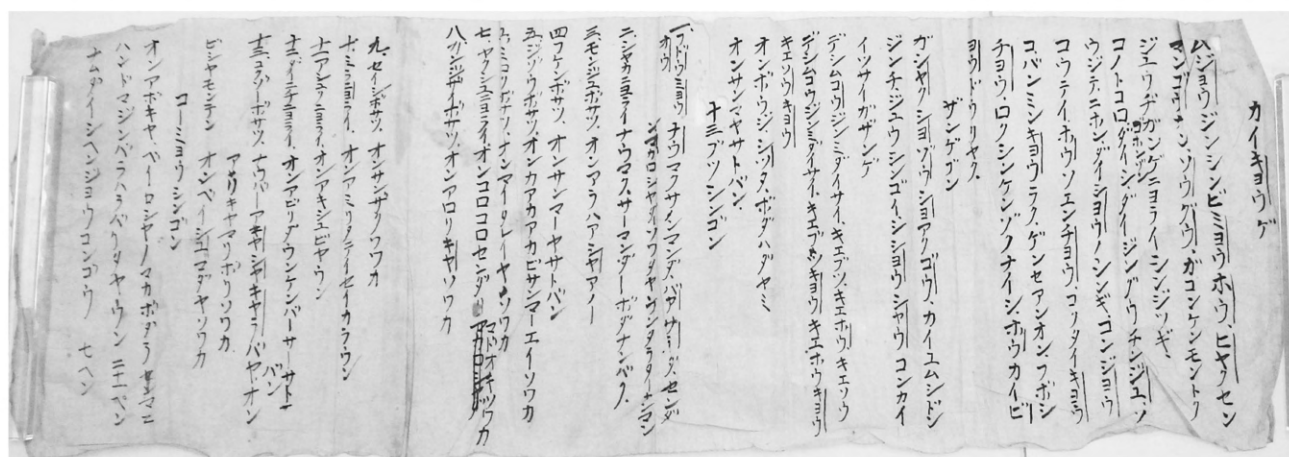
（講の積立金）

1. 親睦

宿の祭壇に供えられた積立金は掛け金を積み立てて、昔は篠栗への参拝に行くバス旅行などを行い、親睦を深めていた。

2. 大数珠の修復

平成4年12月に大数珠の糸が切れたため、積立金で修理に出し、平成5年1月に大数珠が修復されて戻ってきたことがあった。



カイキョウゲ

ムジョウジンシンビミヨウホウ、ヒヤクセン
マンゴウナンソウダウ、ガコンケンモントク
ジュウチガングニョライシンジツキ
コノコロゴホンゾンダイシ、ダイジンクウチンジュ、ソ
ウジテ、ニホン、ダイシヨウノシンギ、コンジヨウ
コウテイ、ホウソエンチヨウ、コクタイキヨウ
コ、バンミンキヨウラク、ゲンセアンオン、フボシ
チヨウ、ロクシンケンゾクナイシ、ホウカイビ
ヨウドウリヤク

ザンゲン

ガシヤクシヨウソウシヨウアコウ、カイユムシドン
ジンチ、ジュウシンゴイシシヨウシヤウ、コンカイ
イツサイガザンデ
デシムコウジンミダイサイ、キエフツ、キエホウ、キエソウ
デシムコウジンミダイサイ、キエフツキヨウ、キエホウキヨウ、
キエソウキヨウ
オンボウジツタボダハダヤミ
オンサンマヤサトバン
十三フツシンゴン

一、フドウミヨウオウ
ナウマクサアマンダ、バアサラダ、センダ
ンマカロシヤダーソワヤウンタラターカンマン
ナウマク、サーマンダーボダナンバク
二、シヤカニョライ
オンアラハシヤアノ
三、モンジュボサツ
オンサンマヤサトバン
四、フケンボサツ
オンカアカカビサマンアイソワカ
五、ジゾウボサツ
オンマイタレイヤソワカ
六、ミロクボサツ
オンコロコセンタリマドオキソワカ
七、ヤクシニョライ
オンアロリキヤソワカ
八、カンジザイボサツ
オンサンザクソワカ
九、セイシボサツ
オンアミタテイセイカラウン
十、ミダニョライ
オンアキシユバヤウン
十一、アシユリニョライ
オンアビリダウンケンバーサーサトバン
十二、ダイニニョライ
ナウバーアキヤシヤカラバヤ、オン
十三、コクゾーボサツ
アリキヤマリボリソワカ
オンペイシユマダヤソワカ
ビシヤモンテン
コーミヨウシンゴン
オンアボキヤ、ペイロシヤノマカボダマニ
ハントマジンバラハラバリタヤウン 二十一 ぺん
ナムダイシヘンジョウコンゴウ 七 へん

上：写真13 経文1「カイキョウゲ・・・」 下：経文1「カイキョウゲ・・・」書き起こし文



写真14 掛軸「阿弥陀仏立像」



写真15 掛軸「弘法大師御影」



写真16 掛軸「十三佛立像」

十三佛神言

一 ふどうみよ おうまきあまんだばあきらた
 せんだんまあかしやたあそわ
 やうんたやたあかんまん。
 のうまきあまんだあぼたなんばく。
 二 しゃかのらい おんあらはあしやあのー。
 三 もんじゆぼさつ おんさんまあやさとばん。
 四 ふけんぼさつ おんかあかあびさんまあ
 えいそわか。
 五 じぞうぼさつ おんまいたれいやそわか。
 六 みろくぼさつ おんころころせんたりまどおき
 そわか。
 七 やくしのらい おんあろりきやあそわか。
 八 かんじぎいぼさつ おんさんざくそわか。
 九 せんしぼさつ おんあみりだていせいからうん。
 十 みだのらい おんあきしゆびやあうん。
 十一 あしゆりのらい おんあびりだうんけんばあ
 さあさとばん。
 十二 だいにちのらい のうまきあまんだあきらた
 せんだんまあかしやたあそわ
 やうんたやたあかんまん。
 十三 こぞうぼさつ おんまいたれいやそわか。
 びしやもんてん おんべいしゆまだやそわか。
 こうみょうしんごん
 一 おんあきやべいろしやのまかばら
 らまにはんろまじんばらばら
 たやうん。 二十一 べん
 一 なむだいしへんじよおこんこお
 七へん
 昭和三十一年十二月廿書之

十三佛神言

一 ふどうみよ おうまきあまんだばあきらた
 せんだんまあかしやたあそわ
 やうんたやたあかんまん。
 のうまきあまんだあぼたなんばく。
 二 しゃかのらい おんあらはあしやあのー。
 三 もんじゆぼさつ おんさんまあやさとばん。
 四 ふけんぼさつ おんかあかあびさんまあ
 えいそわか。
 五 じぞうぼさつ おんまいたれいやそわか。
 六 みろくぼさつ おんころころせんたりまどおき
 そわか。
 七 やくしのらい おんあろりきやあそわか。
 八 かんじぎいぼさつ おんさんざくそわか。
 九 せんしぼさつ おんあみりだていせいからうん。
 十 みだのらい おんあきしゆびやあうん。
 十一 あしゆりのらい おんあびりだうんけんばあ
 さあさとばん。
 十二 だいにちのらい のうまきあまんだあきらた
 せんだんまあかしやたあそわ
 やうんたやたあかんまん。
 十三 こぞうぼさつ おんまいたれいやそわか。
 びしやもんてん おんべいしゆまだやそわか。
 こうみょうしんごん
 一 おんあきやべいろしやのまかばら
 らまにはんろまじんばらばら
 たやうん。 二十一 べん
 一 なむだいしへんじよおこんこお
 七へん
 昭和三十一年十二月二十日 書之

上：写真17 経文2「十三佛神言」 下：経文2「十三佛神言」書き起こし文

平成29年12月20日、数珠繰りが終了した直後に、音を立てて大数珠の紐が切れた。つい先ほどまで数珠繰りをしていた時は、大数珠の紐が切れる兆候などまるでなく、下大利の御大師様での数珠繰りは今日が最後としていた日に大数珠が切れ、下大利の女性たちも調査を行っていた文化財課職員も一同哑然といった雰囲気になった。

切れた大数珠は講の積立金で仏壇屋に修理を頼み、京都で修理された。修理を終え、下大利に戻ってきた大数珠を使い、平成30年4月20日に同じ宿で数珠繰りを行った。明治19年6月に始まった下大利の御大師様は、平成30年4月20日が本当に最後の行事となった。

その後、平成30年7月、行事を続けられていた下大利の女性たちを代表して浅川澄代氏から下大利の御大師様で使用されてきた数珠繰り道具一式15点が、大野城市教育委員会ふるさと文化財課に寄贈された。

(3) 寄贈資料から見た行事の変遷

寄贈資料の中で注目されるのが、2種類の経文である。これらの経文は大数珠を繰り回す数珠繰りの間、唱える真言や経を書き記したものである。

経文1はすべてカタカナ表記で書かれており、真言宗の檀家勤行集にほぼ添った内容が記されているが、カイキョウゲ（開経偈）とザンゲブン（懺悔文）の間に、願文が挿入されている。願文には「此所御本尊大師、大神宮鎮守、総じて、日本、大小の神祇、今上皇帝、法僧縁（フツモリ）、国体強固、万民享楽、現世安穩、父母子（フツモリ）、六親眷属、乃至法界平等利益」と記され、下大利の御大師様の行事が弘

法大師を御本尊として、すべての人々の現世利益を願う内容となっている。願文の作成には真言宗の僧や門徒との関わりが推定される。

経文2は「昭和三十七年十二月二十日書之」と記載され、平仮名表記で十三佛真言と光明真言が記載されている。この経文は児嶋しずのさんが記したと伝えられており、真言の文字が神言と記されていたり、真言に欠落があったりと口伝の内容を書き起こしていると考えられる。

このことから、下大利の御大師様が開始された明治19年頃には、行事の開始や勤行の場に真言宗の僧や門徒との関わりがあり、真言宗の檀家勤行が戸主を中心に営まれていたが、徐々に女性中心の行事へと変わっていく中で開経偈や願文、懺悔文が欠落したと考えられる。その後、昭和37年に経文2が記された時には、十三佛真言と光明真言のみになっていた。さらに、平成15年の民俗調査記録によると、十三佛真言と光明真言の後に、南無阿弥陀仏と十句観音経が加わった形で平成30年4月20日まで数珠繰りを行っていたことが分かった。

3. 数珠繰り行事の役割

下大利の御大師様は祭壇に掛けられる十三佛立像の掛軸以外は宿となっている家の宗派に任せられていたり、真言宗の檀家勤行集にはない「南無阿弥陀仏」や「十句観音経」が加わったりと、緩やかでだらかな信仰の一面が見られる。このような行事の変化は同じ集落の中で生活をする女性たちによってもたらされたものである。



写真18 柚須原の観音講（筑紫野市）



写真19 大石の大師講（筑紫野市）

そしてこの行事の担い手の大半が他地域から嫁いできた女性たちである。春と秋の彼岸詣りの御接待、神社の祭りの準備、冠婚葬祭のお手伝い等、共同で行う行事は少なくはない。下大利村の通婚圏を知る上で重要な行事に「娘札打ち」がある。この行事は娘が14～21歳くらいまでの間に、御笠郡十三ヶ所観音霊場を下大利から吉松・大佐野・二日市・立明寺・山口・平等寺・大興善寺・原田・天山・吉木・大石・柚須原・香園・本道寺・太宰府・観世・中村・御陵などを先導者や村役とともに御詠歌を唱えながら巡礼を行う。これは単に信仰のためだけでなく、巡礼する土地の人々に婚期のきた村の娘をそれとなく知らせるのが重要な目的の一つであった。巡礼した土地はそのまま通婚圏となり、昭和10年頃の戦前まで「娘札打ち」が続けられた。巡礼地では下大利と同じく数珠繰りを行う御大師様のいわゆる大師講の他に、観音講を行う地域もあった。観音講は毎月17日の夜に当番の家に集まり、「十句観音経」や「光明真言」等を唱えながら、数珠繰りを行う行事で、現在は筑紫野市柚須原で行われている。このような地域との通婚は従来の講の作法に影響を与え、また各家々の宗派の違いも加わり、十三佛真言・光明真言・南無阿弥陀仏・十句観音経を唱える「下大利の御大師様」の行事が形成されていったと考えられる。下大利で毎月20日の夜8時から御大師様が行われ、女性たちが円座になり数珠を繰ることで発生する鉦と数珠を繰る音、先導者に従って唱える真言だけが響き、人数珠は滞ることなく廻り続ける。数珠を繰るという行為は女性たちが経文1の「願文」にある「乃至法界平等利益（みんなが幸せになりますように）」を願うことであった。数珠繰りの後、茶と菓子で「おしゃべりをする」とこの行事が長く続いてきた大事な要素だったと考えられる。月に一度、同じ集落の女性たちだけで夜遅くまで繰り広げられたおしゃべりの内容まで聞き取ることはできなかったが、他地域から嫁いできた女性たちにとって、家ごとの先祖祭祀を越えた信仰にふれる場であり、集落の情報を知る場でもあり、なにより同じ集落で暮らす女性たちの大事な息抜きの場であったのではないだろ

うか。

また、令和元年に大野城心のふるさと館で「大野城最後の数珠繰り行事 ～下大利のお大師さま～」展を開催した際に、市民の方から「畑詰ではまだ毎月18日に数珠繰りを行っている。」「上大利では数珠繰りをしていないけど、今でもお茶会は続けている。」等の情報が寄せられた。

これらの情報を元に今後も継続した民俗文化財の調査を進め、「大野城最後じゃなかった数珠繰り行事」展（仮）の開催を目指しつつ、きめ細やかな地域の文化財情報の発信に努めていきたいと考えている。

謝辞

最後に本稿をまとめるにあたって、ご協力いただいた個人や団体の方々に記して感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。浅川和代、浅川澄代、浅川ヒデ子、浅川正代、市川千香枝、市川敏光、市川正博、児嶋恵美子、児嶋絹子、児嶋邦次、小嶋恵子、渋谷恵子、長谷繁光、長谷みゆき、長谷ゆき子、柚須原婦人会

【参考文献】

春日市、1994、『春日市史』下巻。
大野城市、1995、『大野城市史』民俗編。
筑紫野市、1999、『筑紫野市史』民俗編。

山村 智子（やまむら ともこ）

大野城市教育委員会ふるさと文化財課職員

市民ミュージアム 大野城心のふるさと館紀要
第1号

発行日 令和3年10月25日
編集発行 市民ミュージアム 大野城心のふるさと館
〒816-0934
福岡県大野城市曙町3丁目8-3
TEL 092-558-5000
印刷 山口印刷株式会社 福岡営業所
〒819-0013
福岡県福岡市西区愛宕浜2丁目2-1-705号
TEL 092-881-3502